マスクドヒーロー・エグゼ

武内ヤマト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「変身！」

その掛け声は少年にとって戦いの合図。

２０１７年突如日本の各地で起きた地殻変動により地中に埋もれていたピラミッドが発掘された。調査隊が派遣されたが一週間以内に全員行方不明。その後ピラミッドは崩落し調査は完全に打ち切られた。

その一年後のこと。

ピラミッドに封印されていた変身能力を持った超古代の日本人・怪人（エクシード）が殺人を犯し始めた。

凡人少年――五条晴也は『エグゼ』となって闘い、特撮好きの天才発明家の少女――天道空が武器を作る。
時を越え、超古代の戦いが始まる。
毎週月曜日午前８時に投稿していきます！
投稿日が代わる場合は、活動報告やＴｗｉｔｔｅｒでおしらせします。

目次

第一章　復活の時
第1話　悪魔・降臨 ―― 1
第2話　戦士・変身 ―― 10
第3話　傷心・苦悩 ―― 19
第4話　予兆・前兆 ―― 26
第5話　開戦・駆動 ―― 34
第6話　覚悟・闘志 ―― 41
第7話　換装・必殺 ―― 48
第8話　余韻・衝撃 ―― 57
第二章　敗北は成長の糧になる
第9話　白兎・鈍感 ―― 65
第10話　悪鬼・焦燥 ―― 73
第11話　跳躍・短鎗 ―― 80
第12話　治癒・新手 ―― 88
第13話　稲妻・長鎗 ―― 95
第三章　立ちはだかるは氷壁
第14話　烏人・晩餐 ―― 107
第15話　流言・疑心 ―― 113
第16話　氷装・敗北 ―― 120
第17話　日常・誤解 ―― 128
第18話　恐大・厳火 ―― 135
第四章　もっと強く
第19話　食前・挨拶 ―― 143
第20話　強靭・暴牛 ―― 149
第21話　特訓・過去 ―― 156

第２２話　新技・披露　164
第五章　君に明日を
第２３話　雨流・希望　169
第２４話　自己・嫌悪　176
第２５話　白霧・明日　182
第六章　走れ、エグゼイダー！
第２６話　殺戮・俊足　191
第２７話　常識・逃走　199
第２８話　再戦・助言　205
第２９話　闘争・炎拳　211

第一章　復活の時

第１話　悪魔・降臨

２０１７年。日本のどこかにある発掘現場。

そこには日本では珍しいピラミッドが埋められていた。ただでさえ日本でピラミッドが発見されるという初の出来事に加えて、埋められていたという不可思議な状態に、日本だけでなく、各国のメディアで大きく報道された。

地中に埋もれていたピラミッドは、ある日、日本の各地で突如として起きた地殻変動によってその姿を公に晒すことになったのだ。幸いにも山奥で起きたことにより、町に被害は出なかったものの、地中にピラミッドが埋まっていたという事実に日本は震えていた。

そんな中、当然のようにピラミッドへ調査隊が派遣された。隊員の中には日本人ではない者もいた。それもそのはず、何せピラミッドが埋まっていたのだから。

不可思議な状態で発見されたピラミッド。それは、彼等にとって世紀の大発見になるかもしれない、まさに宝庫のような存在だった。しかし、調査隊が派遣されて一週間も経たない内に全員が行方不明となり、調査は完全に打ち切られた。それだけならもう一

度調査隊を派遣すればいい、と考える者もいたのだが、調査が打ち切られた理由はもう一つある。

「日本のピラミッド崩落か。あれからまだ一年しか経ってなかったのか」

そう。日本に出現したピラミッドは一夜にして崩壊してしまったのだ。一説には地殻変動によってもともと崩れかかっていたらしいが、確かな原因は一年経っても明らかになっていない。唯一の目撃証言でも、ピラミッドから光の柱が伸びた、という訳の分からないオカルトチックな言葉に、誰も耳を傾ける者はいなかった。

短髪黒髪の少年は朝のニュース番組を見ながらそのことを思い出していた。

「ってことは、アイツが学校に行かなくなってもう一年になるのか。まあ、無理もねぇか。両親共々行方不明だからな」

人のことは言えねえけど、と付け加え、短髪黒髪の少年は窓から隣の家に視線を向ける。外からでは全く分からないほど人気が無いが、一人だけ住んでいるのは確かだ。

ピロン、と机の上に置いていた携帯電話に着信が入る。二つ折りの携帯電話を開くと隣の家の住人からのメッセージだった。ハートマークばかりのメール文に憂鬱に成りながらも少年は最後まで文章を読み切る。

「未来の旦那様へ。今日暇ですか？　暇ですよね？　お家デートしましょう！　待ってます！　未来の妻より」

ちゃんと声色を変えて読んでしまう辺り、自分は律儀で紳士的な人間だ、と思いながら少年は自称「未来の妻」の元へ向かった。それも大きな溜め息を付いて。

玄関のチャイムを鳴らすと数秒もしない内に「開いてますよ」とチャイムを通して言われた。

開いてていいのか、と思いながら少年は玄関を潜る。

「お邪魔しまーす」

「はーい！」

歓喜に満ちた可愛らしい少女の声が廊下の奥から聞こえてくる。それと同時に聞こえてくる足音は、まるで全力疾走しているのでは、と思ってしまうほどに勢いが付いている。そうして廊下から現れた少女は満面の笑みを浮かべ少年に突撃する。

少年は「無理」と言って身体を横へ移動させ、無慈悲に少女の好意を無にする。

だが、それを予測していた少女は、見事な足裁きで方向転換、横っ跳びし、少年にタックルならぬ抱きついた。

「ぐは……っ！」

「まだまだですよ、晴也先輩！　ぎゅーっ!!」

晴也先輩――五条晴也は少女の絞め技に悶えながら、少女の両頬を引っ張る。

「離れろ、空！」

晴也に頬を引っ張られながらも空――天道空は首を横に振り、尚も抱き締める。いや、抱き絞める。

「いい加減にしねぇともう来てやんねぇぞ！」

晴也がそう言った途端、空の抱き締める力は弱まった。それどころか世界の終わりとでも言いたげな表情を浮かべ、晴也の顔をジッと見つめる。やがて晴也から離れると涙目になりながら首を横に振った。その仕草を不覚にも可愛いと思ってしまった晴也は、溜め息を付いて口を開ける。

「それで何の用だ？　折角の土曜日を優雅に過ごそうと思ってた俺を呼び出すとは、相当のことだろうな？」

「何言ってるんですか。先輩は未だに童貞でただの暇人じゃないですか」

「童貞は余計だ！　て言うかなんで知ってんだよ！」

「やだ、そんなこと……。女の子に言わせないで下さい」

空は真っ赤になった顔を両手で隠す。

「え、待って。お前ホントに俺の何知ってんの？」

「ベッドの下と本棚の本の奥にあるモノとか……」

「……え」

「でも、あれは友達から貰ったものですよね。先輩にあんなモノ買える勇気無いですも

んね。代わりに処分しておきましたから」
「は？」
　晴也は平然と言う空にツッコミを入れるのを忘れ、ある意味で恐怖を覚えていた。そうとは知らず空はスキップをしながらリビングの方へ行ってしまった。後を追うように晴也もリビングに行くが、自分のプライベートがどうしてここまで漏れているのか気になって仕方なかった。
　お互いに机を挟んで絨毯に座る。
　空の思惑通り事が進んでいたら、二人して同じ側に座っていた。しかし、晴也のプライベートを知り過ぎていることをうっかり口を滑らせてしまったせいで今に至る。
「それで、用件は？」
「もう一年ですよね。私たちの両親が行方不明になって」
　晴也と空の両親はピラミッド調査隊のメンバーだった。そして、空の父はその中でも随一の頭脳を持っており、名高い発明家でもあった。
「ああ、そうだな」
「そして、私が本格的な発明家になってぼろ儲けし始めて早一年になります」
「真剣な空気が台無しだな、おい」
　えへへ、と頭を掻く空。

褒めてねぇよ、と言いたげな表情を晴也は浮かべるが、気にせず空は話を続ける。
「そろそろ遺言にあった『始まりの日』なんですよね」
「そろそろと言うかあと三時間だな」
始まりの日。それはピラミッドに封印されていた災厄の存在達が復活する日。もしくは活動を再開する日。二人の両親が行方不明になる直前に、晴也には携帯電話の留守電、空には手紙で伝えられていた。それが唯一の遺言だった。
空の手紙には何かの鉱石で作られたレンズ状のものと何かの設計図が同封されていた。
「そんでその設計図の物は完成したのか？」
「はい。昨日の、ていうか今日の朝6時に」
「徹夜したのか？」
「はい。それに関連したガジェットとかツールを同時進行で作っていたので」
「流石だな」
「いえいえ。全ては先輩のためです」
「俺のため？」
「はい」
満面の笑みで頷く空。

「だって先輩は私を見捨てなかった未来の旦那様なんですから」
「そうかよ」
　呆れて吐き捨てるように言うと晴也は立ち上がった。
「ちょっと散歩に行ってくる」
「なら、これも一緒に持っていって下さい」
　そう言って空が机の上に置いたのは、変わった形をした二つ折りの携帯電話と鉱石のレンズが目立つ機械仕掛けのバックルだった。
　晴也は特に躊躇する素振りを見せず、それ等を受け取った。
「そんじゃ行ってくる」
「はいはい。いってらっしゃいませ～」
　手を振って見送る空。それを見ようとしない晴也ではあるが、一応、手だけは振り返して天道家を後にした。
　堂森町・今は使われていない廃工場。
　そこには廃工場を取り壊すために何十人もの作業員がいくつかの団体に別れて作業を行っている。ある団体は角材を一カ所に集めて運び出し、ある団体はショベルカーなどの重機を動かして取り壊し作業を黙々と行っている。
「おーい！　一旦休憩にするぞー！」

「はーい！」

作業員のリーダーがそう言うと一同に休憩を取り始める。

まさにその時だった。

「うわあああああぁ――！」

一人の男性作業員の悲鳴がその場に響き渡った。それと同時に転落事故が発生した。それも連続して。この廃工場の中で一番高いものは十階近くある。そこで作業をしている者が迂闊に窓際に近寄るはずがない。仮に近付いたとしても命綱は装着しているはずだ。しかし、それでも転落事故が続き、外から見ていた作業員達は驚きの余り腰を抜かして地べたに尻餅を付いていた。そんな中、先に冷静さを取り戻した作業員はあることに気が付く。

「逃げてるのか？」

飛び降りた彼等は逃げるように飛び降りているのだ。十階近くある高所から飛んで逃げても地面に激突して即死のはずなのに。

それなのにどうして。

他の作業員達も徐々に冷静さを取り戻している中、一人の作業員が呟いた。

「なんだ、あれ」

それを聞いた作業員が呟いた作業員と同じ方向を見やる。

人間。いや、人間に近い姿をした化け物だ。
両側頭部から一本ずつ角が生えている。そして、目は八つ。まるで蜘蛛のような怪人はまた一人、また一人と作業員を投げ飛ばしていく。
下にいた作業員達は戦慄した。
どこかの趣味の悪いコスプレイヤーが殺人鬼になったのかと思いきや、どう見ても特殊メイクとは思えないリアリティを感じる。本物の怪人なのだ。その証拠に粗方殺し終えたのか蜘蛛のような怪人は飛び降りた作業員達と全く同じ高さから跳躍して、口から糸を吐き、固定するとターザンのように身体をスイングさせて着地した。
下にいた作業員達は、次は自分の番だと本能的に感じ取り、その場からいち早く逃げようと駆け出す。
蜘蛛のような怪人はその姿を見てゲラゲラと高らかに笑いながら、逃げ惑う獲物を狩るため駆け出すのだった。

第2話　戦士・変身

天道家・地下室。

天道空は五条晴也が家を出た後、地下の作業部屋に籠もり新たな発明をしていた。

この地下室には空が今まで作ってきた発明品の数々がいくつもの棚に飾られている。もしくは床に転がっている。それらを基に稼ぎをしている空は、ぼろ儲けで、働くということを知らないまま所謂お金持ちになってしまった。

そんな地下室は以外と広く、独り暮らしなどでよく使われるアパートの一室の三倍はある。その中を悠々と飛び回るカブト虫。

しかし、空は気にしている様子を見せず、当たり前のように作業をしていた。

そんな時だった。

ピーピーピー！　と室内に警報が鳴り響く。この警報が鳴るのはある出来事が起きた時だけだ。

「……出た」

空はそう言うと手をカブト虫に向けてかざす。すると、カブト虫は吸い込まれるように空の掌に着陸した。そして、瞬く間に二つ折りの携帯電話に変形する。

ビートルフォン。それがこのカブト虫型全自動携帯電話の名前だ。
空は急いで晴也に渡したビートルフォンの対となるスタッグフォンに電話を掛ける。
「あ、もしもし！　先輩！」
『そんなデカい声出さなくても聞こえてるよ。つーかなんだよこの携帯電話。クワガタに変形したぞ』
「そんなことより！」
『そんなことって……』
「出ましたよ。一体目が」
『一応、聞くけど場所は？』
「町外れの今は使われていない廃工場です」
『そこってさ、今工事中の所だよな』
「そうです！　私も今から出るので先輩も向かって下さい！」
空はそう言うが返事が返って来なかった。どうしたのか、と聞こうとした時だった。
『今本人が目の前にいるんだけど』
「え!?」
『蜘蛛と人間が融合したみたいな感じだ。特撮によく出てくる蜘蛛怪人みたいだ。まあ、取り敢えず、何とかしてみるから』

「何とかって……」

『お前が作ったバックルはそう言うものなんだろ』

そう言って向こうから一方的に電話を切られた。

空の胸の内に不安が込み上げてくる。段々と体温が下がり身体が震えていくのを感じた。

怖い。

怖いよ。

私が作った発明品が役に立たなかったら。

そう思えば思う程、空は椅子から腰が離れなくなっていた。

「先輩、ごめんなさい……」

すぐに悟った。

バックルを作ってしまったことを後悔している自分を。戦うのは自分ではなく晴也だというのに。

堂森町・今は使われていない廃工場。

短髪黒髪の少年――五条晴也はスタッグフォンをズボンのポケットに入れると、斜めがけしていたボディバッグから鉱石のレンズが目立つ機械仕掛けのバックルを取り出す。

「バックルだから……」
　晴也は言いながら腹部にバックルを当てる。するとバックルの両サイドからベルトが伸長し、晴也の腰に巻き付き、背面で合体する。完全なベルトとなったバックルに驚愕する晴也。それを見ていた蜘蛛怪人がある一点を見つめていることに気付く。
「霊石。アークルか」
「は？　あ、この石ね。この石、アークルっていうのか」
「貴様！　なぜそれを付けている！　それを付ける資格があるのは我らエクシードだけだ！」
「……エクシード。それがお前等の名前か」
「煩い、喋るな！」
　蜘蛛怪人は咆哮しながら晴也に殴り掛かる。
　晴也は咄嗟の判断で身を捩らせてそれを躱す。しかし、続く二撃目に対応できず晴也の身体は、後方へ数メートルほどノーバウンドで吹っ飛ばされた。背中を強打したことによる激痛が全身を駆け巡る。そんな晴也を他所に、蜘蛛怪人は唸り声を上げて一歩ずつ歩み寄ってくる。晴也は今にも絶たれそうな意識を無理矢理に保ちながらポケットに入れたスタッグフォンを取り出す。
「頼む」

スタッグフォンは晴也から離れた途端にクワガタ虫へと変形して蜘蛛怪人へ突撃していく。大きさも普通の二つ折り携帯電話より一回り大きい程度であり、尚且つすばしっこいという点で蜘蛛怪人を翻弄し、隙あらば顎で蜘蛛怪人を攻撃する。

その間に晴也は工場内へ逃げ込み物陰に隠れた。

「どうやって使うんだっけ、これ」

晴也がどうしてすぐに戦わなかったのか。それはバックルの使い方が分からないからだ。ボタンが付いているがそれを押しても何も変わらない。

「待てよ、確か……」

晴也は一度だけ空からこのバックルについて説明された時のことを思い出す。

「カードだ！」

大声を出した瞬間に一際大きい金属が擦れ合う甲高い音が工場内に響いた。

晴也はソッと物陰から除くとスタッグフォンが吹っ飛ばされる瞬間だった。

「背に腹はかえられない、か！」

意を決した晴也は蜘蛛怪人の前に立つ。

「行くぜ、俺！」

晴也はベルトの左腰に取り付けられたカードケースから一枚のカードを取り出す。手にしたカードには拳の絵柄と『ＰＬＡＩＮ』という文字が印字されている。空かさず

それをバックル上部にあるカード挿入口に挿入する。するとバックルから『ＰＬＡＩＮ』と音声が出力され、リズミカルな待機音が流れ出す。そして晴也はバックルの左上にある赤いボタンを押す。

『ＰＬＡＩＮ　ＦＩＧＨＴＥＲ　ＧＯ　ＡＨＥＡＤ』

バックルから勢い良く発声されると同時に晴也は変身する。

全身が黒い強化皮膚に覆われ、胴部、肩部、前腕部に銀色の装甲、膝と手首と足首にはバックルの霊石と同じものが装着される。頭部も黒い強化皮膚に纏われ、特徴的なオレンジ色の複眼と三本の角型アンテナがＶ字に伸びる。そして、全身に組まなく霊石のエネルギーが渡るように黄色いエナジーラインが巡る。

ここまでの変身を一瞬で終えると晴也は自分の顔、いや、無機質なマスクを強化皮膚で覆われた手で触る。

「変わったのか……」

半信半疑になりながらも晴也は目の前の敵に身構える。

「それが今の戦士、エグゼか」

「エグゼかどうかは分かんねぇけど、まあ、そんな所だな」

「っふん。我らを封印した罪、今ここで償って貰う！」

「身に覚えなさ過ぎて辛いんですけど」

蜘蛛怪人は駆け出すと同時に手の甲から二本の爪を伸長させ、エグゼへと変身した晴也に襲い掛かる。

エグゼは複眼越しに迫り来る爪に臆することなく、首を逸らしてそれを避ける。そして、右拳を強く固く握り締め、蜘蛛怪人の顔面に叩き込む。生々しい音を立てながら蜘蛛怪人は地に伏し、顔を押さえながら悶え苦しむ。

「当たるもんだな」

そう言いながらもエグゼは右手をさする。強化皮膚のお蔭かそれほど痛くは無いが、嫌な感じがする。今にも嘔吐してしまいそうな感覚に棒立ちになってしまうエグゼ。その瞬間、蜘蛛怪人から目を離していることに気付いた。視線をそちらに向けると視界いっぱいに蜘蛛怪人の拳が広がっていた。

「うわっ！」

避けることを許されないエグゼは、もろに食らってしまい、ドラム缶が積み立てられた場所まで殴り飛ばされてしまった。なんとか起き上がろうとするが、頭を強く打ったせいで脳震盪を起こしているのか、視界が縦横無尽に揺れて上手く立ち上がれない。

「……油断、し……た……」

何とか両脚に踏ん張りを利かせて立ち上がるが、既に蜘蛛怪人がすぐ傍まで近付いていた。慌てて拳を振るうが、腰が入っていない拳、視界がぐちゃぐちゃで狙いが甘い、そ

んな状態で放った拳は容易く躱され、蜘蛛怪人の大きく振りかぶった拳が見事エグゼの装甲、晴也の胸に炸裂する。

エグゼの身体は吹き飛ばされるはずが、すぐ後ろの鉄骨に直撃し反動で蜘蛛怪人の方へ流される。

「クソ！」

悔しさと渇を込めた声を上げ、目眩を自力で回復させたエグゼは、反動を利用して拳を少ない溜めだけで放つ。それは丁度蜘蛛怪人の顎に直撃し膝を付かせることができた。どうやら顎を殴られたことで脳が揺れたのだろう。先程のエグゼのように足をふらつかせている。それでも立ち上がってしまう辺り、本当に相手が怪物なんだと思いしらされる。

そうこうしていると蜘蛛怪人は首を強く左右に振り、視界が戻ったのか鬼の形相を浮かべて口を大きく開ける。人間の口とは程遠い形をした口は、縦に割れるように開くと大量の糸を吐き出した。

流石蜘蛛の怪人だけあるな、と呑気に考える暇も無くエグゼはその場を横っ跳びして逃れた。しかし、蜘蛛糸の範囲が余りにも広く、逃れた先で一瞬の内に絡め取られてしまった。

「万事休すってか」

エグゼは力を振り絞り蜘蛛糸を強引に引き千切ろうとするが、全くびくともしないその頑丈さに驚くばかりだった。どうにかしなければ、そう思った次の瞬間、蜘蛛怪人に弾き飛ばされたはずのスタッグフォンが颯爽と現れ、顎で蜘蛛糸を切断していく。エグゼは自由になった身体をストレッチするかのように動かしてから雄叫びを上げて駆け出す。

その勢いを殺さず、余すことなく右足に力を込めて蜘蛛怪人の腹部に炸裂させる。

綺麗に上がったエグゼの右足と全ての勢い受けて身体をくの字に曲げて吹っ飛ぶ蜘蛛怪人の図ができた。

蜘蛛怪人は腹部を押さえ悲痛の叫びを上げながらのたうち回る。

「……エグゼ！」

叫ぶようにそう言うと蜘蛛怪人は口から糸を弾丸のようにして吐き出す。

咄嗟のことでエグゼは、両腕を交差させたが、目の前で網状に広がりエグゼの身体に絡みつく。急いで絡みついた糸を引き剥がすが、既に蜘蛛怪人の姿はこの場から消えていた。

「逃げられた、クソッ！」

強く吐き捨てるように言ってコンクリートの地面に拳を叩き付ける。コンクリートの地面にはくっきりと拳の跡が残っていた。

第３話　傷心・苦悩

堂森町・今は使われていない廃工場。

蜘蛛怪人が姿を消して数分が経った。エグゼがそろそろ立ち去ろうかと思った時、そこへタイミング良くバイクに乗った誰かがやってきた。ヘルメット越しでも分かるぱっちりとした目と二重まぶた。そして、つやのある肌はある意味で存在感を醸しだしている。少女はヘルメットを外しハンドルに掛けてから降りる。

天道空だ。

「空！　お前バイクに乗れたのか」

第一声がこれだ。

「エグゼの専用バイク持って来てあげたんですから、バイクに驚いて下さいよ！」

「え、専用？　これが？」

バイクは悪路でも十分に走行できるデュアルパーパスモデル。細身なフレームの前部から後部に掛けてシャープに跳ね上がるフォルムになっている。ヘッド部がエグゼの頭部と似たような形状をしており、複眼に当たる部分がライトになっている。マフラーは本体を挟んで二本あり、長いアンテナのようなものが取り付けられている。色は

銀をメインにし、エグゼの角に当たる部分や車体に描かれたラインはメタリックブルーに塗装されており、当然黄色いラインも入っている。一般車とは到底思えない姿形をしている。

ここまで来るのにいったいどれほどの人に見られたのだろうか。

「どうせ、どれだけの人に見られたんだろ、とか思ってるんでしょうけど、その心配はありません！」

自信満々に言う空を尻目に、ようやく変身を解除する方法を見つけたエグゼは元の五条晴也の姿に戻る。すると戦いからの疲労と脱力感で尻餅をついてしまった。

「お疲れのようですね、先輩」

「当たり前だ。殴ったり殴られたりでこっちはヘトヘトなんだよ」

心もな、と小声で呟きバイクを見やる。

「しっかし、よく作れたなバイクなんて」

「え？　私を誰だと思ってるんですか。天道の『天童』ですよ？」

「はいはい。分かった分かった」

呆れたように手をひらひらさせてバイクの説明を求める。

「えっとですね。ここの操作パネルのテンキーを操作してホログラムを作り出します。ちなみにこっちのシルバーヘッドにするには先輩の誕生日を押して下さい。ホログラ

ムは私の誕生日です」
「覚えやすくて助かるよ」
「あ、あと、シルバーヘッドにすると機能のリミッターが解除されちゃうんでエグゼに変身してからシルバーヘッドにして下さい」
　先程から何度も出ているシルバーヘッドというのはホログラムを解除した本当の姿のことだろう。空の説明には色々抜けている点がある。しかし、それに慣れている晴也にとっては説明されたも同然だ。
「そんじゃ帰るか」
「はい。ここまで来るのに疲れたので運転お願いします」
「そんなこったろうと思ったよ」
　こんな日が来るだろうと思っていた晴也は、既にバイクの運転免許を取得している。もちろん、空もだ。
　晴也は高校三年生。
　空は高校二年生になるはずだったが学校に行かなくなってしまい、今は留年して高校一年生である。しかし、今年ももう出席日数が足りなくなってしまっていて留年しそうなのである。
「一週間後に卒業式だから忘れんなよ」

「はい。後ろの親御さんの席で見てますから」
「学生席で見ろよ」
「私決めたんです。先輩が万事戦えるように私は学校を辞めて『座る人』になります」
「座る人？」
晴也は聞き慣れない単語に復唱してしまう。
「はい。よく特撮で椅子に座ってパソコンをカタカタしながらサポートする役です」
「ああ、なるほど。確かにお前にお似合いだな」
そう言いながら、二人はバイクに乗る。
ヘルメットは一つしかないと思われたが、どこから取り出したのか空がもう一つのヘルメットを晴也に渡した。
ツッコミどころ満載だが晴也は敢えて無視することにした。
晴也は黒いオフロードヘルメットを被り、空はピンク色のジェットヘルメットを被り茶色く縁取られたゴーグルを付ける。
「それじゃあ、エグゼイダー出発進行！」
「お前が言うのかよ」
しかも名前がダサい、とまでは流石に言えないので晴也はそのままエンジンを噴かしてバイクを発進させた。

翌朝。五条家・晴也の部屋？

五条晴也はベッドから起き上がると左手に違和感を覚えた。何かに挟まれているような圧迫されているような。気になってそちらに視線を落としてみるとそこには天道空が横たわっていた。表現の仕方が不味いので訂正すると、空は晴也の左手を握りながら眠っていたのだ。

「こいつなんで俺の部屋に……。いや、違う」

辺りを見回して見るとそこは晴也の部屋では無かった。見慣れない本棚に机。床に転がっている特撮ヒーローの玩具。カーテンの模様から天井まで見たことのない部屋だ。

「そんなにジロジロ見られると恥ずかしいです」

いつの間に起きていたのか空は両手で顔を隠しながら言う。

「ここってお前の部屋か」

「はい。散らかっててすいません」

天道家・空の部屋。

「やっぱり、特撮好きは相変わらずなんだな」

「ええ、まあ。子どもっぽいですか？」

不安げな表情を浮かべて言う辺り本気で気にしているのだろう。

晴也は溜め息を付いて応える。
「子どもっぽく無ぇよ。それに俺達が昨日から始めたのは何だ？　それこそテレビや漫画の特撮そのものだろ？」
「そうですね。けど……」
「けど？」
「本当に人が死んじゃって、本当に先輩が傷つくんですね……」
空はそう言うと布団を被り、顔を隠した。
耳を澄ますと鼻をすする音や涙ぐむ音が聞こえた。
「下にいるけど良いか？」
布団が縦に揺れた。
了解、と言うことだろう。
晴也はベッドから降りると足早に部屋から出て行った。もちろんドアを閉めて。
天道家・リビング。
季節が季節だからか肌寒さを感じる。
晴也は身体を振るわせながらテレビの電源を入れる。
どのニュース番組にも昨日の蜘蛛怪人の出来事が報道されていない。気になってインターネットで調べてみても何も引っ掛からなかった。

徹底した情報操作。

五条晴也は高校三年生にして初めて警察の力を理解した。

「昨日の蜘蛛野郎はまだ倒せていない。きっと今もどこかで身体を休めているか、人を襲っているはずだ。かと言って闇雲に街中探し回る訳にもいかねぇし」

頭を掻く晴也。

昨日、蜘蛛怪人を倒せなかったのは単にエグゼの使い方が分からなかっただけじゃない。戦う気構えが出来ていなかったからだ。中途半端な気持ちで戦ってしまったから逃がしたんだ。

晴也は不意に拳から嫌な感覚が込み上げてくるのが分かった。ソッと拳をさする晴也。その表情には歓喜の色は微塵も無い。

「あんな感触、慣れる訳ねぇよ」

いつしか拳は震え上がっていた。

どうしてテレビや漫画のヒーロー達は拳を振るうことが出来るんだろうか。拳を振るえば振るう程、心が押し潰されてしまいそうな苦痛が襲ってくるのに。

――俺に足りないのは気持ちだけなのか。

晴也は思い悩んだ末、答えを出せずにジッとニュース番組を眺めていた。全く内容は入ってこないが、しばらくの間、何も考えない時間が続いた。

第４話　予兆・前兆

堂森町内。
町のオフィス街にある路地裏。そこは迷路のように入り組んでおり、道を把握していたとしても目的地に着くのは困難な場所だ。
路地の壁を背もたれにして座り込んでいる一つの影がある。
顔面の至る所が腫れ上がり、苦悶の表情を浮かべながら腹部を押さえていた。
人間の姿をした蜘蛛怪人だ。人間態は男性であり角刈り頭が目立つ。
「っち、夜が明けたというのにまだ癒えぬのか」
人間態の蜘蛛怪人はそう言いながら押さえてる腹部の服をめくり上げる。
青黒く腫れ上がったそれはほんのりと赤みを帯びており、いつ破裂してもおかしくないほどだ。
「これが新たな戦士の霊石、アークルの力なのか。なんと強大で忌々しい力だ」
だが、と付け加えて口の端を大きく釣り上げる。
「そうでなくてわ。我らエクシードの殺戮民族としての血を持ってエグゼ、貴様を葬り去ってやる」

ギャハハハハ、と下品な笑い声が路地裏に響き渡った。
気晴らしにツーリングでもしよう。
そう言い出したのは晴也だった。
もちろん、空からすれば未来の夫となる存在の提案に乗らないはずがない。
二人はホログラムで普通車に擬装されたエグゼイダーに跨がる。
「これってエンジン掛ける時、この鍵っぽいやつを回したらいいんだよな？」
「はい。それを知らずに昨日動かしてたんですか？」
「まあな」
「先輩のその第六感は本当に素晴らしいですね」
呆れたような褒めたような言い方をして空は微笑む。
「そう言えば、これのエンジンてなんか変わってるよな。燃料の匂いがしないというか、なんというか」
「そりゃあそうですよ。超クリーンエネルギーなんですから」
晴也は聞き慣れない言葉に目が点になる。
「このエグゼイダーのエンジンは無公害放電式イオンエンジンなので、馬鹿速いですよ？」
「イオンエンジン？」

「先輩って本当に無知ですね」
「お前と一緒にすんな」
晴也は空が背後で頬を膨らましているんだろうな、と思いながら苦笑した。
ちなみにまだエンジンを掛けただけで発進していない。
「いいですか？　このイオンエンジンはですね、空気中のあらゆる分子や原子を吸い込み、それで生み出した粒子でバイクを走らせているんです。先輩でも分かるように説明すると、とてつもない運動エネルギーを生み出すんです。だから、それをエンジンのピストンに直結させればバイク一台なら余裕で駆動できちゃう超が付くほどのエネルギーなんです」
「ようするにこのエグゼイダーはどんなバイクよりも馬力とスピードを出せるスーパーマシンってことか？」
「ちょっと違いますけどそう言うことにしておきましょう」
「それだけ凄いマシンじゃないと奴等に太刀打ち出来ないってのもあるんだろ？」
「そうですね。これ作るの結構苦労したんですよ。イオンエンジンの粒子を吸い込み作り出す装置をコンパクトに且つバイクのエンジンとして機能するように組み合わせるのとか」
晴也にとってその製造過程がいったいどんなものだったのか皆目見当も付かないが、

それでも完成させてくれた空には感謝しかなかった。
戦うための武器とマシンを用意してくれた。
あとは晴也がそれに見合う戦いをすれば完璧だ。
「俺に出来るのか」
「え？」
「なんでもねぇよ。そんじゃ出発するぞ」
そう言って晴也はどこに向かうでもなくエグゼイダーを走らせた。
五条晴也が住む町より少し離れた隣町。
そこでは行方不明事件が多発していた。それも全て同じ高等学校の生徒が被害にあっていた。目撃者は一向に現れず、二週間程度の休校を挟んでみたものの、その期間中に五人が行方不明になってしまう事態になっていた。この行方不明事件により高等学校の総生徒数は半分より少し多い程度にまで減ってしまった。そして、次第に校内ではある噂が流れるようになった。
「校門に鳥の羽が落ちている日は必ず誰かが神隠しにあってしまう」
生徒達は皆怯え高校生でありながら集団登下校を義務付けられるようになった。そのため、町の夜に高校生の姿が完全に消えてしまっていた。
「と言うことが今隣町で起きているらしいんですよ。どう思いますか、先輩？」

空は肩に掛けたバッグからノートパソコンを取り出し、ビートルフォンを電波の中継機として情報収集を行っていた。

「バイクで酔ったから喫茶で休憩するんじゃなかったのか？」

そう。空は出発して十分も経たない内に乗り物酔いしてしまい近くに合った喫茶店で休むことになった。本気でツーリングを楽しみにしていた晴也にとって喫茶店で休憩するのはもう少し後のはずだったのだが、早過ぎる休憩はただの怠惰だと心に刻むのだった。

「すいません。少々気になってしまって」

「少々でそこまでするか？」

「はい？」

「とぼけても無駄だぞ。お前、警察のネットワークにハッキングして情報を仕入れてるだろ？」

晴也が真っ直ぐ見つめると、空は頑なに目を合わせることを避けた。その目は泳ぎ、どんな言い訳をしたらこの場を乗り切れるか考えているのが丸分かりだった。

そんな彼女を見て呆れたのか注文した珈琲を一口飲む。

苦い。

元々甘党の晴也の舌には到底合わない味だった。

「格好付けて珈琲なんて頼むからですよ。私みたいに素直に林檎ジュースを頼べばよかったものを」
「話を逸らすな」
「はい。ごめんなさい」
　頭を下げる空だが悪戯っ子のような笑みを浮かべて林檎ジュースをストローで吸う。
　なんとも美味しそうに飲む姿は幼児その者だった。
「今、失礼なこと考えましたよね？」
「いや、元々低身長で童顔のお前がそう言う仕草をすると子どもみたいで可愛いなって思って」
「……え、先輩……」
「なんだよ」
「幼女趣味でもあったんですか？」
「お前って本当良い性格してるよな」
　皮肉を言ったつもりが逆に空を喜ばせてしまったらしく、顔を真っ赤にして手で顔を隠していた。もう何を言っても通用しないんじゃないのか、と思ってしまい晴也は本題に入るのを忘れていた。
　二人はそうして二時間ほど談笑し、喫茶店を後にするのだった。

喫茶店からエグゼイダーを走らせて何十分経ったのだろうか。
五条晴也はハンドルを握る手に少しだけ力を込めた。
先程、すぐに酔ってしまったはずの天道空は何事も無かったかのように晴也の身体にしがみつく。
振り落とされまいとしているのは分かるが少々強い気がする。
「なあ、隣町に行ってみるか？」
「え？」
「段々気になってきた」
「流石先輩。そうこなくっちゃ」
「どうせお前のことだ。もう犯人の潜伏先を特定してるんだろ？」
「はい！」
やっぱりな、と言いたげな表情をヘルメット越しで浮かべる晴也。
「場所は？」
「隣町にある廃病院です」
「分かった」
目的地が決まった。
連続行方不明事件、神隠しを行っている犯人と思しき者の拠点。

晴也はエグゼイダーのエンジンを噴かせて真っ直ぐ向かった。

第5話　開戦・駆動

隣町の廃病院。

当時使われていたベッドや器具が手入れをされていないだけで残っている。それ等を撤去しようと思った者も少なからずいたのだろうが、現在の様子からして、それが実行されることは無かったようだ。

なぜなら、日本のピラミッドが崩壊してからと言うもの、この廃病院の撤去作業や取り壊し作業を行おうとする度に必ず数名の死傷者が出たからだ。

ゆえに、この廃病院には奇妙な噂が立ち、誰も近寄らなくなっている。

そんな場所で二人の男が対面するように立っている。

「なんだ、お前。えらく顔を腫らしているじゃないか。何があった？」

「エグゼにやられた」

一人の男はスポーツ刈りをした青年で、もう一人は特徴的な角刈りが目立つ男。そう。蜘蛛怪人の人間態だ。

男は蜘蛛怪人の言ったことが信じられないのか頭を押さえて恐怖で顔を歪め始める。

「そんな馬鹿な。この時代にもエグゼが存在するのか」

「ああ。おそらく、こちらに向かって来ているだろう。先程、俺の下部蜘蛛から報告があった。お前は暴れすぎたということだ」
　男は舌打ちをして蜘蛛怪人を睨む。
「奴は強いのか？」
「いや、戦い方は素人同然だった。それに子どもだ」
「そうか。なるほど、だからここに来たのか、スパイダー」
　ギスパイダー、それが蜘蛛怪人の名だ。
　そして、
「クロウ、お前と私で奴を葬るのだ」
　クロウ、というのが男の名だ。
「いいだろう。戦い方が素人で相手が子どもなら俺達二人掛かりで戦えば楽勝だ」
「なら、この砦の一階と二階を使わせてくれ」
「分かった。どの道、俺は屋上と広い場所でしか本領を発揮できんからな」
　ニーニは言い終えると天井を仰ぎ見るようにして身体を伸ばす。
「飛べる者も案外制約があるものだな」
「まあな。ちなみに、ここは砦じゃなくて廃病院な」
「知らんわ、そんなもの！」

そう言って蜘蛛怪人・スパイダーエクシードは一階と二階に降り、何やら作業を始めた。

クロウもそれに呼応されてか屋上に上がり、どこまでも広がる青空を仰ぎ見ていた。

晴也と空はバイクを走らせ、ようやく廃病院に着いた頃にはすでに日は沈んでいた。

ホログラムで形成された普通車のライトが、本体であるエグゼイダーのライトと連動して本当に照らしているかのように見える。そしてそれは目の前の道とも言い難い道を照らしている。

「うーん。やっぱりエクシードの仕業みたいですね」

二人はバイクから降りて廃病院を見やる。距離からすればまだバイクを走らせて五分程度掛かる所から見ているのだが、如何せん山奥で廃病院の周辺には森しかない。加えて日が暮れているせいで中の様子が上手く窺えない。それにもかかわらず空は双眼鏡を除きながら淡々と呟いていた。

「どうして分かるんだ?」

「これですよ」

空は手に持っていた双眼鏡を晴也に渡し、指で示す方向を見るよう促す。

「うわ!　すげえ!」

双眼鏡から見える景色はまるで昼間のように明るい。更に、空が双眼鏡のダイヤルを

操作することでズームされ、視界が壁を透り抜け、中でたむろしているエクシードまで見えるようになった。
「どうですか！　この透視眼鏡！」
双眼鏡のように遠くを見ることが出来る上に、壁などを透視する機能も備えている。ゆえに透視眼鏡ということだろう。
晴也は透視眼鏡を覗いている内にある一つの疑問が脳裏に浮かんだ。
「お前さ、まさかとは思うけど、これで俺ん家とか覗いてないよな？」
「……え？　そんなこと……」
空は言い切る前に目を逸らし、口笛を吹く真似をする。
「このことは帰ってからじっくり聞こうか」
晴也はそう言ってバイクにまたがりヘルメットを被り直す。
「あの……先輩！」
空は晴也がエンジンを掛けた瞬間に呼び止める。
晴也はヘルメット越しに空を見つめる。
「が、頑張って下さい！」
思ってもみない言葉だったからか、少し戸惑う仕草を見せる晴也。しかし、すぐさま笑みを浮かべて肩に掛けたボディーバックからバックルを取り出す。

晴也は腹部にバックルを当てる。そして、バックルの両サイドからベルトが伸長し背後で合体する。次にベルトの左側にあるカードケースから縁が銀色のカードを一枚取り出す。それにはエグゼの頭部が証明写真のように写されており、下部には『ＰＬＡＩＮ』と文字が書かれている。裏面には拳の絵柄が描かれており、そちら側を前にしてバックル上部にあるカード挿入口に挿入する。すると、

『ＰＬＡＩＮ』

とバックルから音声が出力され、リズミカルな待機音が流れ出す。

「変身！」

晴也は掛け声と共にバックルの左上部にある赤いボタンを押す。

直後、晴也の全身が黒い強化皮膚に覆われ肩部、胴部、前腕部に銀色の装甲。手首、足首、膝部にバックルと同様の霊石が装着される。そして、霊石のエネルギーが全身に行き渡るように黄色いエナジーラインがベルトを中心に全身に伸びる。頭部には特徴的な複眼と三本の角型アンテナがＶ字に伸びている。

ここまでの変身をしても人型を保ち、尚且つ一瞬の内に変身を終えてしまう辺り、発案者の空の父とそれを開発した空は、本当に優秀な発明家だと晴也は考えさせられる。

「先輩、これを」

空は五枚のカードを晴也に手渡す。

「なんだこれ」
　絵柄も文字も一切書かれていない無名のカード。しかし、カードの縁が黒色と『ＰＬＡＩＮ』のカードと同じ銀色の物に分けられている。
「縁が銀色のカードがエグゼの戦闘形態を作り出すボディーカード。縁が黒いカードは戦闘形態に特殊効果を与えるソウルカードです。今は『ＰＬＡＩＮ』しかありませんが必ず役に立ちます。あ、あとこれ等に能力を与える時は、ボディーカードはバックルに、ソウルカードはソウルガジェットに挿入してからにして下さい」
「それは何となく分かるけど、どうやって能力を発現させる切っ掛けみたいなのを作るんだ？」
「それは先輩の気持ちです。ボディーカードは先輩が求める武器と身体、ソウルカードは所謂ゲームなんかでの属性です。その時の先輩の状態で出現します」
「なるほど。どれも俺次第ってことか」
「はい」
「おし、それじゃあ行ってくる」
「いってらっしゃい」
　晴也は答えなかったが、右手を上げサムズアップをしてからエンジンを噴かしてエグゼイダーを走らせた。

空はそんな後ろ姿を胸の前で手を組んで無事に帰って来ることを祈るしかできなかった。

第６話　覚悟・闘志

　エグゼに変身した五条晴也はエグゼイダーを走らせ、悪路を乗り越え、ようやく廃病院の入り口付近に到着した。
「変身してからだとドライブテクニックが増すっていうのは知らなかったな」
　今度ちゃんとエグゼについて説明してもらおう、そう思った矢先に廃病院の中から何かが割れる音がした。劣化した窓ガラスが割れたのかと思いたいがその確率は少ないだろう。
「行きますか」
　エグゼはエグゼイダーから降りると堂々と入口から入って行く。
「さっき見た感じ、一階と二階には大量の蜘蛛の巣が出来てたから、あの蜘蛛怪人絶対いるな」
　エグゼは拳を固く強く握り締める。
　もう迷いわない。そう思いたいだけの強がりだと自分でも分かっている。それでも拳を握らなければ手が震えて言うことを聞かなくなる。
　エグゼは舌打ちをして先に進む。

入口には何も無かったが、いざ角を曲がってみるとそこら中に蜘蛛の巣が張り巡らされていた。それは余りにも見事に隙間なく張り巡らされているせいで進む足が止まってしまった。いや、むしろ止まらざるを得なかった。

「これ、外の非常階段から上がった方が良かったかも」

エグゼはそう言いつつも蜘蛛の巣の前まで歩く。

「よく来たな、エグゼ」

蜘蛛の巣の奥から聞き覚えのある声が聞こえた。

「お前は……」

蜘蛛怪人が姿を現したのだ。しかも、蜘蛛の巣に上手く足を引っかけて宙吊りになりながら。

「今度こそお前を倒す。そのために俺はこの拳を振るう」

「そんな通り無き言葉なぞ、意味を成さん！」

蜘蛛怪人は人ならざる異形の口を大きく開け、蜘蛛糸を弾丸のようにして放つ。驚異の粘着性と頑丈さに前回は苦戦を強いられたが、今回はそれを承知の上で戦える。エグゼは身を翻し、上手く躱してから、転がるように蜘蛛の巣の中に入る。

「動きにくいな」

立ち上がったのは良いが身体をどう動かしても蜘蛛糸に絡まってしまう。無理矢理

引き?さなければ身動き一つ取れない。そんなエグゼをあざ笑うかのように肉薄する蜘蛛怪人。

「そりゃ!」

蜘蛛怪人の握り拳がエグゼのマスクに叩き込まれる。

エグゼは何とか耐え切り拳を振るうが、蜘蛛怪人は蜘蛛糸をまるでジャングルジムのように器用に伝っていき、瞬く間にエグゼとの距離を取り、拳は虚しく空を切るだけだ。後を追うようにエグゼも蜘蛛糸を潜るが、蜘蛛糸を自由自在に伝い、尚且つそう言った戦闘に長けている蜘蛛怪人には到底追いつく訳もない。そんな追い駆けっこにもならない逃走劇を繰り広げていると少しだけ開けた場所に到着する。間違いなく誘導されてしまった。

蜘蛛怪人は手招きをしてエグゼに攻撃を誘う。

エグゼは怒りを露わにして駆け出すが、突然何かに張り付いたのか足が動かなくなってしまった。不審に思ったエグゼが足元を見やると、そこには蜘蛛糸がびっしりと張り巡らされていた。

「なにっ!?」

エグゼが驚愕を露わにした瞬間、頭上から大量の蜘蛛糸が雨の様に降り注ぎエグゼの身体を絡めとっていく。そして、それを見ていた蜘蛛怪人はまるでターザンのように蜘

蛛糸に反動を付けて突撃してくる。エグゼにそれを躱す余裕などなく、蜘蛛怪人の両足から繰り出されたローキックが直撃する。

奇しくもそれで両足裏に張り付いていた蜘蛛糸は剥がれたが、吹っ飛ばされた方向に待ち受ける蜘蛛の巣に絡まり、身動きが本当に取れなくなってしまった。

エグゼは何度も身体を動かそうとしたがビクともしない。そのエグゼに向けて蜘蛛怪人の拳や蹴りが何発も繰り出される。それ等が直撃する度にエグゼの装甲から火花が散り、鉄と鉄がぶつかり合う音が病院内に響き渡る。

「どうした、もう終わりか」

卑怯な手を使い、ましてやそれを正当化して威張る蜘蛛怪人。

その姿を見ることしか出来ないエグゼ。次第に憤りを覚え始めたその時、胸の中に熱い何かを感じた。

「お前等みたいな奴のために、誰かが命を落とすなんて……下らねェ、下らな過ぎる」

低く暗い声で晴也はそう呟いた。

——ようやく分かった。俺に足りないものが何か。

「覚悟か。俺がお前等と戦わないと誰かが傷付く。だから皆の笑顔を守るために俺は……」

その時、晴也の胸の内から溢れ出る熱い何かが地面を伝い脈動する。

次の瞬間、エグゼの身体が燃え上がり、絡みついていた蜘蛛糸を焼却し、更にその熱量が爆発的に増していく。

エグゼはハッとしてベルトの左側に取り付けられたカードデッキから縁が黒いカードを一枚取り出し、ベルトの右側に取り付けられたソウルガジェットのカード挿入口に挿入する。

『ＥＲＲＯＲ』

と音声が出力されたが、

『ＳＡＶＩＮＧ　ＳＯＵＬ』

続いて音声が出力され勢いよくカードが挿入口から排出される。それと同時にエグゼの身体から溢れ出ていた炎が静まり、エグゼは空を舞うカードを掴む。

黒縁のカードの表面には燃え盛る炎のマークが描かれ、下部には『ＦＬＡＭＥ』と文字が印字されている。裏面は変わっていないが、晴也はカードの生成に成功したのだと確信した。そして、ボディーカードにも変化が起きる。エグゼは『ＰＬＡＩＮ』のカードから無名のボディーカードへと挿し返る。

「俺が求める武器は……全てを断ち切る刀だ！」

バックルから、

『ＥＲＲＯＲ』

とソウルガジェットから全く同じ音声が流れ、
『ＳＡＶＩＮＧ　ＢＯＤＹ』
ソウルカードを生成する時と全く同じ工程でバックルのカード挿入口からカードが排出される。
エグゼはそれを掴み確認する。そこには刀を構えたエグゼの全身の写真が写されていた。しかも、そのエグゼは今の姿と違い、身体に纏う装甲の重量感と形が違う。下部には『ＳＷＯＲＤ』と印字されており、裏面には剣のマークが描かれている。
エグゼは仮面の向こう側で笑みを浮かべながら、二枚のカードをそれぞれの挿入口に挿入する。
ソウルガジェットからは、
『ＦＬＡＭＥ』
と音声が出力される。
バックルからは、
『ＳＷＯＲＤ』
と音声が出力され、エグゼの手に持つ剣のように鋭い鉄と鉄がぶつかり合うような待機音が流れる。
「変身ッ！」

エグゼはソウルガジェットのボタンとバックルの左上の赤いボタンを同時に押し、新たな姿へと変身する。

『ＦＬＡＭＥ』

『ＳＷＯＲＤ　ＦＩＧＨＴＥＲ　ＧＯ　ＡＨＥＡＤ』

ソウルガジェットとバックルの音声が院内に響き渡った。

第7話　換装・必殺

エグゼを倒すためならどんな卑怯な手段を取っても構わない。身体に流れる殺戮民族の血を持って必ず、一族を封印した恨み。いや、自身を封印した恨みを晴らしてやる。

同族がどうなろうと関係ない。

自分が良ければ何でもいい。

「殺してやる！」

蜘蛛怪人は咆哮し、エグゼに殴り掛かる。しかし、エグゼは避ける素振りを見せず、右手に握る刀も蜘蛛怪人を斬る気がないのか、切っ先を下げている。どこからでも掛かってこい、と言いたげなその姿勢に蜘蛛怪人は、より一層の憎悪と憤りを感じ、それを拳に乗せてエグゼの胸に叩き込む。

だが、吹っ飛ぶはずのエグゼの身体はそこにあり、逆に蜘蛛怪人の放った拳が弾かれていた。理解できない状況に蜘蛛怪人は、弾かれた拳を押さえながらエグゼを睨み付ける。

「睨んでも何も変わらないぜ。これがエグゼのフレイムソードだ！」

エグゼのマスクから少年の声が発声される。やはり、変身しているのは工場地帯で

戦った子どもだ。
――子どもに俺が負けるはずがない。
蜘蛛怪人は飛び掛かり今度こそ止めを刺そうとする。
だが、止めを刺されたのは蜘蛛怪人の方だった。
腹部に深々と突き刺さるエグゼの刀。そして、そこから炎が溢れ出し、蜘蛛怪人の身体は内部から爆発四散した。
時間は少し遡る。
エグゼは掛け声と共に新たな変身を遂げた。
全身を覆う黒い強化皮膚は変わらず、肩部、胴部、前腕部の装甲が『ＰＬＡＩＮ』の物から分厚く、西洋甲冑の様な装甲に換装される。色は『ＰＬＡＩＮ』と同じ銀色であるが、それは換装完了と同時に燃え盛る炎のように赤く染まる。そして、それは頭部の特徴的な複眼も同様に赤く染まる。右手を開くとＵ字の角の形をした鍔の刀が出現する。銀色の刃は燃える蜘蛛糸に照らされ閃いている。
「これが新しいエグゼ。ちょっと重いな」
エグゼは右肩を回しながら言う。
「でも、力が溢れてくるのは分かる」
これなら勝てる。

エグゼはそう確信すると挑発するかのように刀の切っ先を下ろした。
「必殺技を出すときはソウルガジェットを二度押しでバックルは長押しだったよな」
エグゼは言いながら実行する。
ソウルガジェットからは、
『ＳＯＵＬ　ＤＲＩＶＥ』
と発声され、エグゼの装甲に燃え盛る炎が纏われる。
バックルからは、
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
と発声され、霊石アークルが生み出す強大なエネルギーが刀の刃に纏われ、それと同時にエグゼの鎧に纏われていた炎が全て刃に集約される。
「来いよ」
そうしてエグゼは飛び掛かる蜘蛛怪人の腹部に、刀を深々と突き刺し見事撃退した。
頭上で怪人が爆発したにもかかわらず、無傷で、尚且つ、一撃で倒してしまった自身の力に驚愕していた。
「スゲー。蜘蛛怪人を一撃で倒しちまうし、それに鎧の防御力もかなり上がってる」
エグゼが歓喜に震えていると、
『先輩、大丈夫ですか！』

エグゼのマスク裏にある通信機から空の声が発声された。
「え、空？」
晴也は目を点にしながら左耳を押さえる。
『見てましたよ、透視眼鏡で。どうやら蜘蛛怪人の方は倒せたみたいですね』
「まあな」
『あとは屋上にいる奴だけですよ』
「屋上？　二体いたのか？」
『え、先輩、透視眼鏡で見てたじゃないですか』
気付かなかった。
エグゼは素直にそう言えず口籠っていると空の悲鳴が通信機越しに聞こえた。
すぐさま空の安否を確認するが返事が返ってこない。しばらくして一方的に通信が切られた。
エグゼは急いで病院から出て、闇夜に沈む廃病院の周辺を見やる。エグゼの複眼には暗い場所でも十分に見える視覚補助機能が搭載されている。そのお蔭で周辺を見ることも可能だが、それでも一向に見つからない。
すると、頭上から悲鳴が聞こえた。
「そっちか！」

叫ぶように言うとボディーを『ＰＬＡＩＮ』に戻し、助走を付けてから一度の跳躍で病院の屋上に辿り着き、綺麗に着地する。病院が三階建てで『ＰＬＡＩＮ』のジャンプ力でも十分に屋上に届いたことに晴也はエグゼの性能に心底感謝した。

「空！」

エグゼは着地するなり空の名を叫んだ。

「先輩！」

すぐさま返事が来たと思いきや空が抱き付いてくる。相当恐かったのだろう空の身体は小刻みに震えていた。

「大丈夫か？」

「エグゼの装甲が堅くて頭が痛いです」

「は？」

空はエグゼから離れると額を押さえて膝を付く。

「アホか」

言ってエグゼは安堵の溜息を漏らす。

そうこうしている内に空を屋上まで運んだのであろう怪人が闇夜から姿を現す。全身が黒く、強靭な肉体と背中から生やした一対の漆黒の翼。そして、鼻と一体化した特徴的な嘴をした怪人。まるで鳥のような外見をした怪人の登場にエグゼは身構える。

「貴様か。スパイダーが言っていた現代のエグゼとは」
「スパイダーってのはさっきの蜘蛛野郎のことか？　だったらそうだけど。アンタは烏みたいな成りだけど名前は？」
「っふん、今から死ぬ貴様達に名乗る名などない」
「そうかよ」
　エグゼは吐き捨てるように言って駆け出す。
　烏怪人は笑みを浮かべながら翼を羽ばたかせ宙を舞った。
「やっぱ飛ぶよな」
　エグゼは頭上を見上げて、闇夜に溶け込んだ烏怪人を探す。しかし、どうしてだか見当たらない。エグゼの視覚補助機能が上手く作動してないのか全く見当たらない。
「どうなってんだ」
「先輩！　相手はおそらく闇と同化しているんです」
「ようするに透明になってるってことか？」
「ちょっと違います。けど、理屈はそんな感じです。だから……」
「見えるように、且つ、飛んでる野郎を倒せる武器か」
　言っているそばからエグゼの身体が突如何かにぶつかられたかのように吹っ飛ばされた。更に屋上に転がるエグゼを追うようにして小さな爆発が連続して起きる。何か

が飛んできていることにいち早く気付いたエグゼは、途中から自分の意思で転がっていた。しかし、いつまでもそうしている訳にもいかず、転がりながら『ＰＬＡＩＮ』のボディーカードから防御力が高い『ＳＷＯＲＤ』のボディーカードに挿入して換装した。

先程とは違って『ＦＬＡＭＥ』のソウルカードを挿入していないため鎧は銀色のままである。

エグゼは立ち上がり、周りを見渡す。しかし、そうしている間にもエグゼの分厚い鎧には火花が飛び散り何かを弾いている。そのおかげでようやくぶつけられている物が弾丸のように放たれた黒い羽根だと分かった。

つまり、烏怪人は姿を消しながら羽根を弾丸のようにして放っているのだ。

「卑怯はコイツ等の売りなのか?」

『ＳＷＯＲＤ』の強固で頑丈な鎧で羽根の弾丸を全て弾き、全くと言っていいほどダメージを受けていない。加えて、着弾した衝撃も弾いているので殆ど棒立ち状態だ。それが続くといくらノーダメージでも苛立ちを覚えてしまう。

だが、そうしている内に新たなカードのイメージを持てたのかカードケースからボディーカードとソウルカードを取り出し挿入する。

「今度は疾風の矢で穿つ射手だ!」

エグゼはそう言って生成され、排出されたカードを掴む。

銀縁のボディーカードには弓を構えたエグゼの全身写真が写されており、下部には『ＡＲＲＯＷ』と印字されている。裏面には弓と矢のマークが描かれている。

黒縁のカードには吹き荒れる風のマークが描かれ、下部には『ＧＡＬＥ』と印字されている。裏面は特に何も変わっていない。

エグゼは慣れた手付きで二枚のカードをそれぞれの挿入口に挿入しボタンを押す。

「行くぜ、変身！」

エグゼの掛け声に呼応されるかのようにバックルとソウルガジェットから音声が出力される。

『ＧＡＬＥ』

『ＡＲＲＯＷ　ＦＩＧＨＴＥＲ　ＧＯ　ＡＨＥＡＤ』

暴風が竜巻となってエグゼの身体を包みこむ。その中でエグゼの装甲が換装されていく姿が薄っすらとだが浮かび上がる。それを物陰から見ていた空は心配そうに見つめる。

「こんなに連続でカードを生成するなんて無茶ですよ、先輩」

次の瞬間、竜巻が中から破裂し新たなエグゼが姿を現す。

「心配すんな、空。すぐに終わらせる」

「え？」

ソッと静かに呟いたはずの声が新たな姿となったエグゼ――晴也にはよく聞こえていた。空は驚きのあまり目を見開くが、エグゼは気にせず上空のある一点を見つめ、背部にマウントされたクワガタの顎の様な武器を引き抜く。

その仕草はまるで射手が矢筒から矢を引き抜く姿だ。

空は思った。

――先輩はもう覚悟を決めたんだ。

――だから無茶してでも頑張れるんだ。

闇夜を真っ直ぐ見つめたままエグゼはクワガタの顎のような武器を展開させ弓へと変形させる。そして、それを何の疑いもなく上空に向ける。おそらく烏怪人に向けているのだろう。

「決めるぜ」

エグゼは静かにそう呟いた。

第８話　余韻・衝撃

烏怪人ニーニは闇夜に溶け込みながら驚愕していた。

竜巻から姿を現したエグゼ。その姿は先程の刀を構えていた形態から装甲の形や背中にマウントされた武器も違う。

エグゼの左肩部、胴部、前腕部が防弾チョッキのような銀色の装甲に換装され、背中にはクワガタの顎のような武器が出現しマウントされている。右肩部には『ＰＬＡＩＮ』の装甲よりもやや薄い装甲が纏われており、全体的に見ても装甲の厚さは『ＰＬＡＩＮ』と余り変わっていない。

換装を終えると銀の装甲が瞬く間に緑色へと変色していく。それはソウルガジェットに疾風のカード『ＧＡＬＥ』を挿入し、ソウルチェンジしたからである。

他の形態の装甲も同じように通常のボディーチェンジで換装された装甲は全て銀色がベースである。しかし、ソウルガジェットにソウルカードを挿入し、ソウルチェンジすることでそのソウルカードに記された属性の色に変色する仕組みになっているのだ。

『ＦＬＡＭＥ』なら赤。

『ＧＡＬＥ』なら緑。

生成が行われていないボディーカードとソウルカードは一枚ずつあり、それ等が今後どのような能力を得られるかはまだ分からない。

そんなことを全く知らないクロウは、古代の戦士エグゼと現代の戦士エグゼの違いが一目瞭然という事実に目を見開くばかりだ。そして、そのせいで新たなエグゼが武器を構えるのをみすみす許してしまう。

「……あれは弓か」

クワガタの顎のような武器をまるで矢筒から矢を取り出すかのように引き抜き、クワガタの顎のような刃を展開させる。

双刀のような弓、もしくは弓のような双刀には刃の基部に一門ずつ銃口が装備されている。それを構えたエグゼは二つの銃口を真っ直ぐに暗闇に溶け込んでいるはずのクロウに向ける。

クロウは一瞬だけ驚きはしたが、エグゼには見えていない、偶然だ、という慢心で冷静さを保った。しかし、その直後、エグゼの全身から強風が吹き荒れ、疾風を纏い、かと思いきやそれ等は全て収束され一本の矢へと形を変えていく。

緑に光るその矢は生成されるなり、間髪入れずに放たれた。

そして、

「み、見え……っ！」

クロウの腹部を穿ち、その衝撃で上半身と下半身は分断され両方とも爆散した。
射った本人であるエグゼは心底驚いていた。
エグゼが『ＡＲＲＯＷ』にボディーチェンジした瞬間に、視覚は暗闇に溶け込んでいるはずの烏怪人を完全に捉え、聴覚も鋭敏になっているのか、小声で喋ったはずの空の声と上空を羽ばたく烏怪人の翼の音が、まるで汽笛を間近で鳴らされたかのように耳に入った。さらに皮膚からは風の流れや温度の変化すらも伝わってくる。『ＡＲＲＯＷ』が生成したのは、所謂、超感覚状態を強制的に作りだす肉体だ。
双刀のような弓から放たれた緑に光る矢は、射た途端に透明になった。そのため、烏怪人はなす術もなく、驚愕を露わにした瞬間に穿たれ爆散した。
エグゼは爆発を確認する前に、いや、矢を射たと同時に『ＰＬＡＩＮ』にボディーチェンジしていた。
「透明の矢は流石にズルかったかな」
言い終えるとエグゼは倒れ伏した。
変身は自動的に解除され、晴也は身体を無理矢理に仰向けにした。
そこへ心配したのか空が駆け寄ってくる。
「先輩！」
「あ、耳が戻ってる」

「え？」
「あとで話す。それより……」
晴也は残り少ない力を振り絞って空の手を引き、無理矢理寝かせる。強引過ぎたせいで空は膝を強打してしまうが晴也は気にせず顎で夜空を指す。
すると、
「……綺麗」
空は暗闇だった夜空に広がる満点の星空を仰ぎ見ながらそう言った。
「戦いに集中し過ぎてたから全然気付かなかったけど、いいもんだな。星空って」
晴也が言い終えてから間があった。
「え、それだけですか？」
「は？」
「先輩ってロマンチストなのか、ただの童貞なのか偶に分からなくなります」
空は言ってから頬を膨らませて星空を眺めていた。
晴也は目を点にしながら頭の中にクエスチョンマークを浮かべる。しかし、それが意味をなさないことを悟ったのか星空に視線を移す。
二人はしばらく星空を眺めてから帰宅した。院内を探索した際に一室に大量のベッドとそこに横たわる女子高生と男子高校生の姿があった。おそらく、連続誘拐事件の被

害を受けた高等学校の生徒達だろう。何人かは衰弱しているだけで息はあったが、ほとんどの生徒は息絶えていた。空は口を押えながら涙を堪えていたが、晴也は壁を殴り付け怒りを露わにしていた。

廃病院から離れ、一先ず隣町から地元に戻ってきた晴也と空。

空の顔は未だに青ざめているが、晴也は不思議と落ち着きを取り戻していた。そのため、隣町の警察へ連絡を入れたのは晴也の方だった。本来なら空の役目なのだが、それが出来る状態ではないことは晴也でも分かった。

「着いたぞ」

沈黙の時間は晴也の言葉で断ち切られた。

「降りられるか？」

「はい。すいません」

空は謝るとホログラムで擬装されたエグゼイダーから降りる。晴也もその後に降り、二人で玄関の扉を潜る。

時計を見てみるともう日付の境界を越えていた。

「空、俺帰るから、その……ちゃんと風呂入ってから寝ろよ。あと……俺明日学校だから何かあったらすぐに連絡しろよ」

晴也はぎこちない雰囲気を醸し出しながら言うと天道家を後にした。

空は何を思ったのか急いで地下室へ入り、パソコンを立ち上げ、新たな発明のためのメモを留めていき設計図を書き始める。画面に映されたそれには『ＰＲＯＴＯ―ＴＹＰＥ』とプロジェクト名が書かれていた。

翌朝、五条晴也は寝坊した。

本当なら朝の七時に起きる予定だったのだが、目覚めたのは九時だった。もちろん寝坊しないように目覚ましを掛けていた。それにもかかわらず寝坊してしまった。

晴也は急いで制服に着替えてリュックを背負い自宅を後にした。

登校路にはすでに同じ学校の制服を着た生徒は一人もいない。当たり前か、と思いながら晴也は走って向かった。こういう時に限って自転車通学でないことに心底嫌気がさしてしまう辺り、自分がまだ学生なのだと思い知らされる。

その時だった。

「五条くん！」

背後から聞き覚えのある女性の声が耳に入った。振り返るとそこには同じ学校の制服を着た女子高生が追い掛けてきていた。

晴也は走るのを止め彼女が来るのを待つ。

もう走っても無駄だと諦めたからだ。

「はあ……、おはよう、五条くん」

息を荒くしながら女子高生が言う。
「なんだ、お前も遅刻か？　片桐」
片桐沙耶。それが彼女の名だ。
「委員長のくせに遅刻って意外とファンキーだな」
「は！　何言ってんの！　わ、私、遅刻なんかしてないし！」
沙耶は顔を林檎のように赤くして怒鳴るように言った。
「そんな怒んなよ」
「お、怒ってる訳じゃ……」
今度は俯いて口をもごもごさせる。
「つうか早く行こうぜ。ただでさえ俺達遅刻してんだし」
晴也がそう言うと沙耶はきょとんとした表情を浮かべて口を開ける。
「今日、学校無いよ？」
「え？」
「卒業式の練習は式の前日にするから、その日までは自由登校だよ？」
「マジで？」
「マジだよ。だから最初から言ってるじゃん、遅刻なんてしてないって」
晴也は落胆のあまり両膝を付いて天を仰ぎみた。それも白目で。

「怖いよ、五条くん」
沙耶は苦笑しながら言った。それに呼応して晴也は正気を取り戻す。
「今日学校無いなら、片桐は何で制服着てるんだ？」
「わ、私は……図書室に行きたくて」
「図書室？　何で？」
「行きたいから……行くだけだし」
「そんじゃ俺も一緒に行こっと。どうせ帰っても誰もいないし」
晴也の言葉に沙耶は自分の耳を疑った。
そうして、二人はそのまま学校の図書室まで向かうのだった。

第二章　敗北は成長の糧になる

第９話　白兎・鈍感

堂森高校・図書室。

静かな空間。そこには至る所に本棚があり、納められた本達は今日も自分を読んでくれる読者を待っている。

読書、勉強のために用意された机には二人分の影があった。一人は短髪黒髪の少年。もう一人は黒髪を腰の辺りまで伸ばした黒縁眼鏡を掛けた少女である。

五条晴也とクラス委員長の片桐沙耶だ。

二人が図書室に着いて一時間が経とうとしている。

「あの……五条くん？」

「ん？」

「なんで昆虫図鑑とか動物図鑑ばっかり読んでるの？」

沙耶の言う通り晴也は図書室に着いてからと言うもの図鑑系の本ばかり読んでいる。

「まあ、あれだ。奴等がどんな動物か虫の特性を持って暴れるか分からないから」

「奴等？」

「ああ。けど、今から見たって何がどうなる訳でもねェんだけどな」
晴也は言いながら動物図鑑のページをめくる。
沙耶は晴也の言っている意味が分からず、視線を自分の持つ小説へと向け直す。
「委員長の方は何読んでんだ？」
言われて沙耶は顔を真っ赤にして小説で顔を隠す。
「笑わない？」
「え？」
「笑わないって聞いてるの」
「笑わねェよ」
沙耶はそれを聞いて小説から顔を覗かせる。
「れ、恋愛、小説……」
「恋愛小説？」
沙耶は小さく小首を縦に振る。
「委員長でもそういうの読むんだな」
「え？」
「いやさ、委員長って成績優秀で真面目で皆からも慕われてて、すげーなって思うよ。堅物だけど」

「堅物で悪かったわね」
「いや、そうじゃなくて。そんな委員長の可愛いところを見つけたな、と思って」
「そ、そんなこと……」
沙耶は口籠もりながらもう一度顔を恋愛小説に隠す。その仕草を見た晴也は何を思ったのか動物図鑑のページを更にめくり視線を一点に集中させる。
「烏か……」
晴也は烏のページをそっと指でなぞりながら呟いた。
堂森町・都心部。
オフィス街に囲まれた繁華街もある町で一番賑わっている場所。
時刻はお昼を迎え、昼休憩を取るために会社員や自宅から人が現れ、飲食店やコンビニへと入って行く。その人間の姿はビルの屋上から見てみるとまるで蟻のようだ。
「さあて、まずは誰からにしようかなあ」
白いマフラーを首に巻いた季節外れのタンクトップを着た青年は、親指の爪を噛みながら、動く獲物に狙いを定める。
そして、
「よし、アレにしよっと」
青年は満面の笑みを浮かべて屋上から飛び降りる。その高さは２０階建てととても

高い。そんな高さからでも平然と青年は飛び降りてしまう。そして、落下している最中に人間とは別の存在へと変身する。

頭部から伸びる二本の長い耳。両目は血に飢えているかのように赤く、口からは前歯が牙のように飛び出ている。全身は白い体毛に覆われており、両脚の筋肉は岩石のようにごつごつとしている。

兎と人間が融合したかのような姿。

そう。この青年、いや、兎怪人もエクシードなのだ。

兎怪人が着地するとアスファルトの地面はひび割れ、兎怪人を中心に小規模のクレーターを作り出す。その近くにいたスーツを着た男性は、あまりにも信じられない光景に恐怖し、腰を抜かして、その場で尻餅をついてしまう。

兎怪人は不適な笑みを浮かべると、男性の首を右手で掴み持ち上げる。

男は目に涙を浮かべながら必死に抵抗し足をばたばたと動かす。しかし、次第にその動きは弱くなり、ほんのりとだが刺激臭がした。

「ありゃ？　漏らしちゃったの？　きったないなあ」

無邪気にそう言うと兎怪人は尋常ならざる脚の筋力を用いて超絶的な跳躍を見せた。

男はもう何が起きているのか分からなかった。理解できなかった。あまりにも自分が知っている現実からかけ離れた出来事に愕然とする他なかった。

兎怪人と男性はたった一っ跳びで二十階建てのビルの屋上まで辿り着いてしまったのだ。

「それじゃあね。お漏らしおじさん」

兎怪人は掴んだ首を離し、男性を二十階建てのビルの屋上からなんの躊躇いもなく落とした。

地面に激突したのはすぐだった。

呆気ないその姿に兎怪人は下品な笑い声を上げて、別のビルの屋上へと跳躍し、また別のビルの屋上へと跳躍してその場から離れた。

――次はどこで襲おうか。

兎怪人の頭の中にはそのことで頭がいっぱいだった。

堂森町・繁華街。

晴也と沙耶は昼食を取るために近くのバーガーショップ――ワクワクバーガーの二階に移動していた。学校の食堂は三年生のほとんどがいないためか、一年生と二年生で溢れかえっており、とても食事ができる様子ではなかったのだ。

「五条くんてやっぱりモテるよね？」

「なんだよ急に」

晴也は頼んだバーガーを頬張る。

二人はお互いの顔が見えるよう向かい合うように机を挟んで座っている。
「だって、一年生と二年生が五条くんを見つけた途端に顔を赤くしてたし。何人か指差してたし」
晴也は言われて思い出す。
「あれって俺だったのか。他の奴かと思ってたわ」
沙耶は呆れて溜め息をついてしまう。
——後輩達よ、この男の鈍感さは異常よ。
沙耶は心の中でそう呟くのだった。そうとも知らずに晴也はバーガーと塩の利いたポテトを交互に食べながら合間に炭酸飲料を飲んで空腹を満たしていく。
「五条、くん……は、さ……好きな人、とか……いないの？」
言って沙耶は顔が熱くなっていくのを感じバーガーで顔を隠す。
晴也は少し考えてから、
「いないかな。多分、今の俺が彼女とか作ったとしても相手してやれねェから」
「どうして？　学校の五条くんは運動も勉強もできて、他人への気遣いもできるし」
それにかっこいいし、と晴也に聞こえるか聞こえないか程度の小声で話した。
「俺ってそんな感じなんだな」
沙耶は小さく頷く。

「なんか、そういうの言われたの空以外で初めてかも。ありがとうな、委員長」
晴也は優しく微笑みながら言う。すると、沙耶は目を泳がせて両手を前に出して、慌てて手を振る。挙動不審もいいところだ。しかし、その仕草が面白かったのか晴也はクスッと笑いを溢してしまった。
だが、急に沙耶の挙動が治まり、どんどん顔が青冷めていくのが分かった。その目はまるで何か恐ろしい物を見たかのような恐怖の色で染まっていた。
「……五条くん」
絞り出したその声は振るえていた。
晴也はハッとした様子で沙耶の視線を辿る。ワクワクバーガーの窓越しに写るその先には人が倒れていた。その回りを取り囲むように人が集まり携帯電話でどこかへ連絡している者と写真を撮っている者もいた。
「見るな！」
晴也は状況をいち早く理解して、咄嗟に手で向かいに座る沙耶の目を覆う。
「どうしよ……あたし……見ちゃった……」
沙耶は身体を震わせて顔を伏せる。
晴也はどうすることも出来ず、ただ頭から血を流して倒れている男性に哀れみの視線を送ることしか出来なかった。

周囲の反応と遺体の損傷具合から見て飛び降り自殺だろう。
そこまで予想できた晴也は沙耶の頭の上に手を置き、
「大丈夫だ。何も怖くねェから」
と、ソッと優しく呟いた。
そう言いつつも晴也はある違和感を覚えていた。
確かに周辺はオフィス街に囲まれており、飛び降り自殺をするなら、どのビルでも間違いなく逝けるだろう。しかし、自殺した割には男性の首筋に掴まれた跡とズボンには失禁した跡があった。
ここで晴也はもう一つ異変に気付いた。
「なんで、俺。そこまで見えてるんだ?」
二人がいる所から遺体までの距離はかなりある。以前の視力なら人が血を流して倒れている程度だっただろう。それなのに晴也の目には、遺体の損傷具合まではっきりと見えている。唖然とする他無いが、状況が状況なため晴也は沙耶を連れてこの場を離れることを優先するのだった。

第１０話　悪鬼・焦燥

堂森町内・公園。

日が沈み始め、町が橙色に染まっていく。

公園のベンチに座る二人の学生はブランコで遊んでいた小学生が帰って行くのを何故か見送ってから重い溜め息を付く。

五条晴也と片桐沙耶だ。

沙耶は昼間のこともあってか暗いオーラに包まれている。晴也はなんとか元気づけたいと思っているのだが、如何せんこういった経験が無い。つまり、どうして良いのか分からず余り声を掛けていない。

沈黙が続く中、晴也の鞄から変わった着信音が流れ出す。

慌てて鞄を探るとスタッグフォンが鳴っていた。

晴也は先程の飛び降り自殺と何か関係があるのでは、と思い電話に出る。

「もしもし?」

『あ、先輩！　さっき飛び降り自殺の現場にいましたよね?』

「ああ、いたけど。何なら目撃しちまったし」

晴也は言ってから、しまった、と思い沙耶を見る。彼女自身は気にしないで、と表情で語っていたが、足は少し震えていた。
「で？　それが何の関係があるんだ？」
『実はですね。その現場の近く、恐らく飛び降りに使ったビルの近くに、まるで何かが着地したみたいな小さなクレーターがあったみたいなんですよ』
「まさか、それって！」
『はい。エクシードで間違いないと思います』
晴也はその言葉を聞いた途端に胸の内から怒りが込み上げてくるのを感じた。奥歯を噛み締め、空いた左手を力いっぱいに握り締める。
『相手は恐らく異常なまでの跳躍力と俊敏性を武器に襲っているんだと思います』
「何で分かるんだ？」
『空を飛ぶ相手ならわざわざクレーターを作るような着地しますかね？』
「まあ、そうだな。なら、相手は少なくとも二十階建てのビルの屋上を一っ跳びで辿り着けるってことか」
『そうなりますね』
「じゃあ、最後のボディーカードは跳躍力と俊敏性に特化したやつってことか」
晴也が軽い調子で言うと、電話の向こう側で何かが崩れ落ちたような物音が聴こえ

た。恐らく山積みにされていた書類とファイルが崩れてしまったか、不安定な状態で置いてあった発明の類が倒れたのだろう。

晴也は呆れたような溜め息を付くと背後からの視線に気付き振り返る。そこにはきょとんとした表情を浮かべた沙耶がいた。確かに、空との会話を聞かれていたとなると、エクシードの存在を知らない沙耶にとっては意味が分からないだろう。そのことを忘れて晴也は空と会話してしまっていた。

どうにか誤魔化そうと思った時、スタッグフォンから空の声が出力される。

『先輩、あんまり無茶しないで下さいよ！　戦いの疲労が残っているのは分かっているんですからね』

「大丈夫だって。それより、早くエクシードの居場所を突き止めてくれ」

『……それよりって』

分かりました、と空は吐き捨てるように言って電話を一方的に切ってしまった。

晴也は申し訳なさそうにスタッグフォンを鞄に仕舞うと沙耶へと向き直る。

「何か用事でも出来たの？」

「まあ、そんなところだな。って言うか、もう遅いし帰るか」

沙耶は首を縦に振り了承する。

帰路に着いた二人は夕日がどんどん沈んでいくのを見ながら河川敷を歩いていた。

そこから見える町並みは美しく、均等に建てられた鉄塔に繋がれた電線がいささか邪魔ではあるが、それでも昼間の事を忘れさせてくれるような気がした。

その時だった。

「ねえ、五条くん」

「うん？」

沙耶がまた何かを見つけたようだ。同時に鞄の中のスタッグフォンが鳴り響く。

晴也はエクシード関連かもしれないためスタッグフォンを取り応答した。

『先輩、近くの鉄塔！』

晴也は直ぐに視線を鉄塔に向ける。

鉄塔のてっぺん。そこに二人分の影があった。一人はトレーニングウェアを着た女性ともう一人は兎のような長い耳を垂らした異形の存在――エクシードだ。

晴也は正体がバレることも考えずに沙耶の目の前でエグゼへと変身し、全力で駆け出した。それと同時にエクシードはまるでエグゼに変身した晴也に見せつけるかのように女性を鉄塔から突き落とした。

真っ逆さまに落下する女性。

エグゼは直感で分かった。

（間に合わない！）

その時、あるものが脳裏を過ぎった。
エグゼはそれを取り出し女性に向けて投げ放つ。
それは空中で瞬時にクワガタムシに変形すると、上手く六本の足をスポーツウェアに引っ掛けて、危機一髪のところで地面との衝突を回避した。
女性を落下から救ったスタッグフォンは女性をゆっくり着地させ、エグゼの手元に戻る。しかし、救われたはずの女性が一向に動こうとしない。あまりの恐怖で失神してしまっているのか、と思いエグゼは駆け寄るが、途中でその足を止めた。
女性の首があらぬ方向を向いている。首筋は青く腫れ上がり所々の凹凸が目立つ。
首の骨が折れている。女性は突き落とされた時からすでに死んでいたのだ。
エグゼは怒りを露わにしながら顔を上げる。しかし、視界に入るのはオレンジに染まる空だけだった。兎怪人の姿は無い。エグゼがすでに死んでしまっている女性を落下から救い出そうとしている瞬間から、もうその場から消え去っていたのだ。
その事実に気づいた途端にエグゼはあることを思い出し、ハッと振り返る。
その先には誰もいなかった。
「委員長！」
エグゼは先程まで沙耶がいた場所まで走るが、その場には沙耶の鞄と大きな獣の足跡が残されているだけだった。これが一体何を意味するのかすぐに悟った。

辺りを見回しても沙耶が逃げたとは到底思えない。
「空、聞こえてっか！」
エグゼはマスクの左側に手を当てて怒鳴るように問い掛ける。
『エクシードの場所は分かりました！　場所はそこから三キロ先の高層ビルです！』
エグゼはその場で跳躍し空が知らせた高層ビルを視認する。
『スタッグフォンでエグゼイダーを呼んで下さい！』
「駄目だ、待てねェ！」
『なら、私が勝手に送ります。位置情報はこちらで常時確認出来ているので走り出して下さい』
「走れって、それで大丈夫なのか？」
『私を信じて下さい。必ずエグゼイダーを送り届けますから』
いつにも増して真剣な空の声にエグゼは、晴也は冷静さを取り戻していた。
――俺がやらなきゃ誰がやる。
――こういう時こそ冷静になれ。
エグゼは自分に言い聞かせるように胸をなで下ろし夕焼け空を仰ぎ見る。
「どれくらいでエグゼイダーはこっちに着く？」
『もう発進させました。全速力で走らせているので、あと一分で到着します』

「一分か。分かった。それとごめん。ありがとうな。お陰で頭が冷えたみたいだ」
それに、と付け加えて視界にエグゼイダーを捉える。
「新しいカードの切っ掛けが出来たみたいだ」
エグゼは言ってから無名のボディーカードとバックルの挿入口に挿入する。
『ＳＡＶＩＮＧ　ＢＯＤＹ』
カードは能力を得ると同時に挿入口から飛び出してくる。それを手で横薙ぎするように掴み取る。
「『ＬＡＮＣＥ』か」
銀縁のボディーカードの表面には長槍を構えたエグゼと下部には『ＬＡＮＣＥ』と印字されており、裏面には長槍のマークが描かれている。
エグゼがカードをカードケースに納める頃にはエグゼイダーは到着し、隣り合うように停車していた。
「今行くぞ、委員長！」
エグゼは沙耶の鞄を手に持ち、エグゼイダーに跨がりエンジンを吹かせた。
目的地はもう分かっている。そのまま今まで出したことのないスピードで発進した。
その余りの勢いにエグゼイダーの前輪が浮き上がってしまう程だが、気にすることなく瞬時に態勢を整えて真っ直ぐに向かった。

第11話　跳躍・短鎗

高層ビルの屋上。そこにはマフラーを首に巻いた季節外れのタンクトップを着た少年とどこかの高校の制服を着た女子校生がいる。兎のエクシードと晴也のクラスメイトであり委員長の片桐沙耶だ。

日は完全に沈み、町は暗黒に呑み込まれる。しかし、それから逃れるために電灯が人工の星明かりを作り出している。夜景としては最高であるが、状況が状況なだけに沙耶は喜んで見入るどころか恐怖で表情が歪んでいる。

「そんなに怯えないでよ。間違って落としちゃったらどうするの？」

マフラーの少年は狂気な笑みを浮かべて言う。

「……なんてね。安心して。君はエグゼが来るまで生かしておくから。っていうか君可愛いから殺したくないんだよねえ」

言いながらマフラーの少年は暇潰しと言わんばかりに逆立ちやらバク転をする。その身軽さは新体操のそれを超越しているのは、エクシードの存在を知らない沙耶でも分かった。それ以前にマフラーの少年が怪人態から人間態に戻る瞬間や、晴也がエグゼに変身する瞬間を見てしまっているせいで頭の中が混乱しっぱなしなのだ。

沙耶はただ怯えることしか出来ない。
その時だった。
「来たか」
マフラーの少年が静かに呟くと沙耶の手を引っ張り屋上の隅ぎりぎりまで追い込む。
二人の視界に広がるのは町並みだけだ。もう足場は視界の端でしか捉えることが出来ない。
沙耶は目に大粒の涙を浮かべ、バイクに乗ったエグゼに変身した晴也を見つける。
次の瞬間、沙耶の全身に宙に浮いたような感覚が駆け巡った。
落とされた。
声一つ出せない怯えた沙耶をマフラーの少年は何の躊躇いも無く突き落としたのだ。
――死んじゃうの？
沙耶が心の中で呟く頃には硬い鎧に包まれた胸の中にいた。
まず視界に入ったのは高層ビルの屋上に立たされた沙耶とマフラーを首に巻いた少年だ。
次に起きたことに衝撃を覚える前に、エグゼは反射的にボディーカードを『ＰＬＡＩＮ』から『ＬＡＮＣＥ』に変え、瞬く間に換装を終えた。そして、そのまま跳躍し落下

する沙耶を空中で受け止めて地面に綺麗に着地した。
「大丈夫か、委員長？」
「う、うん」
「なら、早く逃げろ」
沙耶は言われて走り出し近くの木陰に隠れる。そのことに気付いていないエグゼは新しいエグゼの姿に驚愕を露わにしていた。
「すげー、軽いな」
全身を覆う黒い強化皮膚は変わらず。肩部、前腕部、胴部の装甲は極端に薄いものへと換装された。その代わりに全身が軽く、今まで以上に脚に力が入るようになり、先程も少しの力で跳躍しただけで落下している沙耶を空中で受け止めることが出来た。しかし、その反面にパワーが落ちている気がする。先程から拳に力を籠めるが『ＰＬＡＩＮ』程のパワーを感じない。おそらく、半分ほどしかないだろう。だが、跳躍力や瞬発力と言った脚に関係する部位の強化がなされていた。
エグゼは右手を開き、カード名と同じ鎗を実体化させる。しかし、それはエグゼが思っていたよりも短く半分程度の長さしかなかった。
俗に言うショートランスだ。
それを見て晴也は、

「身体は軽いけど、力が出せない。弱らせてから『ＰＬＡＩＮ』で決めるか」
と言って深呼吸をしてから高層ビルを見上げる。
「高いな。でも……行ける」
そんな気がした。
ただそれだけの理由で晴也は思い切り跳躍した。
まるでバイクを走らせているかのように高層ビルの窓が過ぎ去っていく。数秒して屋上を少し越え、身体を回転させて綺麗に着地する。
「お前、人間じゃないよな」
「いや、人間だよ。超古代の……ね……」
マフラーの少年はニッコリと笑みを浮かべて変身する。
体表が内側から何かが暴れ出すようにうごめき、禍々しいオーラを身に纏って瞬く間にその姿を変貌させていく。
頭から垂れ下がる長い耳に口から飛び出た牙のような前歯。全身は羽毛で覆われ、脚部の筋肉は岩の様にゴツゴツと発達している。そこまでの変化をしても人間のフォルムを持っている。まるで兎と人間が融合したような姿だ。
「やっぱりお前等も変身出来るんだな」
「あれ？　もしかして知らなかったの？」

「お前等の存在自体、最近まで半信半疑だったからな」
「へえ。……なのに殺したんだ。二人も」
二人。蜘蛛怪人と烏怪人のことだ。
エグゼはショートランスを構えてにじり寄る。
「僕はね、許せないんだ。僕を封印したことよりも、僕よりも高い所から世界を見下ろす奴等を」
言って兎怪人はその殺意を剥き出しにして飛び掛かる。
兎怪人の両手の鋭利な爪が月光で閃く。それが軌跡となってエグゼの薄い装甲を斬り裂く。その速さは尋常ではなく、普通の人間なら目で追うことは不可能に等しいだろう。しかし、エグゼに変身し尚且つ超人並みの反射神経を持った『ＬＡＮＣＥ』の特性を生かすことで、初撃以外の全ての攻撃を紙一重で避ける。避けきれない攻撃はショートランスで弾く。
余りの身軽さにエグゼ自身が驚きはしたもののそれを表に出すことなく、的確にショートランスで刺突攻撃を繰り出す。だが、それは爪で弾かれ決定打にならない。
「やっぱり単純なパワーで負けてる」
エグゼがそう言っている内に兎怪人は不敵な笑みを浮かべて別の高層ビルの屋上へ跳躍する。エグゼもそれを追うため跳躍する。以前なら出来なかった高層ビルの屋上

から屋上への跳び移り。それが出来るほど跳躍力が増している。
　二人の跳躍による追いかけっこは、最終的にエグゼの方が上回り、兎怪人よりも前方に着地した。跳躍力はエグゼの方が上だ、と示された兎怪人はそのことが勘に触ったらしく、無闇やたらに鋭利な爪を振り回し始めた。
　エグゼはそれを紙一重で避ける一方で、切れ味を確認するため鉄骨を切り裂くよう誘い込む。そして、
「……嘘だろ?!」
　背後にあった鉄骨がまるで和紙をハサミで切るかの様に容易く切断されてしまった。
　エグゼが驚愕を露わにした瞬間、兎怪人は腕を横薙ぎする。それをエグゼは上半身を逸らすことで回避し交代する。
　今までの攻防で『ＬＡＮＣＥ』の特性が大方理解できた。
　相手は俊敏性とパワーの両方を兼ね備えている。それに比べてこちらは、俊敏性はあるが決め手となるパワーが足りない。
　加えて、昨夜の戦いの疲れが今になって現れてきた。その証拠に膝がガクガクと震え、ショートランスを構えるのでやっとの状態になっていた。
　エグゼのマスクの向こう側で晴也の額に冷汗が滲み出る。
　どうすれば兎怪人を倒せるのか。

それだけがエグゼの脳裏を右往左往している。

「隙あり！」

考え過ぎた結果、エグゼは一呼吸の隙を作ってしまった。

それを見逃す訳も無く、兎怪人は鋭利な爪でエグゼの装甲を往復びんたの様に引っ掻き、最後に強靭な脚の筋力を用いた飛び蹴りを腹部に打ち込んだ。

攻撃を受けたエグゼは、全身を駆け巡る激痛と最後に受けた飛び蹴りによる鈍痛で意識を失い掛けた。さらにその身体は蹴りのあまりの破壊力によって宙を舞っていた。

エグゼが兎怪人の飛び蹴りを食らったのは屋上の真ん中辺り。そして屋上の広さは学校の体育館程ある。それでもエグゼの身体は高層ビルから投げ出されたのだ。だが、ここまでの流れはエグゼの予想通りだった。

問題はそこからだ。

エグゼの落下地点は屋上ではなく、地上の、それもコンクリートで出来た地面だ。本来の『ＬＡＮＣＥ』状態なら落下途中で体勢を整えて見事に着地するだろう。しかし、極度の疲労と深手を負ってしまった今のエグゼにそれが出来るかとなると、答えは否だ。

エグゼの身体は真っ逆さまにコンクリートの地面に激突した。そこでエグゼの意識が完全に途切れてしまった。

落下地点には小規模のクレーターが出来ていた。
高層ビルの屋上からそれを見ていた兎のエクシードは鼻で笑うと別の高層ビルへと跳び移り、また別の高層ビルへと跳び、その場から離れた。
その際、兎のエクシードは腹部を深々と押さえていた。
実を言うと、跳び蹴りを撃ち込んだ際に刺し違える様にショートランスで腹部を突かれていたのだ。それはある意味でカウンターとも呼べた。なぜなら、蹴りの衝撃の三分の一を刺突攻撃に乗せられていたからだ。
もしカウンターを合わせるのがもう少し上手い相手だったらと思うと兎のエクシードは背中に悪寒の様なものを感じた。
「この時代のエグゼも侮れないってことか」
いつもなら何度でも跳べるはずがその足はいつの間にか止まっていた。

第12話　治癒・新手

見覚えのある天井。
最初に視界に入ったのはそれだった。
ここは天道空の部屋だ。
晴也はベッドから身体を起き上がらせようとする。しかし全身に激痛が走り、力むことすらままならない状態だった。昨夜のことを思い出すと生きているのが不思議に思えて仕方がない。
そこでタイミングよく部屋の扉が開かれる。
「先輩！」
開口一番がこれだ。
空はベッドに横たわる晴也に駆け寄り、そして、飛び掛かる。
「馬鹿、おまっ！　痛っ……くない……」
先程まで起き上がることすら出来なかったはずの身体が、激痛はどこへ行ったのやら、普段と変わらず起き上がれていた。
「あれ……」

晴也は驚愕と言うより困惑を露わにしていた。そんなことは露知らず、空は力一杯に晴也の身体に抱き付いていた。次第にそれは絞め技となり晴也を苦しめていく。

「こ、コラ！　離れろ！」

「嫌です！　先輩……約束したのに、丸一日も寝ちゃって……」

「丸一日⁉　ちょっと待て、今日何曜日だ！」

「水曜日ですけど」

「……嘘だろ」

晴也は枕の横に放り捨てられていたスタッグフォンを掴み取りある所に連絡する。

コール三回で相手が電話に出る。

「委員長！」

そう。晴也が連絡を取ったのは委員長――片桐沙耶だ。

『そんなに大きな声出さないでよ、五条くん』

「無事なのか？　またアイツ等に襲われたりしてないか？」

『うん。あれ？　五条くんが倒したから出なくなったんじゃないの？』

「……え、いや、俺は……負けて……」

『あ……ごめんね』

「いや、それより委員長が無事で良かった」

『あの……五条くんが、その……変身した、こと……だけど……』

沙耶の言葉が詰まる。

言いにくいのは当然だろう。まさかクラスメイトが変身して怪人と戦っているなんて夢にも思わない。しかも、それを目の前で目撃し、加えて自身が襲われてしまったのだ。信じざるを得ない光景を目の当たりにしてしまったことは、沙耶にとってどれほどの負担になってしまっているのだろうか。

晴也の胸内を不安が込み上げる。

『また、今度……卒業式が終わってからでも良いから聞かせてね』

スタッグフォンの向こう側で沙耶が微笑んでいるのが分かった。それだけではない。声色も怯えている様子もなく、むしろ、いつも通りの元気さを感じた。彼女が晴也を気遣って無理をしているかもしれない。

それでも、今の晴也には充分すぎるくらいの薬になった。

二人は何度か言葉を交わして電話を切った。

「随分親し気に話していましたけど、誰ですか？　あとエグゼのことも話してましたね。あまり、がみがみ言うつもりは無いですけど、エグゼのことは隠しといた方がいいんじゃないですか？」

「電話の相手は片桐沙耶。俺のクラスの委員長だ。委員長は口が堅いし、自分が襲われ

てるから多分大丈夫だと思うぞ」
「……そんな。まさか先輩、その委員長のこと……。言って置きますけど先輩をここまで運んだのは私なんですからね！　大変だったんですから」
「なんだよ、急に。そのことについては感謝してるよ。それより兎怪人の方は？　俺が寝てる間に動きはあったのか？」
「そう言うと思って調べてありますよ」
空は呆れたように地下室に行くよう促す。
晴也は起き上がり、身体を伸ばしてから部屋を出る。どうやら身体に受けたダメージは本当に回復しているみたいだ。身体に巻かれていた包帯を解くと、そこに合ったであろう傷も全て綺麗さっぱり無くなっている。
自らの身体の異変に気付き始めた晴也。
「まさかな」
晴也はエクシードと対面した時と同じ様な感覚を覚えた。
「どうしたんですか？」
扉の端からひょっこり顔を覗かせて空が言う。
「なんでもない」
そう言って二人は足早に地下室へ向かうのだった。

地下室、言うなれば空の作業部屋。
空は手慣れた手付きでキーボードを操作し、晴也はそれを背後で見守る。
「先輩が眠っている間に起きた事件は五件あります」
「五件だと⁉」
「はい。内二件が兎怪人、ラビットエクシードが行ったものだと思います。しかし、残りの三件は別の怪人、エクシードが行ったものですね。手口がそれぞれ違うので新しいエクシードが三体出たことになりますね」
「兎怪人」
「ラビットエクシード！」
「……ラビットエクシードは今どこにいるか分かるか？」
「はい。衛星カメラの画像に検索を掛けて、警察の無線なんかを掌握すればすぐに見付かると思いますけど」
「そうか。なら、すぐに頼む。俺はエグゼイダーでパトロールしてくるから」
「……え」
空は目を見開き驚愕を露わにする。
「まだ休んでいないと。怪我だって二、三日で治るものじゃないですよ」

「それなら大丈夫だ。もう治ってるし」
晴也は言って服を乱雑に脱ぎ捨てる。
突然のことだったので空は放心状態になったが、直ぐさま正気に戻り、室内の監視カメラが作動しているか瞬時に視認した。ついでに机の上に置いていた新しいガジェットに手を掛けようとした時に晴也に見つかった。
「写真を撮ろうとするな」
「写真じゃなくて動画です。あ……」
「お前、毎回思うけどそこまで盗撮して、そんなに俺のこと好きなのか？」
「え？　今の台詞は無いです、先輩」
「そのまま嫌ってくれたら嬉しいんだけどな」
「そんな訳ないじゃないですか」
言いながら空は机の上に置いていた新しいガジェットを手に取る。
「行くならこれも一緒に持って行って下さい。きっと役に立つと思うんで」
空はそれを渡してパソコンに向き直り、エクシードに関する新しい情報がネット上にあがっていないか確認し始める。ようするに、速く行って下さい、と言っているのだ。
晴也は新しいガジェットをボディーバックに詰め込み、バックルとスタッグフォンが中に入っているか確認してから背負う。

「行ってくる」

一言残して晴也は地下室を後にした。

第１３話　稲妻・長鎗

晴也はエグゼイダーで町中を駆け回る。

ラビットエクシードが人を襲っている姿も無ければ、空からの連絡も無い。ラビットエクシードは完全に姿を晦ましているようだ。今も誰かが襲われていたらと思うと、いてもたってもいられない。気持ちだけが先走ってしまう。

しばらくして晴也は買い物帰りなのか大きなビニール袋を手にしている片桐沙耶を見つけ、隣にエグゼイダーを止める。

「あ、五条くん。どうしたの？」

「あーえっと、パトロール中かな……。委員長は？」

「見ての通り買い物帰りだよ。パトロールってことはあの兎の怪人を探しているの？」

「うん。他にも別の怪人が三体出たみたいで」

「え、三体も……」

沙耶の表情が曇る。

晴也は余計なことを言ってしまったとばかりに慌てふためき、

「大丈夫！」

と大声で言う。
続けて、
「俺が何とかする。だから大丈夫!」
そう言い残して晴也はその場を逃げるように後にした。

空からの知らせが入ったのはそれから十分後だった。
晴也の現在地のすぐ近くにある立体駐車場の屋上にラビットエクシードが現れた。
すでに一組の親子連れが襲われているようで、空の声にいつも以上の焦りの色が伺えた。
晴也は現場に着くや、二組目の親子連れを襲おうとラビットエクシードが飛び掛かったところへ、エグゼイダーをフルスロットルで走らせて弾き飛ばす。
「早く逃げて!」
晴也の言葉に促され親子連れは立体駐車場の屋上にある非常階段から逃げていく。
空の言っていた通り一組目の親子連れはすでに無残な姿になっていた。高所からコンクリートの屋上に叩きつけられたその姿はあまりにも酷い光景だった。晴也は目を背けてしまうのも当然なそれを目にしても動じることは無かった。
それ以上に胸の奥から込み上げる怒りが晴也を振るい立たせる。

ボディーバックから鉱石のレンズが目立つ機械仕掛けのバックルを取り出し、勢いよく腹部に当てる。それに呼応するかのようにバックルの両サイドからベルトが伸長し、腰に巻きつき、背部で合体、完全なベルトとなる。

次に、左サイドにあるカードケースから『ＰＬＡＩＮ』と印字されたボディーカードを乱雑に引き抜き、バックルのカード挿入口に挿入する。

『ＰＬＡＩＮ』

とバックルから音声が出力され、リズミカルな待機音声が流れる。

「変身ッ！」

怒号のような掛け声と共にバックルの左上にある赤いボタンを押す。

『ＰＬＡＩＮ　ＦＩＧＨＴＥＲ　ＧＯ　ＡＨＥＡＤ！』

バックルから勢い良く音声が発声されると、同時に晴也の身体が瞬く間に光に包まれ、装甲を纏った戦士へと変身する。

晴也の全身を黒い強化皮膚が覆い、胴部、肩部、前腕部に銀色の装甲、膝と手首と足首にはバックルの霊石と同じものが装着される。頭部は黒い強化皮膚に纏われ、特徴的なオレンジ色の複眼が現れ、三本の角型アンテナがＶ字に伸びる。そして、全身に満遍なく霊石のエネルギーが渡るように黄色いエナジーラインが巡る。

変身を終えたエグゼは荒ぶる怒りに身を任せて、ラビットエクシードに向けて大きく拳を振るう。

だが、ラビットエクシードは人知を超えた跳躍力によって、空へと舞い上がり、容易く躱した。さらに、ついでと言わんばかりにエグゼの肩を踏み台にしてもう一度跳躍する。

よろめくエグゼを背後にラビットエクシードは余裕の笑みを浮かべまた跳躍し、エグゼの首に跳び蹴りを食らわせる。

「ぐわッ！」

エグゼの身体はまるで野球ボールのように吹っ飛ばされ地面を転がる。

「くそ……。『ＰＬＡＩＮ』で弱らせてから『ＬＡＮＣＥ』で止めを刺そうと思っていたのに……」

『今の一撃で冷静さを取り戻したようですね』

「……空か」

『ラビットエクシードを相手にするには「ＰＬＡＩＮ」では役不足です。早く「ＬＡＮＣＥ」にボディーチェンジして下さい』

「分かったよ。ついでに三枚目のソウルカードのイメージも出来た」

『ほうほう。三枚目ですか……って、最後の一枚じゃないですか！　いいんですか？

そんなに一気に決めちゃって』
「何とかなるし、何とかする」
　エグゼは吐き捨てるように言って立ち上がり、カードケースから何も印字されていないソウルカードを取り出す。
　そこへラビットエクシードが跳び込み、猛威を振るってエグゼのカード生成を妨げる。あまりの手数に防戦一方になってしまうエグゼ。そのせいでカードをベルトの挿入口に入れることすらままならない。

　天道家・地下室。
　エグゼの複眼に搭載されているカメラと衛星カメラによって映し出された映像をパソコンで見ている空は、エグゼの危機的状況を打開するための指示を出す。
「先輩！　新しいガジェットを使って下さい！」
『え？　あのビデオカメラのことか？』
「はい。その名も……」
　空が言い掛けたところでエグゼの装甲から火花が飛び散り、それに相応した衝撃によって吹っ飛ばされる。そのせいで映像に激しいノイズが混じる。
「先輩！」

『耳元で叫ぶな！　取り敢えず使わせてもらうぞ』
「使って下さい！　ドラゴンフライビデオを！」
空は拳をぐっと握り、力強く言った。

立体駐車場・屋上。
新たなガジェット――ドラゴンフライビデオを手にエグゼはラビットエクシードの猛攻から逃れる。
「名前長過ぎ。お前もそう思うだろ？　ドラゴンフライビデオ」
エグゼはビデオカメラに向かって言う。
するとそれに答えるようにスキール音のような音――声が発せられる。
「ドラゴンフライだから……ドライ。ドライビデオでどうだ？」
「キュイン、キューイン！」
まさしく上機嫌と言いたくなるような声を上げてビデオカメラ――ドライビデオがエグゼの手元で変形する。
名前の通りビデオカメラがトンボのような姿に変形し、飛翔したかと思えば、そのままラビットエクシードに突っ込んでいく。その突進力は凄まじく、ラビットエクシードを後ろへ下がらせるほどだ。さらに二対の羽が超振動させることで、絶大な切断能力を

帯びた強靭な刃となってラビットエクシードの身体をずたずたにする。
その隙を突いてエグゼは無言でベルトの右サイドにあるソウルガジェットにソウルカードを挿入する。
『ＥＲＲＯＲ』
と音声が出力され、
『ＳＡＶＩＮＧ　ＳＯＵＬ』
という新たな音声が出力され、ソウルガジェットからカードが勢いよく排出される。
それを手にしたエグゼは、新たなソウルカードを確認する。
「青い稲妻の紋様。これが三枚目のソウルカード『ＳＰＡＲＫ』か」
青いソウルカードをソウルガジェットに、『ＬＡＮＣＥ』のボディーカードをバックルにそれぞれ挿入し、それぞれの起動ボタンを押す。
するとソウルガジェットから『『ＳＰＡＲＫ』』と音声が出力され、バックルからは『『ＬＡＮＣＥ　ＦＩＧＨＴＥＲ　ＧＯ　ＡＨＥＡＤ』』と音声が出力される。
轟く雷鳴と共にエグゼの装甲が『ＰＬＡＩＮ』の物から『ＬＡＮＣＥ』の物へと瞬く間に換装される。そして、元の銀色の装甲から青色に染まる。
「これがスパークランスか。想像以上にカッコイイかも」
『無駄口はそこまでです。来ますよ』

「え？　うわッ!?」

空の言葉に釣られて顔を上げた瞬間、ラビットエクシードの鋭利な爪が目前まで迫ってきていた。

だが、エグゼは冷静にそれを直前で躱し、スクリューブローをラビットエクシードの顔面に叩き込んだ。

その瞬間、まるで爆弾が爆発したかのようにエグゼの拳から青い稲妻が弾ける。

「よし、上手くいったな」

エグゼの考えでは『ＬＡＮＣＥ』で決定的に足りなかったパワーを、肉体を活性化できて、尚且つ、相手の動きを封じられるような効果を持ったソウルカードで補おうとしていた。そして、それが全て上手くいった。稲妻によって肉体を活性化させ反射神経と反応速度の向上により、回避行動を相手よりも一瞬先に行い、カウンターとして稲妻を纏った拳をラビットエクシードにぶつけたのだ。

エグゼは右手を開き『ＬＡＮＣＥ』の代名詞とも言える武器――短鎗エグゼランスを出現させて構える。

「クソッ！　何だ、今のは！」

ラビットエクシードは弾けた雷撃によって微かに焦げた鼻先を押さえ立ち上がる。

「稲妻、雷、電気。なんでエグゼがそんな物を使えるんだ！」

困惑の色を露わにしているラビットエクシードを無視して、エグゼは稲妻を纏った短鎗でラビットエクシードの全身を高速で刺突、殴打する。一撃ごとに轟く雷撃によってラビットエクシードの身体から湯気が噴き出し、最後に強力な一撃を繰り出してラビットエクシードを吹っ飛ばす。

『ＬＡＮＣＥ』単体のパワーでは到底出来ないような攻撃にラビットエクシードは、ただただ驚愕することしか出来なかった。

「舐めるなよ！」

ラビットエクシードは着地と同時に勢いを流して、滑空するように跳躍し、鋭利な爪を剥き出しにして乱舞する。

それをエグゼは躱し、いなし、流す。

だが、あまりの手数の多さに防ぎ切れず、エグゼの薄い装甲にラビットエクシードの鋭利な爪が炸裂する。エグゼは『ＬＡＮＣＥ』のその軽さ故に鋭利な爪の乱れ引っ掻きによって切り上げられてしまう。

「やっぱり……ランスの、装甲は……薄いな……」

『なら近づけさせなければいいんですよ』

「簡単に言うなよ」

『ランスの短鎗を伸長させるんですよ。そしたら名前通りのランスになります』

「え……。これ伸びるの？」
『はい。先輩が寝ている間に解析しておきましたから』
「よし、なら……」
エグゼは空から言われるがままに、両手で短鎗の中間を握り、左右に引っ張る。するとエグゼの全身を巡るエナジーラインが発光し、それを受けて短鎗が中間辺りから伸長し、見事な長鎗へと変貌を遂げる。
「一気に止めだ！」
ラビットエクシードは自分の鋭利な爪を見て、確かな攻撃力に安堵し、反撃の狼煙を上げる。
エグゼはそんなことを気にせず、必殺技発動のためのプロセスを実行する。
まずソウルガジェットのボタンを二度押す。するとソウルガジェットから、
『ＳＯＵＬ　ＤＲＩＶＥ』
と発声され、全身に稲妻が纏われ、迸る。
続いてバックルの赤いボタンを押すと、
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
と発声される。
途端にバックルの中心に埋め込まれた霊石アークルが生み出す強大なエネルギーが

噴き出し、エナジーラインを通って長鎗へと注がれる。それと同時に全身に纏われていた稲妻が長鎗へと纏われる。

まるで稲妻を掴んでいるかの様に錯覚してしまうほど稲妻が轟き、コンクリートの地面を焦がしていく。

長鎗の切っ先を真っ直ぐにラビットエクシードに向け、先程ラビットエクシードが行った滑空するかのような跳躍で一気に距離を詰め、腹部に稲妻を纏った長鎗を深々と突き刺す。

反撃の狼煙は意味を成さなかった。

まさにあっという間の出来事だった。

その威力と突進力は凄まじく、貫通した後、勢いを殺しきれずエグゼは前方にスライディングし、ラビットエクシードの爆散を背中で見届けることになった。

エグゼは振り返り足元まで引かれた黒い線を見やる。そこからは微かに煙が上がっていた。

「『ＬＡＮＣＥ』のパワー不足をここまで補えるなんて」

跳躍力を全て突進力に変えた刺突攻撃。そして、それは新たなソウルカード『ＳＰＡＲＫ』が生み出す稲妻と相性がいいらしく、それ故に生まれた破壊力なのだろう。

エグゼは安堵の息を漏らし、そのまま擬装用のホログラムを解いたエグゼイダーで颯

爽と去っていった。

第三章　立ちはだかるは氷壁

第１４話　烏人・晩餐

堂森町内。

闇夜に響く鉄と鉄がぶつかり合う音。それとともに火花が飛び散る。

黒い身体に銀の装甲、三本の角とオレンジ色の複眼、そして霊石のレンズが目立つ機械仕掛けのベルトを中心に黄色いエナジーラインが全身に走っている。

霊石のエネルギーを使って戦う戦士――エグゼだ。

エグゼの戦う相手は普通の人間ではない。

「クソッ！　この烏野郎、すばしっこい！　それに……ぐはっ！」

烏野郎から繰り出された回し蹴りが後頭部に炸裂し、さらに頭を鷲掴みにされ地面に頭を打ちつけられる。

超古代の人間がエグゼと同じ霊石――アークルを体内に埋め込むことで変身能力を得た怪人――エクシード。そして、エグゼの目の前に立ちはだかるエクシードは烏の能力を持ったエクシードだ。

格闘術に優れた烏怪人ことクロウエクシードはそれを操るには不可解なほどに理性

が失われ、まさに獣と言う他ない。そんな狂人と化した状態でありながらも正確に人間の急所を突いてくる。達人級にまで鍛え上げられた武術と野生の本能が融合しているからこそなせることなのだろう。加えて、ありあまる膂力をなんの躊躇もなく振るっていることから、本当に理性というものを失っているとしか考えられない。

その証拠に先程から言語という言語を話す素振りが一切見られない。

「前に戦ったクロウエクシードと外見はちょっと違うけど中身はただの野生児だな」

「ゴギャー！」

エグゼの不意を突くようにしてクロウエクシードは背中に生えた漆黒の翼を羽ばたかせて滑空するが如くエグゼの背後から急接近する。

だが、エグゼは逃げるどころか避ける素振りすら見せない。むしろ何かを狙っているかのように立ち尽くす。

「……けどな」

エグゼはバックルの赤いボタンを長押しする。すると、

『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』

バックルから電子音声が発せられる。それと同時にアークルから大量のエネルギーが全身を巡る黄色いエナジーラインを駆け抜け右足へと収束していく。

「俺は正義のヒーロー、エグゼだ！」

　クロウエクシードの飛翔突進攻撃に合わせて、強大な破壊力を秘めた右足の回し蹴りがクロウエクシードの頭部に炸裂し爆散した。
「だから負けらンねえんだよ」
『カッコ良く決めたいのは分かるんですけど。今の台詞はカッコ付け過ぎです。それに今の回し蹴り？　カウンターキックですか？　ちょっとタイミングずれてましたよ』
　突然の声にエグゼは驚く様子を見せず、むしろ当たり前のように右手を右側頭部に当てて応答する。
「バレてたか……」
『そうだよ、五条くん』
「その声はまさか委員長か？　いつからそこにいたんだ？」
『最後のカウンターキックだっけ？　あれが決まる直前かな。って言うかもう委員長じゃないよ。もう高校卒業して三ヶ月だよ？』
「そう言えばそうだな。大学生活はどう？」
　エグゼは言いながらエグゼイダーに跨り、エンジンを駆動させる。
「今から帰る。だからちょっと待ってて」
　言ってエグゼはエグゼイダーを発進させた。

黒い四肢に銀の鎧――エグゼが機械仕掛けの騎馬を駆り何処かへ去って行く。その姿を澄んだ瞳で見つめる少女がいた。

物陰に隠れていた少女は、そこから出るや否やすぐにクロウエクシードが爆散した場所へ駆け寄る。突然の暴風に揺られる白いワンピースのスカート部分を右手で押さえて、空いた左手で大きな麦わら帽子を押さえ、ただじっと黒く焦げた地面を見やる。

その表情は少女とはとても思えないほど不気味で妖艶な笑みを浮かべていた。

「あーあ。私の兵隊が一人やられちゃった。これは高くつくよ、エグゼ」

低い声とともに少女は暗闇と同化して姿を消した。

天道家・リビング。

広い食卓には三人分のカレーライスとサラダの盛り合わせが綺麗に並べられていた。その中で一際目立つ量を誇っているのが晴也のものだ。もちろんこれらを用意したのは空と沙耶だ。

「ただいま」

晴也の声が天道家に響く。

「「おかえりなさい」先輩！」

リビングに通じる扉から可愛らしい声が届く。そのすぐ後に二人がまるでトーテム

ポールのように頭を出して満面の笑みで迎える。晴也はリビングから漂うスパイシーな香りを伝いながら二人にリビングへと招かれる。
「今日はカレーか」
「はい！　私が作ったんですよ！」
「違うだろ。委員長……じゃなかった。片桐と一緒に作ったんだろ？　差し詰め、お前は包丁で具材処理とサラダの盛り付けぐらいか？」
「ぬ!?　どうしてそれを……」
「お前の味覚がすでにバスターされてることなんてずっと前から知ってるよ」
晴也は優しく空の頭の上に手を置き、乱暴に撫でて、空の髪をぼさぼさにする。
それを羨ましそうに見ている沙耶に気づいた晴也は、してほしいの？　と言いたげな表情を浮かべて沙耶に手を伸ばす。しかし、沙耶はその手を受け取ることなく、顔を真っ赤にして足早に食卓に向かい椅子に座る。
撫でる手を止めた晴也は最後に空の額にデコピンを食らわせて食卓に着く。それも沙耶の隣に。
「ど、どうして？」
「高校の時そんなに絡みなかったし、エグゼのことを相談できるのも空以外に委員長じゃなかった……片桐だけだからさ。実際、こうやって家に来てくれるの空も喜んでい

るみたいだし。だから、まあ、隣に座りたいだけかな」

「そっか……。そっか……」

最後に沙耶が小さく微笑んだところを晴也は見ることが出来なかった。なぜなら、沙耶が微笑むのとほぼ同時に背後から空の強力で凶悪な締め技を首に決められたため悶絶寸前になったからだ。

かくして、天道家の食卓はいつも以上に賑わうのだった。

第１５話　流言・疑心

六月十日八時三十分。堂森町・耶蘇川。

河川敷に集まった警察官達はブルーシートに覆われた物、いや、者を見て驚愕していた。

事の発端は今朝方、朝のジョギングのために耶蘇川の河川敷を走っていた男性の「川に妙な物が浮いている」という通報だった。すぐに駆けつけた警察官と男性で「妙な物」を引き上げた結果、それが黒焦げになった人間だったということで堂森署の警察官が現場に足を運び捜査を開始したのだ。

スーツを着た丸坊主の男性。一見して強面のその人物――上條順平は鑑識の報告を受けて重い溜息を付く。

「死因は全身重度の火傷による即死。普通ではあり得ないほどの熱で焼かれたと思われる。歯型は溶解、指紋は焼失してしまっているため、焼死体の身元を特定するのはほぼ不可能。想定される温度は五千℃以上。つまり、太陽の表面温度五千五百℃並み。検死を終えるまでは正確なことは言えないがほぼ間違いない……か……」

三月末から発生し始めた不可能犯罪。

町中や署内の噂では、漫画や特撮で出てくるような怪人が堂森町の住民を襲っているという。しかし、そんな奴等から住民を守る戦士がいるという。その戦士の名は「エグゼ」と怪人達が口々に言っているらしい。

――信じ難い話だが信じるしかないのか。

疑心暗鬼になりながら順平はもう一度ブルーシートに覆われた身元不明の焼死体に視線を向けるのだった。

同日十時。天道家・地下室。

空が手慣れた手つきでキーボードを操り、新たなエクシードの情報収集に努める。その姿を背後から見ていた晴也と沙耶は情報がまとまらないか今か今かと待っている。

今回のエクシードの特徴は炎。

「ここ数日で約三十人が行方不明。そして二十人が焼死体で発見されていますね。衛星カメラのサーモグラフィー画像で調べた結果、堂森町の都市部の裏路地、河川敷近く、公園など。ほとんど全域ですね」

「なんだよ、それ。それじゃあ止めようにも止めらんねえじゃんか」

「慌てないで下さい。ドライビデオが随時アタックモードで町中を飛び回っていますから」

「それでもドライビデオは一つしか無いだろ?」

「当たり前じゃないですか。そのための衛星カメラですよ？」
　空の言葉に沙耶がポンッと手を叩く。
「サーモグラフィー画像！　炎を操るエクシードならソイツが誰かを襲った時に一気に気温が高くなるはず。それを探知した時にアラームが鳴るようにセットしとけばいいんだよ！」
　それを聞いた空は「全部言われた」と言いたげな表情を浮かべて、黙って、沙耶が言った通りになるように衛星カメラに新たなプログラムを入力する。
「炎のエクシードの行動は他のエクシードよりも一際活発なのですぐに反応が出ると思います。それまで対策でも考えますか？」
「対策ねえ。炎のエクシードの操る炎って太陽並みなんだろ？　今更だけどよ。そんな奴を相手にどう対応するんだよ」
「珍しく弱気ですね。便秘ですか？」
「便秘は関係無ェだろ！」
　晴也はツッコミを入れる。
　その背後で沙耶は「ホントに便秘なんだ」と言いたげな表情を浮かべていた。

　同日午後三時。堂森町・堂森港行きバス車内。

満席の車内に白いワンピースが目立つ少女がいた。透き通る様な白い肌に華奢な身体、金色の長髪がより一層その美しさを際立たせている。

嫌でも人の視線を集めてしまう少女はうんざりした様子で向かいに座っている青年を見やる。青年は両耳にイヤホンを付けていて、変わった携帯電話を操作しているせいか少女の視線に気付く様子が全く見られない。

あまりにも青年が少女の視線に気付かないからか、周りの乗客の視線まで青年は集めてしまう。それでも気付かない辺り青年の意識は完全に自分以外の世界から遮断されているのだろう。

五条晴也。絶賛他人の視線を集めて困惑中。

いったい何が起きているのか理解できない。晴也は耳をイヤホンで塞ぎ、スタッグフォンで視線を逸らすことにした。

それから約二十分近くその状況が続いた。

「災厄だ。なんであんなに見られてたんだよ、俺」

言って、晴也は次の犯罪現場になるであろう堂森港まで歩を進めた。

空が新たに組み上げたアルゴリズムにより作成したエクシード行動予測システム。それに炎のエクシードの情報を入力することで弾き出した結果が堂森港。つまり、晴也が現在向かっている場所だ。

晴也はトンボ型ビデオカメラ――ドライビデオをアクションモードに変形させて空に放つ。次いでスタッグフォンを開き空と連絡を取る。
「おい、空。ホントに出るんだよな」
『信じて下さいよ。行動予測システムは今日作ったばかりですけど、多分、大丈夫だと思いますよ』
「多分って……お前な……」
『エグゼイダーを置いて行ったのは誰ですか？』
「それは、お前が整備中って言うから！」
『はて、そんなこと言いましたっけ？　あ、ちなみに片桐先輩は大学に用事があるとかでいませんよ。だ、か、ら、今は私だけですよ！』
「うるせぇ！」
晴也は怒号と一緒に電話を切った。
「まったく……今すぐエグゼイダーを呼んで帰りてェところだが、予測システムのこともあるしベンチにでも座っとくか」
大きく溜息を付いて晴也はベンチに腰を下ろした。

同日午後四時。堂森港

晴也が堂森港に訪れて一時間が経った。
予測システムのためとは言え、流石の晴也も暇を持て余してしまう始末だ。そして、いつの間にか隣には白いワンピースを着た金髪の少女が座っていた。だが、それに対して全く気にしていない晴也は、ベンチから海を眺めてほうけていた。
やがてうとうとし始めた頃に隣に座る金髪の少女から声を掛けられる。
「ここには観光で？」
「あ、いや。違うけど。君は？　子どもが一人で来るような所じゃないと思うけど。ひょっとして迷子か？」
「違いますよ」
「あーそー。じゃあ、どこでママとはぐれたんだ？」
「どちらかと言うとママは私なんですけどね」
「ん？　あー、おママごとか。じゃあ、子どもはどこに？」
晴也が問うと、少女は呆れたように溜め息をつく。
「もう知らない！　バーカッ！」
膨れた面が可愛らしい少女を前にして、晴也もまた大きな溜め息をついた。
スタッグフォンを開いてもドライビデオからエクシードの反応を察知したという報告も様子もない。ついでに隣の金髪迷子少女から話し掛けられる始末で、いい加減帰ろ

うかと思った矢先に奴らが現れた。
　燃え盛る炎のような赤い皮膚に地獄の業火を纏ったエクシード、ではなく。凍てつく雹風のような青白い皮膚に永久凍土に広がる氷のような装甲を身に纏ったエクシードが現れたのだ。体表から溢れ出す煙が近くの木に触れた途端にその木は瞬く間に凍りついていく。
「炎のエクシードじゃないのか？」
「うわー。嫌な奴が出て来ちゃったなあ」
　少女がげんなりした様子で言うが、晴也はすでに駆け出していて耳には届いてなかった。
「さてと、エグゼが勝つかブリューナクが勝つか見ものだね」
　少女は不敵な笑みを浮かべてベンチに深々と腰を落ち着かせた。

第16話　氷装・敗北

六月十日午後四時三十分。堂森港。
氷のエクシードは人を襲うのでもなく、真っ直ぐ五条晴也の方へ歩いていた。一方で晴也は駆けながらベルトを装着し、古代の戦士――エグゼに変身する。
「……エグゼ。本当にいたのか」
冷気を口から吐きながら氷のエクシードが呟く。
構わずエグゼは殴り掛かる。しかし、それを氷のエクシードは軽くあしらい、裏拳をエグゼのマスクに叩き込む。後退るエグゼへ続けざまに蹴りを胸部の装甲に食わせ吹っ飛ばす。背中から強打する形になるエグゼを無視して氷のエクシードは再び歩き出す。その先には先程まで晴也と喋っていた少女がいる。
だが、それに気付いたエグゼは跳躍し、氷のエクシードの前に立ちはだかる様に着地して、もう一度殴り掛かる。今度はフェイントを混ぜた蹴りをお見舞いしようとするが、拳も蹴りも全て防がれ、拳句の果てには、右拳を掴まれてしまう始末だ。
「クソッ！　この野郎！」
瞬間、エグゼは自分の拳が冷たくなっていくのを強化皮膚越しに感じた。最初は少し

冷たい程度だったが、氷のエクシードの体表から溢れ出る冷気の勢いが増していくに連れてどんどん冷たくなっていく。

そして、パキパキっと何かが割れるような乾いた音と共にエグゼの右拳が瞬く間に凍ってしまった。

「嘘だろ、キンキンに成っちまった！」

慌ててエグゼは氷のエクシードから離れる。

『先輩、フレイムです！』

エグゼのマスクに搭載された通信機から空の声が発せられる。

エグゼも同じことを考えていたのか、すぐさま左腰のカードデッキから『ＦＬＡＭＥ』のソウルカードを取り出し、ソウルガジェットに挿入しようとする。だが、右手が凍っているせいで右腰にあるソウルガジェットにぎりぎり届かない。再度身体を思いっ切り捻るが、それでもあともう少しの所で届かない。そこへアクションモードに変形したスタッグフォンが顎でカードを挟み、器用にソウルガジェットに挿入する。

「俺、お前大好き」

スタッグフォンに告白したところでソウルガジェットのボタンを押す。

エグゼの全身が瞬く間に燃え上がり銀色の装甲とオレンジ色の複眼を赤く染まる。凍った右手もその熱を浴びて瞬時に解凍される。何度か右手を握り、開き、を繰り返し

て調子を確かめる。そして氷のエクシードに向けて、右手から生み出した野球ボールくらいの火球を大きく振りかぶって全力で投擲する。

背後からの熱気に気付いた氷のエクシードが振り返るよりも早く、背中に火球が命中し、爆炎を起こした。

だが、それは圧倒的な冷気によって一瞬の内に鎮火してしまい、氷のエクシードも特に気にしている様子もなく、再びエグゼに背を向けて少女へと歩を進め始める。

「無視すンなよ！」

エグゼは駆け出し、氷のエクシードの正面に回り込むと炎を纏った両拳と両脚で格闘戦に持ち込む。流石にここまでエグゼを圧倒している氷のエクシードでも、猛威を振るうエグゼの攻撃を無視できず、応戦する。その動きはとても洗練されており、徒手空拳の延長線上で戦っているエグゼの攻撃を一つ一つを受け止め、躱し、隙を見て鋭い一撃をマスクや胴体に食らわせていく。攻撃が続けば続くほどエグゼの方が苦しむ奇妙な構図になってしまう。

氷のエクシードの拳がエグゼの鳩尾に入る。それを受けてついにエグゼの手が止まる。そこへ強烈な回し蹴りがエグゼの頭部に炸裂する。一旦はよろめき足に踏ん張りを利かせたが、敵わずその場に倒れ伏してしまう。立ち上がろうともがくエグゼを見下ろす氷のエクシードは立たせまいと、いや、もう立つなと言わんばかりに背中を思い切

り踏み付ける。
重量感のある踏み付けにエグゼは最早動くのを止めてしまった。
無駄だと分かったのかと思い氷のエクシードは足をどける。
「姉さん。いつまでそこにいる気だ」
「いいの？　足どけちゃって」
姉さんと言われた金髪の少女は氷のエクシードの背後を指差す。
氷のエクシードが振り返るとそこにはふらつきながらもファイティングポーズを取るエグゼの姿があった。
「まだ戦う気か。しつこいのは嫌われるよ」
「お前、等……に、好かれ、たく……ねェよッ！」
エグゼはソウルガジェットのボタンを素早く二度押ししてソウルドライブ状態になる。全身が烈火の如く燃え上がると、バックルの赤いボタンを押す。
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
バックルからの電子音声に呼応して纏われた炎と霊石――アークルが生み出す強大なエネルギーが右拳に収束される。
爆炎を纏った右拳を振りかぶって氷のエクシードに向かって駆け出す。
氷のエクシードも対抗するように右拳に氷と冷気を纏い同じく駆け出す。

「「うおおおおおおおおおおおッ！」」
二人の拳がぶつかり派手に爆発する。
吹っ飛ばされたのはエグゼの方だった。空中で回転しながら激しく水しぶきを上げて海に沈んでいった。
「あーあ。これじゃあ生きてるか分からないじゃん」
金髪の少女は手摺りから身を乗り出して海を見下ろす。
そこへ白いキャップ帽子を深々と被る整った顔立ちの青年が歩み寄り、同じように海を見下ろす。
「知らないよ。それよりクロウエクシードを無駄に放ち過ぎ。正直、人間を殺すのは気が引けるよ」
「えー。だってあの兵隊たち減らさないと他のエクシードもやる気出さないじゃん」
「俺は姉さんのそういうところ嫌いだ」
「私も。ブリューナクのそういうところ凄く嫌い。焼き殺したいくらいに」
「イフリート。本気で言ってんの？」
「さあ？　どうだろうねえ」
軽口を叩くように言って金髪の少女――イフリートはその場を後にした。
その時、タイミングよくエグゼの変身が自動的に解除された晴也が海から浮かび上

がってきた。
ブリューナクは溜め息をついてから周辺の海を凍らせて、その上を歩き、晴也を引き上げる。息をしていることを確認してから先程までイフリートが座っていたベンチに寝かせる。
少し心配そうに晴也を見つめてからブリューナクもその場を後にした。

同日午後六時。堂森港。
日がほとんど沈み、辺りには騒ぎを嗅ぎつけた野次馬とそれを押さえる警察官で溢れている。スーツを着た警察官達は装甲を身に纏って戦ったとされる兵士と氷の怪人が争った現場を見るなり溜め息しかついていない。
人知を超えた者達の戦いだと仕方のないことだ。
丸坊主の警官――上條順平は鑑識の結果を聞いても意味が無いことは分かっていた。現場の状況からして誰も殺害されていないことや、兵士と怪人、どちらも殺害されていないことが分かる。辺りを見回しても野次馬が壁になってそれより先が見えない。もちろん、野次馬の中に怪しい人物がいないかどうか観察したが特に気になる人物はいなかった。詰まる所、本当に捜査が進展するような手掛かりは何も浮上していないのだ。
落胆する順平の下へ鑑識が一人歩み寄って来る。

「上條さん。今朝上がった遺体と現場の様子から見て別の何かが出たと見て間違いありませんね」
「怪人か……」
「やっぱりあの噂は本当なんでしょうか」
「目撃者もいるみたいですからね」
周辺の聞き込みをしていた警官からの報告はすでに受けていた。
「漫画みたいな怪人か……。いったいいつからこの世界は漫画の世界になってしまったんでしょうかね」
困り切った顔をする順平は鑑識に言う。
鑑識も肩を竦めるだけで何も言えなかった。

ベンチで眠っていた晴也を起こしたのは現場に駆け付けた空だった。
今は野次馬達を背後から見ながら二人ともベンチに腰掛けている。
「いっぱい人いますね」
「闘ってる時はそんなにいなかったのにな」
「手、大丈夫ですか？」
空は戦闘中に凍ってしまっていた右手に視線を落とす。

「ああ。フレイムになったお陰で解凍されたよ。あの野郎、炎じゃなくて氷のエクシードだったな。一気に二体出てきたとなると勝ち目なさそうだ。事実、あの野郎に手も足もでなかったし」
「すいません。私のせいです」
「え？　なんでだよ」
　急な空の言葉に晴也は動揺を隠せなかった。
「私の作ったセンサーの機能がもっと優れていれば、もっとエグゼのパワーが高ければ先輩が負けることなんてなかったのに。それに……」
　続きを言い掛けたところで晴也がそっと空の唇に指を置く。
「バーカ。センサーはちゃんと機能してたよ。スタッグフォンもちゃんと反応してたし。エグゼのパワーだってちゃんと出てたよ。ただ、俺がアークルの力を引き出せていなかったから負けた。それだけだ」
「先輩……ズルいです……」
　空は俯いて言う。
　晴也は自分がしていること、言っていることが気恥ずかしくなってしまい、暗くなり始めた夕焼け空を仰ぎ見るのだった。

第17話　日常・誤解

六月十一日正午。堂森高校。

生徒達は昼休みを桜花に過ごすため、机が均等に並べられている教室の中でわいわいと弁当を友達と一緒に食べている。その中でクラスの女子グループや男子グループに属していないのか自分の席で一人、弁当を食べている女子生徒がいる。

黒髪短髪の童顔の少女――天道空だ。

空は重い溜め息をつきながら弁当のおかずを一口頬張り、また溜め息をついておかずを頬張る。それを何度か繰り返している内にいつの間にか前の席に男子生徒がわざわざ空の方を向きながら座っていた。

「誰？」

空は面倒臭そうにそう言うと男子生徒は驚いたように目を見開く。

「同じクラスの松下だよ。松下タケル。あ、でも、天道さんは一回留年してるから後輩かな」

「さらっと失礼なこと言うのね、松本くん」

「松下だよ。先輩。あ、俺ね、こんなお気楽キャラだけどぼっちだから友達になってよ」

タケルは満面の笑みを浮かべて空に言う。
だが、空はそっぽ向きながら弁当のおかずを全て食し、席を立った。
「残念だけど、私今日で学校辞めるから」
「嘘ッ！」
タケルの大声に周りの生徒達が反応し、二人に視線が集まってしまう。所々では空の学校辞める宣言に対して思うところがあるのか、男子生徒を中心に嘆く声が挙がる。空は学校自体にほとんど登校していなかったこともあって知る由も無かったが、同級生、今の三年生の間では、その小柄で幼い容姿が人気でアイドル的存在になっているのだ。それが二年生にも広がり、いつしか空のことを知らぬ生徒はいなくなっていた。
空は状況が呑み込めず静かに席に腰を下ろす。タケルはその様子を申し訳なさそうに見つめながら購買部で買って来たのであろう菓子パンを少量かじる。
「松永くん。やってくれたわね」
「松下だよ。先輩」
「ちなみに私の知ってるぼっちはそんな意気揚々とした態度は取らないと思うけど」
「日本には『例外』という言葉があるのは知ってますか？　先輩」
次のタケルの言葉は無視して空は引き出しに入れておいた退学届の書類に記入漏れがないか確認し始める。タケルも気になって資料に目を通そうとするが、それを空はま

るで子供のように腕で覆い隠し妨害する。その様子が可愛かったのかタケルがスマートフォンを片手に構える。空は途端に鬼の形相を浮かべて目にも止まらぬ速さでスマートフォンを取り上げる。その拍子でスマートフォンがホーム画面になる。

空はそのホーム画面を見て唖然となった。

エグゼがクロウエクシードの顔面に拳を叩き込んでいる瞬間が切り取られていたからだ。

「これ……」

「ニュースにはなってないけど、都市伝説になりつつあるヒーローだよ」

「へ、へえ……そうなんだ」

動揺する空を見てタケルは不思議そうに見つめる。その視線に気付いた空はスマートフォンを返し再び資料に視線を落とす。

「先輩が作ったんでしょ。このヒーローのベルト」

「え？」

あまりにも唐突な言葉に空は勢いよく顔を上げる。

「鞄に同じマークのストラップつけてるし」

タケルは顎で空の鞄を指す。

それは昨晩暇な時間を持て余して作った晴也とお揃いのエグゼのマーク入りのスト

ラップである。空はしまったとばかりに顔を手で隠す。その仕草が面白かったのか、タケルは微笑みながら菓子パンを頬張る。

　下校時刻となり空は最後の登校を終えて正門から出ると、そこにはバイクに腰掛けながらスタッグフォンを眺める五条晴也の姿があった。

「先輩、どうしてここに？」

「お前がちゃんと学校に行ってるか確かめにな」

「何ですか、それ。失礼しちゃいますよ」

「ところでお前の後ろにいるスケボーを持った彼は誰？」

　空はきょとんとした表情を浮かべて振り返る。そこにもまたきょとんとした表情を浮かべているタケルがいた。

「あ、どうも。天道先輩と同じクラスの松下タケルって言います。よく間違われますが、タケルはカタカナです。今後ともよろしくお願いします」

「ご丁寧にどうも」

「いえいえ。五条晴也先輩ですよね。都市伝説のヒーローの」

「ヒーローではないけど。って言うかアレはエグゼね」

　あっさり正体をばらしてしまう晴也。それに対する空の反応は驚くより呆れたような表情を浮かべるだけだ。

晴也は片桐沙耶に正体がばれてしまって以来、エクシードが現れたならば、人がいようとその場で変身してしまうようになった。それでも最低限に正体はばれないようにしているが、こう言った会話だと嘘をつくより真実を話した方が本人の意思的にも楽なのだ。

晴也と初対面のタケルにとっては、あまりにも容易に正体を知ることが出来てしまったことに、少し退屈な気分を味わってしまう。

「えっと。正体はばれても良いんですか?」

「良くはないかな。けど、正体を隠して誰かを守れなかったら……エグゼになった意味が無いから」

「かっこいいですね」

「そうでもないよ」

タケルの表情が一変し鋭い目つきで晴也を睨み付ける。それに呼応するように晴也は真顔で言う。

二人の異変に気付いた空は二人の間に割って入り、二人の顔を交互に見やる。その頃にはタケルは満面の笑みを浮かべ、晴也は微笑んでいた。

「それじゃあ僕はこれで。天道先輩、また会いましょう」

言ってタケルはスケートボードに乗り颯爽と去って行った。

「先輩、松本くんのこと苦手でしょ」
「松蔵くんだろ？　苦手じゃないけど……」
「けど？」
「多分、空と俺の関係を勘違いしてると思う」
晴也は苦笑しながらバイクのエンジンを吹かす。空に乗るよう促し、その場を後にした。

ちなみに、タケルの名字は松下である。松下タケル。
六月十一日午後六時三十分。堂森商店街裏路地。
大きな欠伸をしながらタケルは裏路地の開けた場所で軽い柔軟体操をする。この場所の地面はタケルの足元にあるスケートボードからまるで「早く僕を滑らせて」と聞こえんばかりの丁寧なアスファルト舗装がされている。少年はスケートボードに身を委ね、地面を蹴り、スケートボードを軽快に走らせる。
手始めにスケートボードに乗ったままジャンプするオーリーというトリックからだ。続いてスケートボードを回転させながらジャンプし着地するキックフリップ。ノーズのウィールだけを浮かせて滑走。その次にテールのウィールを浮かせて滑走する。それぞれのトリックを綺麗に決めてから、少年は休憩がてらスケートボードに乗ったまま暁の空を見上げる。

「五条先輩……天道先輩と付き合ってんのかな……ぅわ!?」

気が逸れてしまったせいでタケルはスケートボードから転げてしまい尻餅をついてしまう。

タケルは尻を押さえつつ、うずくまって目に涙を浮かべる。

「緊張して睨んじゃったし、叶わぬ初恋か……」

潤んだ瞳でもう一度暁の空を見上げた。その時、先程には無かった影が空にあった。それは鳥にしては手足が長く。かと言って人間と言われると翼が生えているのでありえない。

――ああ、あれが先輩達の闘っている相手か。

タケルはスマホを取り出して空を舞う鳥の怪人の写真を撮った。

第１８話　恐大・厳火

六月十一日午後七時五分。堂森町内。

エグゼは『ＬＡＮＣＥ　ＦＩＧＨＴＥＲ』へとボディーチェンジして、身軽になった身体とエグゼ随一の跳躍力を利用して、ビルの屋上から屋上へ飛び移り、椅子の人――空から伝えられた絶好の狙撃ポイントまで移動する。

堂森町では高い方に当たるオフィスビルの屋上に到着したエグゼは『ＡＲＲＯＷ　ＦＩＧＨＴＥＲ』にボディーチェンジする。左肩、胴、手甲に防弾チョッキのような装甲が装着され、右肩には必要最低限の装甲に換装される。尋常ならざる超感覚によって全ての感覚が研ぎ澄まされたこの形態は、その特性上通常とは比較にならない程の情報量が頭に流れ込んでくる。その中で聴力だけをエグゼは最大限に研ぎ澄ます。

電車の走る音。

車の走る音。

人間の声。

堂森商店街の賑わい。

そして、一際大きく聴こえる翼の羽ばたく音。

「そこかッ！」
　エグゼは聴力を研ぎ澄ませたまま視力のピントを合わせてエグゼアローを構え、バックル左上の赤いボタンを押す。
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
　エグゼアローの持ち手の上下に一門ずつ装備された銃口の内、上部の銃口へ霊石アークルから生み出されたエネルギーが充填される。エグゼが弓を引く動作を行うと、それに合わせてエネルギーの矢が出現する。
　空かさずエネルギーの矢を放ち、クロウエクシードを穿つ。
　数秒遅れて夜空に爆炎が広がり、爆発音が響き渡った。
「あ、もう限界……」
『先輩、早く別のボディーカードを！』
「う、煩いからもっと静かな声で」
　急にふらつき始めたエグゼは空に促されるように『ＡＲＲＯＷ　ＦＩＧＨＴＥＲ』からカードデッキから偶々掴んだ『ＬＡＮＣＥ　ＦＩＧＨＴＥＲ』へとボディーチェンジする。
「あぶねー。やっぱアローは疲れるわ」
　エグゼはくたびれた様子でその場に倒れ込む。

エグゼの『ＡＲＲＯＷ　ＦＩＧＨＴＥＲ』はその特性上、変身者である五条晴也にかなりの負担を掛けてしまう。本人曰く「十キロマラソンをしながら、永遠と針に糸を通し続けるイメージ」と言っている。このことからかなり消耗が激しい、上に燃費の悪い形態だと言うことが分かった。

『疲れが取れてからで良いんで絶対に戻って来て下さいよ』

「分かってるよ」

それから小一時間エグゼはその場で寝そべりながら自身の回復に努めた。

六月十二日午前八時。天道家。

氷のエクシードとの敗北から二日が経った。

五条晴也は天道家に泊まりながら氷のエクシードとの戦いを思い出していた。あの時、蹴りではなくパンチだったら、最初から氷のエクシードだと気付いていたから、いきなり『ＦＬＡＭＥ　ＳＯＵＬ』で戦っていればなど頭の中で何度もシミュレーションをしているが、結果はどれも惨敗だ。その都度、くはーっと気の抜けた声を上げてソファーに寝そべっていた。

そこへ今日から社会的にはニートになった天道空が自分を毛布にして下さいと言わんばかり晴也に覆いかぶさる。そして、社会的にニートである晴也はなぜか逃げようとせず、空の好意を何の抵抗も無しに受け入れた。

「あれ？　避けないんですか？」
晴也の胸に顔を押し付けながら空が言う。
「何か、お前から凄い包容力を感じたから避けたくなくなった」
思いも寄らない晴也の言葉に空は驚愕するほか無かった。
「まさか遂に私の想いが先輩に……」
「それならとっくに届いてるよ。お前が俺を思ってくれたからバックルとかガジェットを作ってくれたんだろ？　ホント空は優しくて良い奴だな」
「え、そういう意味じゃないんですけど」
「え？」
「え？」
少し間が出来た。
「もう良いです」
空は言って地下室に降りて行った。
「なんで怒ってんだよ、アイツ」
晴也は天井を仰ぎ見た。
六月十二日午前十時。堂森町内。
白いワンピースを着た金髪の幼女とその隣を歩く顔の整った青年が向かい合って

立っている。他から見れば兄妹が喧嘩でもしてしまったかのように見えなくも無いが実際は姉と弟であり、弟が姉に物申している。

だが、姉――イフリートの方は聞く耳持たずで明後日の方向を見ている。それが気に食わない弟――ブリューナクはイフリートを持ち上げる。ちなみにこの構図は他から見れば兄が妹を高い高いしているように見えている。

「ちょっと下ろしてよ、ブリューナク」

「嫌だ。イフリートが話を聞こうとするまで下ろさない」

「分かった。分かったから恥ずかしいから下ろして」

ブリューナクは了承してイフリートを下ろした瞬間に、

「うっそー！」

と、まるで悪戯っ子のように舌を出してどこかへ駆け出してしまった。それも恐ろしい速さで。

何キロ走ったのだろうか、何件の家の屋根から屋根へ飛び移ったのだろうか。

――人間の姿でここまで動いたのは封印されて以来、久しぶりだ。

ブリューナクはイフリートの進路が徐々に河川敷に傾いていることに気付いた。

そして、ブリューナクの予想通りイフリートは河川敷に降り立った。

「姉弟喧嘩とか懐かしいね」

「イフリート。本気なのか？」
「前にも言ったけど。私の邪魔をするなら弟でも殺すよ」
イフリートの目は本気だった。
だからかブリューナクは一歩仰け反ってしまう。
「それじゃあ始めようか」
満面の笑みを浮かべてイフリートはカプセル型のアークルを取り出す。人間の世界で言うところのボールペンの太さを二回り大きくしたものだ。赤い半透明のそれをボールペンの芯を出すようにボタンを押す。
『ＩＦＲＩＴ』
電子音声のようなものが出力され起動する。
「変身」
静かにイフリートは言って左掌に挿し込む。カプセル型のアークルは吸い込まれるようにしてイフリートの体内に吸収され、イフリートの身体が怪人態に変身する。
燃え盛る炎のような赤い皮膚に両肩の体毛。頭部には人間のような目が紅色に輝き、人間態の金髪がそのまま短くなって後ろで括られている。胴、前腕、脛には黒い装甲が身につけられている。禍々しくも洗練された肉体美。身体から溢れ出す熱気が空間を歪める。

ここまでの変身を瞬く間に行い、その身長は成人男性と変わらない。
ブリューナクも呼応して自身のカプセル型のアークルを起動する。
『ＢＲＩＯＮＡＣ』
「変身」
カプセル型のアークルを右掌に挿し込み吸収する。
凍てつく雹風のような青白い皮膚に永久凍土に広がる氷のような装甲を身に纏ったエクシード。身体中から溢れ出す冷気が地面を瞬時に凍らせる。
熱気と冷気のぶつかり合いに間の地面が破壊されていく。急速に熱せられ、それから急速に冷やされたことで崩壊しているのだ。
「ブリューナクとの喧嘩、楽しみだなあ」
イフリートは言って身の丈ほどの大剣を炎から生み出す。
ブリューナクも氷を鎗状に生成し、それを砕いて尖端が五つに別れた本物の鎗を生み出す。
「僕は嫌だけどね」
爆炎。
爆雹。
相反する二つの勢力がぶつかる。彼等を中心に河川敷がどんどん形を変えていく。

押しているのはイフリートの方だ。

ブリューナクも必死に対抗しているが遊び感覚でまだまだ余力を残しているイフリートに弄ばれ最後には鎗を切り上げられ、丸腰になる。

「いい？　お姉ちゃんには逆らわないこと」

イフリートは大剣の切っ先をブリューナクの喉元に突きつけながら言う。ブリューナクは何も言えず。無言の敗北宣言を出した。それを受けたイフリートは人間態に戻り、またどこへなりと去って行った。ブリューナクも人間態に戻り、敗北の味を噛み締めた。

第四章　もっと強く

第１９話　食前・挨拶

六月二十日午前六時。天道家。

五条晴也の朝は早い。午前六時に起床し、簡単なストレッチのあと身体が鈍らないように軽いジョギングをする。それを追えた後は天道家に入り、二人分の朝食を作り、午前八時に二階の空の部屋へ空を起こしに行く。

天道空の朝はもっと早い。午前四時に起床し、寝癖を確認し、洗顔、歯磨き、その他諸々行い、午前七時に二度寝する。これでいつでも万全の寝顔を晴也に見せることが出来る。

「お前馬鹿なのか」

「ありゃ」

二人とも一人で暮らすことになってから一年。晴也はようやく空の愚行ならぬ乙女チックな行動に気付いてしまった。

「これからは自分で起きろよ。朝食は気が向いた時だけ作ってやる」

「え、それは駄目です！　極めて駄目です!!」

「なんでだよ。お前、起きてんだろ」
「だって、先輩に起こされるからいつも気持ちよく起きれるんじゃないですか」
二度寝だけどな、と晴也にツッコミを入れられて空はあからさまに落胆する。
見かねた晴也は呆れた口調で「分かったよ」と言う。
「起こしてやるし、朝食も作る。だからそんな顔するな。俺が泣かしてるみたいで嫌だ」
「先輩ならそう言ってくれると思いました」
「あんまり調子に乗るなよ」
晴也は空の頭に手を置き、髪をぐしゃぐしゃにしてから空の部屋を後にした。
空は折角寝癖を整えたのにと思いながらぼさぼさになった髪を整えようと手を髪に置く。しかし、そこで手が止まった。髪が全く乱れていなかったからだ。先程の勢いだと髪が乱れてもおかしくない。いや、乱れていなければならない。それなのに髪は全く乱れていない。不思議に思った空は床に転がっているビートルフォンを手に取り確認する。
エグゼの変身履歴を。
地下室のメインコンピューターにはエグゼのバックルが起動した際に日時、場所が残るように設定している。そのデータをビートルフォンを通して見ようと言うのだ。
「変身してる。河川敷？　変身時間は二十分弱……どうしたんだろ。この時間にエク

シードが出た反応は無いし。まさか修行？　いや、先輩はそんなことする人じゃないし……いや、でも……」

空が思考を巡らせようとしたところで再び晴也が空の部屋に入ってくる。

「早く降りて来いよ。いただきます出来ねェだろ」

「先輩って偶に可愛いですね」

「あ？」

「何もありません。今行きますね」

空はそう言ってベッドから起き上がり晴也と共にリビングで朝食を取った。もちろん一緒に「いただきます」をしてからだ。

同日午前十一時四十分。堂森町内。

白いワンピースを着た金髪の幼女――イフリートは何も考えずにただ歩いていた。この先に何か面白い物があるかもしれない。退屈しのぎになるかもしれない。またエグゼに会えるかもしれない。そんなことは考えず、本当に何も考えずに歩いていた。

目を開けて寝ながら歩いているからだ。すでに信号無視を十回以上行っており、車を逆に弾き飛ばし、自転車は彼女に接触した時点でひしゃげてしまう始末だ。そこまでの衝撃を受けても全く持って目を覚まそうとしない。イフリートを起こすにはそれこそエグゼか同じエクシードが攻撃するかどうかだろうが、意外にも呆気なく彼女は目を覚

ました。
「小石蹴っちゃった」
それだけで目を覚ましたのだ。
今まで弾き飛ばした車や壊した自転車の持ち主に謝って欲しいと誰もが思うだろうがイフリートには関係ない。
ただ寝ている時に起きた事柄というだけだ。
「あれ？　暴牛くんじゃん」
イフリートは鬼の形相を浮かべている暴牛くんことオックスエクシードに歩み寄る。オックスエクシードはイフリートの存在に気付きながらも、そちらには視線を向けず、ジッと何かを見つめている。その視線を辿ると電柱の横に犬のフンが落ちていた。
まさかと思いイフリートは問い掛ける。
「どうしたの？　暴牛くん」
「む。イフリート殿。見て下さい、これ」
「犬のフンだね」
「なぜ人間は家畜のフンすらまともに始末しないのでしょうか」
「さあ。馬鹿だからじゃないの」
「許せない。牛肉はあんなに美味しく調理しているのに」

オックスエクシードの右手にはビニール袋が握られていた。その中身は問うまでもない。会話からして入っているのは牛肉なのだろう。

共食いじゃん、とは言えず苦笑いしながらイフリートは犬のフンに視線を落とす。

「燃やそうか？」

「いえ、飼い主はすでに始末してしまった故、私が後始末をします」

「相変わらず、仕事が早いね」

「お褒めに預かり光栄です」

オックスエクシードはレジ袋の中から小さなレジ袋を取り出し、犬のフンをアスファルトの地面ごとレジ袋に入れて縛る。

「いやー凄まじい膂力だね。私ほどじゃないけど。アークル二つ持ちになればよかったのに」

「戦いに興味は無いもので」

「へえ。けど、暴牛くんて結構沸点低かったって記憶あるけど。ほら、人間が前を歩いていたからブチギレて殺したとか」

「はい。それは今も変わりませんよ。毎日握り潰して、爽快感を味わっていますよ。最近はまた突進して殺すことにはまっていまして。一様は暴牛のエクシードなので」

微笑みながら言うその姿にイフリートは爽やかさを感じてしまう。

「それじゃあね」

イフリートは人間態のまま家屋の屋根まで跳躍し、屋根から屋根へと一瞬の内に何処かへ行ってしまった。それを見送った後、オックスエクシードは犬のフンが入ったレジ袋をまるで野球の投手がボールを構えるような態勢になる。そして、なんの躊躇いも無く怪人態に変身し、その尋常ならざる膂力を満遍なく使い、犬のフンが入ったレジ袋を前から歩いてくる人間に目掛けて投擲した。直撃を食らった人間は気付いた頃には腹部を中心に血肉を散々とさせて数メートルほど吹っ飛ばされていた。

オックスエクシードは人間態に戻り住処へ歩を進めた。

言う間でも無いが一様説明して置くと。オックスエクシードが犬のフンが入ったレジ袋を前から来る人間に投擲したのは単に鬱陶しかったからだ。それ以下でもそれ以上でもない。

第２０話　強靭・暴牛

六月十二日午後二時。堂森町内の廃工場。

晴也はエクシードの出現を受けて擬装用ホログラムを展開したエグゼイダーを走らせて現場に到着する。

すでに何台ものパトカーが隊列を作り、エクシードに向けて何発もの銃弾を撃ち込んでいる。止まることを知らない発砲音が吉となったのか、離れた所でエグゼイダーを停車させた晴也に誰も気付いていない。ただ一人を除いて。

「君、ここは危険だ！　早く離れなさい‼」

丸坊主の警官。上條順平である。

順平は晴也の肩を掴み無理矢理バイクから引きずり降ろすや、しゃがませて廃工場の入り口の壁に隠れさせる。

「どこで嗅ぎつけたか分からんがここは危険だ。去りたまえ！」

「去りたまえって……」

晴也は廃工場の入り口の壁からひょっこりと顔を出して戦況を見やる。

「どう見ても鉄砲効いてないですよね」

「そんなことはどうでもいい。良いから早く逃げるんだ！」

順平は晴也の背中を押して廃工場からどんどん離れさせていく。

その時だった。

轟音と共に地面が揺れ、一台のパトカーが廃工場の入り口から吹っ飛んできた。パトカーは地面を滑り込んでいき最後には爆散し、その余波で二人は地面に転がり込む。

順平は、もしまだ入り口付近にいたらと思うとゾッとする。そんな彼を他所に、晴也も少しは驚いたもののすぐに立ち上がり駆け出す。順平も遅れて後を追うが、いかんせん晴也の足が速い。

晴也は走りながらバックルを取り出し腹部に当てベルトを出現させて装着する。

『ＰＬＡＩＮ』

「変身！」

『ＰＬＡＩＮ　ＦＩＧＨＴＥＲ　ＧＯ　ＡＨＥＡＤ』

順平は目の前で少年が銀の鎧を纏った戦士に変身したことに自分の目を疑った。そして、いつの間にか動く足が止まっていた。

銀の鎧を纏った戦士は暴牛の怪人――オックスエクシードに飛び掛かるが岩の様な筋肉に衝突し逆に弾かれてしまう。それでもオックスエクシードの足元で駒のように回転し、オックスエクシードの足を払いその場に転げさせ、マウントを取る。そこから

振りかざした拳を何発も暴牛の顔に叩き込む。
だが、威力が足りないのかオックスエクシードは怒りの咆哮を上げ、マウントを取っているエグゼごと立ち上がる。それも脚の力だけで。
今度はエグゼが態勢を崩してその場に転がる。オックスエクシードは続けてエグゼを背後から両腕ごと身体に抱き付き締め上げる。
「ぐあああああ！」
エグゼが呻き声を上げる。
エグゼに変身していても感じる尋常ではない膂力に晴也は心底驚いていた。何とか振り解こうと暴れるが、まるで固定器具のようにがっちりと固定された両腕はぴくりとも動かない。それに反してオックスエクシードの両脚が動き始める。いや、身体全体が回転しようとしている。
「やば……ッ！」
瞬間、視界が高速で映り変わり空を見ていたかと思うと地面を見ていた。
エグゼの身体は高速回転のあとそのままの勢いで地面に叩きつけられたのだ。
全身を駆けまわる鈍痛を感じつつも必死に起き上がろうとするエグゼ。そこへオックスエクシードがエグゼの腹部に蹴りを入れる。エグゼの身体が一瞬浮き、バウンドしながら地面を転がっていく。

「この、馬鹿力……めッ！」
立ち上がったエグゼは怒号を吐く。
それに憤りを覚えたのか、はたまた最初から憤りだけで動いているのか獣のような雄叫びを上げて、頭部から生えている二本の角を向けて突っ込んでくる。まるで闘牛のような構図だな、と考えるエグゼだが、何分先程までの攻撃でまともに立っていられない。
「一か八か必殺技で……」
エグゼはバックルの左上の赤いボタンを押す。
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
霊石アークルから生み出された強大なエネルギーがエナジーラインを通って右足に充填される。
タイミングを合わせてオックスエクシードの頭部にエグゼの必殺の回し蹴りを炸裂させる。一瞬押し負けそうになるも、気合と根性でそれを撥ね退け、オックスエクシードを蹴り飛ばす。
軽く後方へ吹っ飛ばされるオックスエクシード。
若干右足から痛みを感じるエグゼ。
「立つなよ。絶対」
エグゼの望みは虚しく、間を置いてからオックスエクシードがゆっくりと立ち上が

る。その後、首を激しく左右に振って痛みを振り払う。エグゼの回し蹴りの効果はあまり無かったようだ。
「嘘だろ」
もう一度オックスエクシードが突進を試みようと駆け出した瞬間、膝から崩れ落ちる。
効果は皆無では無かったようだ。
「へへ。やっぱり効いてらあ」
『油断しないで下さい。先輩の方もかなりのダメージでしょ？』
「ああ。まあな。正直、右足が悲鳴上げてるよ」
『ここはアローで遠距離攻撃を中心に攻めましょう』
「俺もそうしたいんだけどな……」
エグゼは痛む右足を見やる。
地下室のモニターでエグゼの視点をモニタリングしている空は、エグゼが言わんとしていることを察した。
『アローだと掠り傷も骨折並みの痛さになりますもんね。そもそも体調万全でも持続時間は最長一分ですもんね』
「なんとかソウルカードで対抗してみる」

エグゼが立ち上がるのと同時にオックスエクシードも立ち上がる。
お互い睨み合いながら身構え、すり足で二人の間を中心に時計回りに移動する。最初に動きが変化したのはエグゼだ。動く足を一度止め、再度構えてから駆け出し、左拳を振り上げるフェイントを入れて痛む右足でオックスエクシードの胸部に蹴りを入れる。オックスエクシードはそれを受けて仰け反り、続け様にエグゼの両拳が連撃となって顔面、胸部、腹部、そして、最後に突き出た顎へ右フックをお見舞いする。
オックスエクシードは顎を押さえながら地面を転がる。
追撃しようとエグゼはオックスエクシードの首根っこを掴もうとしたところへ、逆にオックスエクシードの後頭部による頭突きを顔面――マスクに受けて後退る。
「痛ッ！」
マスクを押さえるエグゼに向かってオックスエクシードは右腕を広げてさながら突進攻撃のように全力疾走し、ラリアットをエグゼの胸部にぶちかます。たまらずエグゼは後方に吹っ飛び激しくのたうち回る。
「がああッ！」
オックスエクシードはエグゼの頭を鷲掴みし無理矢理立たせてから右拳を腹部に叩き込む。
エグゼの両足が宙に浮く。

だが、それを利用してエグゼは頭を掴むオックスエクシードの腕を掴み、宙に浮く足を地面に力強く踏みしめ、膂力が物を言わした背負い投げを繰り出す。

背中を強打したオックスエクシードはまるで本物の暴牛のように鼻息を荒くして立ち上がる。しかし、今度こそ限界が来たのか反撃する手を止め、廃工場の奥へと逃走した。

「クソッ！　逃がすか‼」

『待って先輩！　後ろ！　怪我人が！』

「え？　あ、さっきの刑事さん！」

『他にも生存者がいるみたいです。救急車は私が呼んでおきましたので先輩も早くその場から去って下さい』

「分かった」

廃工場の入り口付近で変身を解除し、五条晴也に戻った晴也は擬装用ホログラムを展開したエグゼイダーを走らせて天道家に戻った。

第21話　特訓・過去

六月十二日午後四時五十五分。堂森町内。
ただ目の前の廃工場に入り込む人間が気に食わなかった。
それだけの理由で入り込んだ人間と後に通報を受けて駆け付けた警察官を何人か殺害したオックスエクシードは、人間態に戻り人気のない裏路地に、潜むように座り込んでいた。
左頬から鈍い痛みを感じる。
エグゼのアークルのエネルギーを充填された回し蹴りを受けた箇所だ。
「エグゼ……声はただのガキだったな。そんな奴にこの私が……俺が……逃げ帰っただと！　ふざけるな‼　この俺が、人間如きに‼」
その瞬間、たまたま通りかかったホームレスはオックスエクシードの怒号を聞き、腰を抜かして尻餅をつく。今のオックスエクシードにとってそれすらも腹立たしく感じ、ホームレスの一生はそこで終焉した。
肉片が辺り一面に散乱する中、オックスエクシードは怒りのままに叫んでいた。それに呼応して左頬の痣や全身の傷が瞬く間に影も形も無くなった。

同日五時。堂森町内の自然広場。

晴也は大木をジッと見詰めて深呼吸をしてから思いっ切り回し蹴りを繰り出す。もちろん人間の姿で、だ。当然の如く右足に激痛が走り、それに反して大木は無傷でぴんぴんしている。

必殺の回し蹴りを受けても倒すことが出来なかった。

晴也は自身のキックを強化するため自然広場に丁度いい大木を見つけて特訓中なのだ。

「やっぱり人間のままだと痛すぎるな」

言いながら晴也は別のキックの方法を考える。

そもそも回し蹴りにこだわる必要があるのだろうか。ドロップキックのような助走を付けての飛び蹴りの方が威力は絶大なんじゃないのか、と晴也は考え、人間の姿のまま助走をつけて見事なドロップキックを大木に食らわせる。先程と蹴り方が違うだけでこれほど足への負担が変わるのか。ふと晴也は思う。足から全くと言って良いほど痛みを感じなかったのだ。それどころか回し蹴りより確かな手応えを感じた。

「特撮のヒーローと同じ必殺技になりそうだな」

空が見たら喜びそうだ、と思う。

「いや、無いか」
そして否定した。
晴也は知っているのだ。空が晴也にバックルを渡したことを心のどこかでまだ後悔していることを。エグゼとして戦っている最中は本気で無事を祈っていることも。だからこそ晴也は負けられない。いや、死ぬ訳にはいかないのだ。
負けるだけならいい。
もう何回か負けているから。
だが、死んでしまったら二度と空の顔に笑顔が浮かばなくなってしまう。それだけはどうしても避けたい。晴也にとって空は隣に住む後輩ではない。もはや妹のような存在なのだ。
「妹の笑顔は兄貴が守らなくちゃな」
自分に喝を入れるように両頬を叩いてから立ち上がり、大木に向かってもう一度助走をつける。
新しい必殺技。
完成形は見えた。

晴也が強化版必殺キックの完成を間近にしたところへ一人の少年がスケートボード

を背負って現れる。
「あ、やっぱり五条先輩だ」
「君は確か……松則くんだっけ？」
「松下タケルですよ。どうぞタケルと呼んで下さい」
　タケルは丁寧にお辞儀をすると晴也が何をしているのか大木と晴也を交互に見て尋ねる。
「必殺技の特訓かな。さっき牛のエクシードに効かなくてね」
「さっきまで戦ってたんですか!?」
「うん。とても見せられたものじゃなかったけどね。まだ背中が痛い気がする」
　軽口を叩くように言いながら晴也はその場に胡坐をかく。
　一緒に座っても良いですか？　と言いたげな表情を浮かべるタケルに晴也は無言の頷きで応えた。
「先輩はいつからあんな怪人達と戦ってたんですか？」
「卒業式の一週間くらい前かな。高校の」
「それじゃあ三ヶ月前くらいですか？」
「多分、そうなると思う。空も本当なら俺が卒業する頃に高二になるはずだったんだけどな。エグゼのバックルとかガジェットとか作るために高校生としての自分を捨てた

んだ。親も行方不明ってことで一年前は、今でこそあんなに笑顔なのに、アイツ全く笑わなくなったんだぜ。だから二人して馬鹿なことやって無理矢理笑わそうとした時もあった。だからさ……空のこと気に掛けてやってくんねェか？　学校は辞めたけど家に遊びにくるなりして、俺ん家ならいつでも来て良いからさ」

タケルはただ頷くだけで言葉を発しなかった。重い話をしてしまったと反省する晴也だがエグゼイダーのハンドルに掛けていたボディーバックから聞き慣れた音楽が流れる。

スタッグフォンに着信が入ったのだ。

「ごめん」

一言残して晴也はスタッグフォンを開けた。

相手はもちろん空からだ。

『先輩、オックスエクシードがまた出ました。場所は堂森町から少し離れた場所にある荒野です。』

「ああ。ドライビデオに座標を転送してくれ。案内してもらう」

『分かりました』

電話を切ると晴也はすかさずドライビデオをアクションモードに変形させる。

「頼むぞ、ドライビデオ」

基はビデオカメラの形をしていたトンボ型のガジェットは座標を取り込み先行する。
「行かなきゃだから。また会ったら話そう！」
晴也はタケルにそう言い残してエグゼイダーに跨り、ヘルメット被って走らせた。
残されたタケルはあっという間に去ってしまった晴也の方を寂しそうに見つめる。
「五条先輩、絶対勘違いしてる。僕が好きなのは先輩なのに……」
タケルは溜息をついてその場を後にした。

同日五時十八分。堂森町から少し離れた荒野。
晴也が荒野に到着する頃にはすでにオックスエクシード怪人態と警察の戦いにもならない戦いが始まっていた。発砲音は迫力だけでオックスエクシードには全く効果が無い。それどころか発砲音が勘に触るのか凶暴化する一方だ。
警察の抵抗手段は拳銃しかない。だが、それも全く効果を発揮していないとなると虐殺以外に何もない。
晴也はエグゼイダーの擬装用ホログラムを解除し、バックルを腹部に当てベルトを腰に巻く。
『ＰＬＡＩＮ』
「変身！」

『ＰＬＡＩＮ　ＦＩＧＨＴＥＲ　ＧＯ　ＡＨＥＡＤ』

黒い強化皮膚に銀色の装甲。全身を巡る黄色いエナジーラインが、霊石アークルが生み出す強大なエネルギーを駆け巡らせる。

「さて、行きますか」

エグゼはエグゼイダーを走らせスロットル全開で突っ込みオックスエクシードを弾き飛ばす。

「早く逃げて下さい」

言ってすぐにエグゼイダーを発進させ、起き上がるオックスエクシードをもう一度は弾き飛ばす。そして怯んだところへエグゼイダーの後輪を浮かせて遠心力を利用してオックスエクシードの側頭部に食らわせる。続けて前輪を浮かして躊躇いも無く振り下ろす。

だが、オックスエクシードはその恐ろしい膂力を持ってエグゼイダーの前輪を受け止めた。エグゼはエグゼイダーのエンジンを吹かして、押し潰そうとするが、敵わず、逆にオックスエクシードによってエグゼイダーごと投げ飛ばされてしまった。

「ああ、もう災厄……ってこれも計算の内だけど」

エグゼは強がりながら立ち上がり身構える。

オックスエクシードは血走った目でエグゼを、標的を睨み付け、今まさに突進攻撃を

するため右足を何度も蹄を研ぐように動かす。
本番はこれからだ。

第２２話　新技・披露

六月十二日二十三分。堂森町から少し離れた荒野。

エグゼイダーごと投げ飛ばされたエグゼはすぐに立ち上がり身構える。オックスエクシードは血走った目をしながら頭の角を向けて突っ込んでくる。エグゼはそれをぎりぎりまで引きつけた後、身を翻し、オックスエクシードの背中を転がるようにして突進攻撃を避ける。オックスエクシードはそのままの勢いで滑るようにして地面に転げる。

ざまあ見ろ、と内心思いつつエグゼは次の一手を考える。

力勝負では確実に負けてしまう。いや、言い訳にしかならないが、オックスエクシードとの戦いではまだ本気を出していない。前回の戦いでは本気を出す前にダメージを負い過ぎてしまった。

だが、今回はまだそこまでダメージを負っていない。それどころかぴんぴんしている。

「攻めてみるか」

『先輩。せめてソウルカードを使って下さい』

「無理だ。ここから先、どれだけ凶暴な敵が現れるか分からない。ソウルカードに頼る前にボディーカードだけで倒せるようにしたい」
『そんな。先輩ってそんなに意地を張る人でしたっけ？』
「誰かの命が、笑顔が掛かってるんだ。やるしかないんだ」
　エグゼは駆け出しオックスエクシードの顔面に拳を叩き付ける。それは思いのほか致命的なダメージとなり、オックスエクシードは顔面を両手で押さえながら悶える。
「貴様、さっきの戦いでは……手加減していたのかッ！」
「さあな。こっちも真剣なんだよ」
　オックスエクシードは猛り狂い、拳を縦横無尽に振るう。それらは鈍器となってエグゼを何度も何度も殴りつけ、怯んだところを無理矢理起こして鳩尾に蹴りを食らわす。だが、その足をエグゼは寸でのところで受け止め、振り払う。さらに追撃となるオックスエクシードの両腕の殴打を受け止め、それすらもやはり振り払い、大っぴらになったオックスエクシードの腹部、胸部へ連撃を繰り出す。エグゼは続けてオックスエクシードの顎へ渾身のアッパーを繰り出し吹っ飛ばす。
　オックスエクシードとの距離が求めていたあの距離になる。
「……やるか。やってみるか」
　エグゼは数歩下がってからバックル左上の赤いボタンを押す。

『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』

アークルが生み出す強大なエネルギーがエナジーラインを通って右足に充填される。

「行くぞ。俺！」

助走の距離は練習の時よりも少し長い。それでもエグゼの身体能力なら変わりはない。練習同様に勢いよく駆け出し、跳躍する。そして空中で前転し、右足を突き出して強化版必殺のキックを放つ。

オックスエクシードは突進攻撃で迎え撃つ。

「うおおりゃあああ!!」

鈍い音が荒野に響き渡った。

オックスエクシードの頭部がキックを食らった額の辺りからひしゃげ、脳組織と一緒に夥しいほどの血が噴き出した。そして頭部を伝って腹部にあるのだろうエクシードのアークルを強大なエネルギーが破壊し、強靭なオックスエクシードの肉体を爆散させた。

オックスエクシードだった物が四方八方に飛び散る。

エグゼは完全に絶命したことを確認して振り返る。そこには見知った警察官がいた。

上條順平だ。

「君はいったい何者なんだ」

「……俺は、エグゼです……」

エグゼは、晴也は絞り出すように言って倒れているエグゼイダーを起こして颯爽と去った。

順平はエグゼと名乗った銀色の装甲を纏った少年が去って行くのを黙って見ていた。

今日一日で起きたこと。牛の怪人との二度の戦闘ではっきりしたことは、ただの人間では全く歯が立たないこと。今まで絶対とまではいかないが、武器として最大の威力を誇っていたはずの拳銃がゴム鉄砲以下に感じたこと、だ。それほどまでに無力で同僚も直属ではないにしろ部下を無残に失ってしまった。

順平はやるせない気持ちを押さえながら夕暮れに沈む太陽を見ていた。

同日六時十分。堂森町から少し離れた荒野。

オックスエクシードとエグゼの戦いを陰から見ていた金髪の幼女――イフリートは不敵な笑みを浮かべて生き残った警察官が去るのを見つめていた。

「あーあ。暴牛くんまでやられちゃった。はてさて、どうしたものかな。他の幹部もそろそろ動き出すだろうし。うーん。本格的に始めちゃおっかな。殺戮。あ、でも、審判がいないから意味ないのか。まずは審判探しから始めないと。なんか思ったよりやること多いな。烏くん達、兵隊さんに探させた方が簡単なんだろうけど、いかんせん頭悪

いからなあ。前に蜜柑取って来てって頼んだのに人間の首を持って来たからなあ」

落胆するイフリートを他所に警察官は去るどころかどんどん増えてきている。見るとオックスエクシードだった物を回収し始めている。同じ殺戮民族として同胞の亡骸が人間に良い様に利用されるのは快く思わない。

イフリートは一瞬全員焼き殺してしまおうかと思ったが止めた。

理由は簡単だ。

得点にならない。

「さてと。烏くんに探させても意味無さそうだけど探す手は多い方が良いよね」

イフリートは軽口を叩くように言ってその場を後にした。

第五章　君に明日を

第２３話　雨流・希望

六月二十日午前十時。天道家。

オックスエクシードを撃退してから一週間という時間が経過した。その日以降は生憎の悪天候で毎日雨続きだった。朝のニュース番組ではどの局も梅雨入りしたと報じており、その通りなのだろう、とソファーに寝転ぶ青年は呑気にテレビのチャンネルを仕切りに変えていた。

右手にはテレビのリモコンを持ち、左手は普通の二つ折り携帯よりも一回り大きい特殊な通信機器を操作している。

五条晴也は、高校卒業後は大学への進学は止めてエグゼとして尋常ならざる化け物達と戦うことを選んだ。そのため、エクシードが現れなければただの暇人なのだ。そして、その暇な時間は一週間前、つまりはオックスエクシードを倒してからずっと続いている。エクシードを全て葬った訳では無いことは晴也も分かっている。それでもエクシードが出て来ないとなると流石にじっとしてはいられない。

雨の中、何度もエグゼイダーを走らせたが結局何も見つからなかった。ただ一つだけ

晴也が高校に通っていた際にクラスの委員長をしていた片桐沙耶が雨の中を泣きながら走っていたところを見かけた。

話を聞くと大学の男の先輩に遊び半分で襲われそうになったと言う。放っておくという選択肢を持たない晴也は、着ていたレインコートを沙耶に着せ、バイクを押して天道家に迎え入れた。

そしてこの出来事は昨日の夕方のことである。

だから晴也は天道家のソファーをベッドにして寝泊まりした。一方で沙耶と天道家の現主である天道空は空の部屋で一緒に寝ていた。

「それにしても遅すぎる。アイツ等いつまで寝てんだよ。雨も続くし、憂鬱過ぎて身体が錆びつきそうだ」

「人は錆びないと思うよ、五条くん」

晴也が顔を上げるとそこには起きたばかりなのか、寝癖が目立つ髪に、ぼんやりした顔で目を擦る沙耶がいた。しかも下着はつけているのだろうが半袖のシャツと裾が異常に短い短パンを穿いているせいで男として視線を逸らしづらい。いや、逸らそうとしているが自然と沙耶の乱れた服装へ戻ってしまう。

ちなみに空のような幼児体型と違って沙耶は童顔だが、出る所は出ていて締まる所は締まっている。まさに男が放っておかない体型をしている。晴也が高校生だった時も

何人かの男子生徒から告白されたことがあるが、そのどれもを断ってきた。その理由はもちろん「他に好きな人がいるから」だ。その好きな人が誰なのか一時期校内で話題になったほどだが、晴也はいかんせん他人に興味が無かった時期でもあったため、その噂を聞いた頃にはすでに噂は終焉を迎えていた。

「片桐。ちゃんと服を着てから降りてきてもらえると助かる」

「へ？」

「うん」

「え……ぅわッ！」

沙耶は林檎のように顔を赤くして二階の空の部屋に戻った。だが、戻ったところで沙耶のサイズに合う服があるのかどうかは不明だが。

「なんか……元気出たみたいで良かった」

晴也はそのまま瞼を閉じた。

「二度寝とは堕落してますね。先輩」

耳元で囁く声。

晴也が目を覚ますとそこには空がじっと晴也の顔を凝視していた。その隣には沙耶の姿もあった。二人とも晴也と目が合うとそっと微笑んだ。

瞬間、晴也は赤面してソファーから飛び起きる。

「人の寝顔見るとか悪趣味かよ！」
「そんなことないですよ。第一ここ私の家ですし。ね？」
空の問いに沙耶は頷く。
「なッ!?　片桐まで……」
全く、と呟きながら晴也はふとテレビを見やる。
『今朝未明、堂森町に流れる小さな川に身元不明の死体が六体発見されました。これで堂森町で発見された遺体の数は……』
そこでチャンネルが変えられた。
沙耶だ。
「見なくて良いよ。どうせこの後、警察は何をしているのか、謎の戦士の噂とか、そんな話題を面白おかしく話すだけだから」
沙耶の言葉に反応したのは晴也だ。
「どうして分かるんだ？」
「そんな気がしただけだよ。ごめん。チャンネル戻すから。けど、気にしちゃ駄目だよ。五条くんが気に病むことじゃないから。そう。だから、五条くんは他人の笑顔だけじゃなくて自分の笑顔も守ってね。じゃなきゃ、私の笑顔が消えちゃうからね」
「どういうことだ？」

「さあ。私もよく分かんない」
沙耶は微笑みながら台所に行ってしまった。
時間的にはもう昼食時だ。何か作ろうというのだろう。沙耶はエグゼの正体が晴也であるということを知ってから、また命を救われて以来、天道家に出入りするようになり、夕食も偶に一緒に食べている。もちろん料理をするのは空と沙耶だ。
「先輩ちょっといいですか？」
沙耶が料理を始めた頃合いを見計らって空は晴也を連れて地下室に入る。
「先輩、どう思いますか？」
「どうって何が？」
「昨晩も同じようなこと言ってたんですよ」
「同じような？　ニュースの時みたいなこと言ってたのか？」
晴也は不思議そうな、訝しむような表情を浮かべる。
「多分ですけど片桐先輩、予知能力とか……」
「馬鹿。そんなのあるかよ」
「けど、昨晩言ってことが全部当たってるんですよ」
「は？「偶然だろ？」」
突然、地下室の扉が開き、晴也と全く同じタイミングで全く同じ言葉を発した少女が

現れた。言う間でもなく沙耶だ。
「なんで俺の言うこと分かるんだよ」
「やっぱり私の思った通り」
「全部知ってるよ。もう何千、何万回も見たから。今日のこの光景」
沙耶の手には包丁が握られている。
その手は震えていた。血管が浮き出るほど力強く握り締められていた。
「私なら大丈夫って言ったけど流石に限界かも……。ごめんね。晴也くん。私、晴也くんみたいに強くないから。今日が終わるまであと十一時間と二十六分。次のエクシードが現れるまで一時間と三分。ソイツを倒した途端にアークルが暴走して……」
「ちょっと待て！　どうしたんだよ、片桐」
「そう返してくれたのは数少ない二千五百三十六回目かな」
泣き出しそうになる沙耶に駆け寄り晴也は抱きしめる。
多分、これももう何百、何万と続いた今日の出来事の一つに違いない。それでも晴也は抱きしめられずにはいられなかった。そうしてやるのが一番だと思ったからだ。
「よりによってこのタイミングで初めての経験が出来るとは思わなかった」
「え？」
「初めてだよ。晴也くんが私のことを抱きしめてくれたの。なんだか……大丈夫な気が

する。今回の今日が最後の今日になると思う」
　沙耶は晴也の胸に顔をうずめる。
「お願い。私に明日を見せて……」
　晴也は少しだけ強く抱きしめたあと空に沙耶の身体を預けた。精神的な疲れが今までの今日には無かった唯一の一回に希望を見て、全部出てきたのだろう。沙耶は眠るように気を失っていた。
「先輩。片桐先輩の話が本当ならあと一時間後には新しいエクシードが現れてソイツを倒した途端にアークルが暴走する。どうやって止めるんですか？」
「知るか。ただ、これ以上……片桐の泣き顔は見たくねェ。それだけだ」
　晴也は吐き捨てるように言って天道家を飛び出した。

第２４話　自己・嫌悪

六月二十日午後一時二十四分。堂森町・耶蘇川。

エグゼイダーを駆るや晴也は真っ先に阿蘇川の河川敷に向かった。確証は無い。それでもここに新たなエクシードが現れると思った。

昼食を作る前、沙耶が行ったこと。

ニュースのチャンネルを強引に変えた。それだけだ。そのニュースの内容は川から身元不明の死体が上がったということだけだ。しかしそれに対しての沙耶の反応は尋常では無かった。普段の、と言うより、晴也の知っている沙耶ならテレビのチャンネルを強引に変えるような人物ではない。加えて自分でも言っていることが分からないことを平然と……。

違う。

平然と言える訳が無い。

この場所でエグゼとエクシードが対決し、エグゼが勝ち、アークルが暴走する。この一連の流れを、呪いを引き起こす場所だからこそ沙耶はチャンネルを強引に変えたのだ。

「来いよ。エクシード。そして暴走してみろ。その暴走ごと吹っ飛ばしてやる」
瞬間、大きな翼の羽ばたき音が耳に入り、そちらへと殺気を込めて睨みつける。
クロウエクシードの怪人態が雨の空から舞い降りてきたのだ。しかし晴也はクロウエクシードの両足が地面に着く前に、雨でぬかるむ地面を駆け出し突っ込む。それもエグゼに変身して。
エグゼは『ＳＷＯＲＤ　ＦＩＧＨＴＥＲ』となり降り立とうとするクロウエクシードの両翼を切断し、顔面に拳を叩き込む。
「これで逃げらんねェだろ」
エグゼは獣のように咆哮し、鍔の部分がＵ字の角のようになっている刀――エグゼソードでクロウエクシードの身体を滅多切りにする。しかしクロウエクシードもやられるばかりではない。寸でのところで躱し、鋭利な爪でエグゼの装甲を引っ掻く。するとエグゼの強化された装甲から火花が散り、鉄と鉄が擦れ合う音が響く。だが、ダメージと言える物はなかった。それどころかエグゼの怒りを買い、エグゼの振り上げたエグゼソードがクロウエクシードの左腕を捉え、左腕の肘から先が宙を舞った。
苦痛に顔を歪ませるクロウエクシード。
それでもエグゼの攻撃は終わらない。
更にエグゼソードはクロウエクシードの右腕、左脚の膝から先を切断する。立ってい

られなくなったクロウエクシードは地面を這うようにしてエグゼから距離を取る。
「逃げられると思うなよ」
エグゼはエグゼソードをクロウエクシードの背中に突き刺した。それはクロウエクシードの肉体を貫通し、地面に深々と突き刺さった。
突然、空から通信が入った。
『待って下さい、先輩！』
血相をかいた声にエグゼは我に返る。
クロウエクシードにした残虐非道な行為。
全て自分がやったのだと言う恐怖と嫌悪感。
『今、ソイツを倒すとまた今日が繰り返されます。片桐先輩が起きるまで生かしましょう。いえ、生かして下さい！』
「それは出来ねェ！」
『そんな。どうしてですか！』
「次に片桐が目を覚ます時は明日なんだよ！　少なくとも俺はそう約束をしたつもりだ。だから、コイツをこのまま倒して、アークルの暴走を吹き飛ばす」
『そんなこと、どうやって……』
「分かんねェよ。けど、アークルが俺の意思に反応するなら出来るだろ」

『根拠は無いんですね……』
　空は言葉を詰まらせた。しかしすぐさま口を開ける。
『分かりました。頑張って下さい。私にはどうすることも出来ないので』
「ごめんな」
『約束して下さい。ソイツをどうやって殺したのか忘れないこと。先輩の気持ちが暴走すればどうなるかを』
「分かった」
　空の言葉が晴也の心に突き刺さった。空は晴也の心がすさんでしまうことを予感しての言葉だろうが、晴也にとってその言葉は空が思っている以上に効果が現れた。先程まで脳裏に浮かんでいた残酷な殺し方が嘘のように消え、明日を迎えた沙耶の笑顔が過ぎる。
「これで止めだ！」
　エグゼはバックル左上の赤いボタンを押す。
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
　エグゼソードにアークルが生み出す強大なエネルギーが充填され、そのままクロウエクシードに流れ込み爆散する。
　そしてその時が来た。

越えなければならない今日と明日の境界線。
空間に穴が空いた。
言葉で表すならこれしか思いつかなかった。
エグゼの目の前の空間にぽかんと真っ暗闇が現れた。その向こう側を覗き込もうとは思えなかった。覗き込めば吸い込まれそうなそんな気がしたからだ。そして次に起こったのはまさにそれだった。
突然、信じられないほどの引力が穴から働き、咄嗟の判断でエグゼソードを地面に突き刺し、なんとか踏ん張る。漫画のような現象に驚愕を露わにするが、それでもやらねばならないのだ。沙耶の笑顔を、一人の少女の笑顔を守り、明日を切り開くために。そのための『ＳＷＯＲＤ　ＦＩＧＨＴＥＲ』だ。
エグゼはバックル左上の赤いボタンを押す。
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
先程の必殺技と違い、エグゼソードを引き抜くやエネルギーが充填された刀を構え、思い切り振り下ろす。
刃から放たれた斬撃が暗黒の穴に吸い込まれる。
だが、それだけで何も起きなかった。
「クソッ！」

エグゼは赤いソウルカードをソウルガジェットに挿入する。
『ＦＬＡＭＥ』
エグゼの装甲が燃え盛る炎のように赤く染まる。
続けてソウルガジェットのボタンを二回押し、バックル左上の赤いボタンを素早く押す。
『ＳＯＵＬ　ＤＲＩＶＥ』
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
全身から溢れ出だした炎がエグゼソードの刃に纏われ、強大なエネルギーを充填するとともにその勢いを増し、刃が炎の大剣の如く姿を変える。
「これがエグゼ最強の技だ！」
エグゼは心のどこかで『烈火大斬剣』と名付けよう、と呟き、燃え盛る刃で暗黒の穴を切り裂いた。
途端に、視界が真っ白になり全身を、いや、世界を包み込んだ。

第２５話　白霧・明日

六月二十日？時？分。場所？
真っ白な空間が視界いっぱいに広がる。
晴也は困惑していた。失敗してしまったのか、そんな考えが頭を過ぎった。だから何も無いのだと、失敗したから世界を消し飛ばしてしまったのだと晴也は思った。だが、その考えを否定してくれる人物が声を掛けてくれた。
聞き覚えのある声が晴也の名を呼ぶ。
それはとてもか細く、同時に驚いているかのような優しい声。
声の主は紛れもなく片桐沙耶だ。
「……片桐。片桐なのか！」
「どっからどう見ても片桐沙耶だよ。晴也くん」
「結構落ち着いてるな。今日のここまで来たのはこれで何回目なんだ？」
「二十六回目かな」
「微妙だな」
晴也はその微妙な数に困った様な表情を浮かべる。

今自分が言った言葉が正しい返答なのかも分からないが思ったことをそのまま言ってしまった。
「それで俺はここで変身して時空を切り裂いて明日に帰ろうとしたってことか？」
「うん。正確にはそうしようと頑張った。……けど、無理だったけどね」
沙耶の表情が暗くなる。
「今回の俺は初の抱きしめをした俺だぜ？　希望はあるさ」
晴也は額から滲み出る汗を拭い変身する。
『ＳＰＡＲＫ』
『ＳＷＯＲＤ　ＦＩＧＨＴＥＲ　ＧＯ　ＡＨＥＡＤ』
「ちなみにこの組み合わせは前にもやったか？」
「してない！　してないよ！　その質問も初めてされた！」
沙耶は本当に嬉しそうにしていた。だからか晴也の手により一層の力が入る。
『ＳＯＵＬ　ＤＲＩＶＥ』
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
全身から迸る雷が刃に纏われ、強大なエネルギーが刃に充填されると同時に収束し、一条の光の刃へと変貌する。
「これで空間を切り裂く！」

晴也は全力でただ一点の空間を何度も何度も切り裂いた。かに思えたが手応えは全く無い。刃が虚しく空を切るだけだ。そして、収束された強大なエネルギーが行き場を失い、暴走し始める。咄嗟に斬撃として放つが、やはりそれも虚しく空を切るだけだった。

次の瞬間、突如として全身を駆け巡る疲労感に溜まらず膝をつく。

そして、変身も自動的に解除される。

「晴也くん！」

心配した沙耶が駆け寄る。

――どういうことだ。今まで変身して必殺の『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』を連発しても五発までは耐えられたはずだ。それには『ＳＯＵＬ　ＤＲＩＶＥ』も含まれている。なのにどうして膝をつくほどの疲労感を覚えているんだ。

晴也がそう思っていると沙耶の頬に涙が伝う。それに気付いた晴也は沙耶の顔を覗き込む。

「この世界だと私以外の人間は五分が限界らしいんだ。そしてそれから十時間くらいここで一人で過ごして、また、今日になる。ごめんね、無理させちゃって」

「そんな、無理なんて……」

言い掛けたところで沙耶が晴也の身体を強く抱きしめる。

「晴也くんは優しいね。その八方美人みたいな性格がどれくらいの女の子を惑わせてきたのかいっぱい考えさせられたよ」
「何言ってんだよ」
「ここまで言っても気付いてくれないのも晴也くんの駄目なところだよ」
「だから何言って……」
　晴也は無理矢理に沙耶を離し、沙耶の顔をじっと見つめる。その表情はほんのりと赤く涙目が沙耶の可愛さを引き立て、より一層色っぽさを醸し出している。それを見た晴也の胸の動悸が激しくなる。
（こんな状況で俺は何ときめいてんだよ）
　晴也は自分の顔が熱くなっているのに気付き、沙耶にばれないように俯く。
「気にしないで。私なら……」
「駄目だ。その続きの言葉は言うな。もう限界だって俺は知ってるから。つうか、俺もときめいてる場合かよ！　馬鹿か、俺！」
「え？　今何て？」
「そんなことより！」
「そんなことって」
　心底悲しそうな顔をする沙耶に晴也は詰め寄り問い掛ける。

「ここまで来た俺の一人くらい何か気付かなかったのか？」
「私の気持ちに？」
「違ェよ。ここから出る攻略法だよ。一人ぐらいいた、だ……ろ……」
言い切る直前に晴也は全身の力が抜けるのを感じ、その場に倒れ込む。
「晴也くん！」
「時間が無い。教え、てくれ……俺が、何を言って、た……のか……」
沙耶は少し考えてから思い当たることがあったのか口を開ける。
「正しい組み合わせなら出来るかもって。ここへ来たどの晴也くんも最後には言ってた」
「正しい組み合わせ……そうか！」
晴也は必死に立ち上がるやバックルを腹部に当て、ベルトを伸長させて装着する。
「正しい組み合せってこれか！」
ベルトの左腰に取り付けられたカードデッキから二枚のカードを取り出す。
「この組み合わせは使ってないよな？」
「うん。使ってなかったよ」
「これで最後だ！」
晴也は二枚のカードをそれぞれの挿入口に挿入する。

『ＳＰＡＲＫ』

『ＬＡＮＣＥ　ＦＩＧＨＴＥＲ　ＧＯ　ＡＨＥＡＤ』

通常の装甲よりも薄く身軽になり、跳躍力が強化され、俊敏性に優れたエグゼだ。そしてその装甲は雷の如く青色に染まっている。

エグゼは間髪入れずにエグゼランスを伸長させ長鎗にし、ソウルガジェットのボタンを二回押し、バックル左上の赤いボタンを押す。

『ＳＯＵＬ　ＤＲＩＶＥ』

『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』

状態をやや落とし、長鎗の尖端を一点の空間に止め、空いた左手で狙いを定める。迸る稲妻が長鎗全体に纏われ、アークルが生み出す強大なエネルギーが長鎗の刃に充填され、それと同時に稲妻が収束し、刃を包み込み、光の刃へと変貌する。

「行くぜ！」

渾身の力を振り絞り突っ込むエグゼ。

しかし、空を切るだけで何も起こらない。エグゼはエネルギーが暴発するまで何度も一点の同じ空間を突き続けた。もしこの空間に本物の地面があればその軌跡が焼焦げた跡となって、一点に集中した綺麗な跡になるだろう。それほど繊細な芸当をエグゼは超高速で狂いなく行っている。だが、何も起こらない。

「どうなってんだ。正しい組み合わせはこれじゃないのか！」
「晴也くん！」
「大丈夫。って俺が言ってしまった。けど、大丈夫だから。絶対に片桐を明日に連れて行くから！」
半分は意地だ。残り半分が分からない。
それでも、なんでもいい。
「明日を切り開く。いや、明日を突き開く！」
ソウルガジェットのボタンを素早く二回押す。しかもそれを五セット。
さらにバックル左上の赤いボタンも素早く五回押す。
今までにない強大なエネルギーがアークルから生成され一気に晴也の身体に流れ込んでいく。そしてそれは不思議なことにエナジーラインを伝って武器となるエグゼランスへは流れず、晴也の身体に残り続ける。まるで爆発寸前の爆弾のように身体が内側から破裂しそうな痛みが全身を襲うが、晴也は、エグゼはそれを振り払う。
そして変わった。
エグゼの『ＳＰＡＲＫ』『ＬＡＮＣＥ　ＦＩＧＨＴＥＲ』の装甲がいつもの青い装甲に光沢が混ざり、所々に轟く稲妻のラインが刻まれている。エナジーラインの色も黄色から水色に変色する。エグゼランスの色も銀色から青色に変わり、刃は返りが付いてより

鋭利になっている。
「これなら……」
意識が段々遠のいていく。
まだだ！　こんなところで寝てられっか！
『ＳＯＵＬ　ＤＲＩＶＥ』
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
今までにない量と勢いで雷が全身から迸り、アークルから生み出されるエネルギーも以前とは比べ物にならないほど強大でエナジーラインを伝ってエグゼランスの刃に充填される。それに呼応して雷の半分が刃を包み込み光刃となり、残りの半分は全身に纏われる。
「これがホントの最後だ！」
エグゼは咆哮し空間を突き抉った。
確かな手応えを感じた。
振り返るとそこには暗黒の穴があった。真っ白な空間だからか妙に目立つそれにエグゼは一瞬見入ってしまった。
気付けば変身は解除されていて晴也は膝をついていた。
「あれなら、明日に……行ける、はず、だ……」

沙耶は晴也に肩を貸し暗黒の穴にゆっくりと近づく。
穴は徐々に小さくなっている。晴也の心はそれに合わせて焦りを覚える。
「いざとなったら、俺のこと……置いて――」
「いかないよ。絶対に」
沙耶は得意げに笑みを浮かべてそのまま二人同時に暗黒の穴に入った。

それから先の記憶は無い。
目覚めたら六月二十一日になっていて片桐の笑顔が見られた。
本当に良かった。ただ心残りなのは、最後にエグゼの『ＬＡＮＣＥ　ＦＩＧＨＴＥＲ』がいつもとは違う物になったということ。
空曰く「先輩の『絶対に助けたい』という気持ちに霊石アークルが応えたのでしょうね」と確証がないから詳しくは言えないと言っていた。おそらく、空が想定していたエグゼには無い力を発揮していたのだろう。
もっとも今の俺にもよく分からないが。

第六章　走れ、エグゼイダー！

第２６話　殺戮・俊足

六月二十四日午後九時。堂森町内。

人気の無い廃ビル。その一室に数人の人影が集まり、各々が自由に座り、壁にもたれるなどしている。もちろんここは彼らの所有地ではない。列記とした廃ビルだ。部屋の隅には角材が積み立てられ、ドラム缶も隅に並べられている。誰も手をつけていないだけあって埃っぽい。そんな所を好んで集まる者は変わった趣味を持つ者以外にまずいないだろう。

そして彼等はただの人間ではない。

「審判見付かった？」

「ケイムショっていう所にいるんだと」

金髪の幼女――イフリートの問いに短髪の少女が応える。

「何でガゼルちゃん知ってるの？」

ガゼルちゃんと言われた短髪の少女は鋭い目つきで応える。

「走ってたら偶々連れてかれるのを見たから」

「え、黙って連れてかれたの？　審判が？」
「まあ、審判は人間に危害を加える訳にはいきませんからね。それに当時の私達の服装はこの時代だと目立ち過ぎますから、ケイサツに捕まっちゃうんでしょう」
「ケイサツって、あれよね、この時代の人間を守ったり、罪を償わせる人間の集まりよね」
　イフリートは顎に手を置いてこの時代について覚えたことを復唱するように言う。
　エクシードが生きていたのは古代の日本文明。それも教科書には記されない遥か昔の存在。それ故に現代との文明の差しかり、機械や政治と言った当時には無かった物ばかりで混乱する他ない。しかし、それでも彼等が生きていく目的は変わらない。
　殺戮民族。
　ある日見つけた霊石から力を得た殺戮を好む種族。それがエクシードなのだ。
「殺戮ゲームついでに私が助けに行きましょうか？　どうせ下級エクシードは私しか残っていませんし」
「そうだね。下級のリーダーやってた暴牛くんも死んじゃったし。いいよね？　皆」
　イフリートは他のエクシードに呼び掛ける。その人数は五人。しかしそれが封印が解かれて現代に蘇ったエクシードの総数ではない。他にも堂森町や隣町を徘徊し、現代を観光しているエクシードが何十人もいる。
「それじゃあいってらっしゃい。ガゼルちゃん」

言われてすぐにガゼルはその場から去った。目にも止まらぬ速さで。

六月二十四日午後九時二十分。堂森刑務所前の更地。

エクシードの出現を受けたエグゼこと五条晴也は、エグゼイダーを駆り現場に急行した。だが、到着する頃には刑務所から黒煙が上がり、囚人が暴徒と化し、この機を逃さんと脱獄するため壁や金網をよじ登っていた。流石にエグゼのまま囚人であろうと人間を打ちのめす訳にもいかないので一先ず変身を解こうした。まさにその時だった。

金網をよじ登っていた囚人達の首が宙を舞った。

頭は重力によって無残に落下し、首元からはまるで彼岸花を思わせるような血の噴水が咲き誇っていた。数秒遅れて身体は力を無くし地面に落下し叩きつけられる。あまりに一瞬の出来事だったためエグゼは見入ってしまっていた。

「私の殺戮はこれから始まる」

凛とした女の声にエグゼは我に返る。

「お前は下級だ。条件は無い。だたしエグゼと戦うことは絶対条件とする。それまでは人間を自由に殺すといい」

「分かっている。それより私のスピードに連いてこられるのか」

「当たり前だ。私は審判だぞ」

「審判は殺戮者よりも強い者でなければならない。お前の実力は上級並みと聞いている。ただ私は早く中級エクシードになりたいのだ」
「ならば行け。殺戮だ。中級に上るには五時間で三十人殺すのだ」
自分のことを審判と呼ぶエクシードと新たな女エクシードの話を盗み聞きしていたエグゼは全ての話を聞き終えると即座に『ＡＲＲＯＷ　ＦＩＧＨＴＥＲ』へとボディーチェンジする。そして手慣れた手付きでバックル左上の赤いボタンを押す。
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
アークルが生み出す強大なエネルギーがエナジーラインを伝ってエグゼアローへと充填される。空かさずエグゼは弓を引く動作を取る。するとエネルギーの塊が矢の形に収束され、エグゼアローの上基部の銃口にエネルギーの鏃が出現する。
「一撃で仕留める」
エグゼはエグゼアローの引き金を引き、エネルギーの矢を射る。それは真っ直ぐに女エクシードの頭部目掛けて空を切っていく。
だが、その矢は途中で進行を止めた。いや、止められた。
審判と名乗るエクシードが人間態の、それも素手で強大なエネルギーの塊でもある矢を掴んで止めたのだ。
「嘘だろッ⁉」

審判は不敵な笑みを浮かべてエネルギーの矢を握り潰す。
エグゼと二人のエクシードの距離は百メートルくらい離れている。その距離で尚且つ『ＡＲＲＯＷ　ＦＩＧＨＴＥＲ』の超感覚を用いた狙撃が外れる訳がない。違う。審判が手を出さなければ確実に女エクシードを射止めていた。確証はある。審判が素手で掴み、止めてから女エクシードは矢に反応していたからだ。だとすると審判は女エクシードよりも遥かに強い存在なのだとエグゼは思う。
「時間切れか」
エグゼは『ＰＬＡＩＮ　ＦＩＧＨＴＥＲ』へとボディーチェンジし、変身の強制解除を防ぐ。すると視力が元に戻ったせいか先程まで審判の隣にいた女エクシードの姿が見られない。辺りを見回そうとした時だった。胸を何かに殴打された痛みと共に自身の身体が吹っ飛んでいた。エグゼはすぐに立ち上がり身構える。
なんて速さだ。
怪人態に変身した女エクシードの動きが見えなかった。
「落ち着け。残像だけでもエグゼの複眼で終える」
『いや、先輩、残像は通り過ぎた物体の象なので、残像をおっても意味ないと思います』
「わ、分かってら！　アローの矢が止められて焦ってんだよ」
『審判ならもう姿を消したみたいですよ。ドライビデオをアクションモードで先輩の近

くで待機させていたので、映像で確認しました』
「マジか……うおッ！」
胸の装甲から甲高い音を鳴り、同時に火花が散った。今度は地面に踏み止まり胸を押さえながら辺りを見回す。
「薄らとだが見えた。コイツ、拳が蹄みたいになってやがるのか。装甲を引っ掻いているって感じじゃ無い。せめて姿をハッキリ見られたら」
『それなら任せて下さい。ドライカメラが今のド派手なやられっぷりを撮影していたので』
「言い方酷くないか？」
返答は返ってこなかった。おそらく、撮影した映像を解析しているのだろう。
「これだけ速いとエグゼイダーに乗って戦った方が勝算あるかもな。少なくとも、こんな開けた所じゃ、こっちの分が悪過ぎる。どこか狭くて速さが関係しない所におびき寄せれたら」
風を切る音が耳に入る。
来る。
今度は……。
「左か！」

「右だ！」
「知ってるよ！」
　エグゼは左に右拳のストレートを打ち込むフェイントを混ぜて、右から来る女エクシードの顔面に回し蹴りを食らわせる。以前の必殺カウンターキックのアークルのエネルギー無しバージョンだ。それをもろに食らった女エクシードは走行速度とエグゼのキック力が生んだ破壊力抜群のカウンターキックを受けて地面に倒れ込む。
　地面に倒れ込んだ拍子に後頭部を打ったのだろうか、はたまた脳震盪を起こしたのか気絶してしまった。
『解析が終わりました！』
「ああ。こっちも終わったと思う」
　あまりのタイミングの良さにエグゼは驚くが、それが露わになることは無かった。
『一様、女エクシードの正体はガゼルエクシードですね』
「ガゼル？」
　聞き覚えのない動物の名を復唱する。
　次の瞬間、目を覚ましたガゼルエクシードの目にも止まらぬ速度の拳を顔面に食らい地面に伏してしまった。突然の攻撃にエグゼは反応することができなかった。それどころか隙をついてガゼルエクシードは颯爽と姿を消してしまった。

「……しまった……」

エグゼは力尽きたように倒れたまま起き上がろうとしなかった。

第２７話　常識・逃走

六月二十四日午後九時五十五分。堂森町内。

『馬鹿！　先輩、早く追い掛けて下さい！』

空からの珍しい怒号にエグゼ――晴也は飛び起きてすぐにエグゼイダーを走らせた。しかし町中に出た途端に夜中を徘徊する者の視線が集まり、加えてＳＮＳに目撃情報を掲載されたのかどんどん道中の人が増えていく。最後にはスマートフォンを構える者まで現れた。奇しくも変身を解除せざるを得ない状況になってしまったエグゼは曲がり角と車の死角を利用して変身を解除した。

擬装用ホログラムを展開したエグゼイダーの性能は、変身していない晴也が運転することを前提に考えられているためかなり抑えられている。それでも一般のバイクとは明らかな性能差はある。そのためガゼルエクシードを追跡するには事足りる。と思っていた。先程までは。

「見失った。ガゼルエクシードの奴、こっちが階段上れないことを良いことに……」

そう。ガゼルエクシードが逃げ込んだ先には壁のような大量の階段がそびえ立っていた。擬装用ホログラムを展開した状態のエグゼイダーでも上ることは出来るだろう

が、いかんせん晴也にはそんな技術はない。今までエグゼイダーを駆ってきた路面はそれこそ荒れ果てた道とも言えない道もあった。それでも走ってこられたのはエグゼに変身していたからだ。

しかし、今回は違う。

晴也は奥歯を噛み締めながら悔しさを露わにして階段の先を睨み付けた。

この時代のエグゼはしつこいのか。

それがガゼルエクシードの率直な感想だった。まだ人間を十三人しか殺害できていないことに焦りを感じているためか、ガゼルエクシードはエグゼに振り切ったばかりにも限らず次の獲物を探すため駆け出す。

エグゼと違いエクシードは人間からその正体を隠す必要が無いため怪人態のままでも一日中過ごしていられる。そして人間に対する殺戮も抵抗がないため目の前に人間がいればそれを狩るだけだ。そのはずなのだが、どうしてだか足が思うように動かない。それどころか人間の数が徐々に減っている気がする。

何の音だろうか。古代の人間が使っていた警告を示す鐘の音に似ている気がする。

その音はどうやら黒と白の車という乗り物から発せられていた。そしてその中にいるケイサツが人間達をこの場から離れさせて民家に帰しているのだ。

「余計なことを……ッく！　足が……」

ガゼルエクシードは自らの足に触れてようやく自分の足に何が起こっているのか理解した。両足の脹脛ははち切れんばかりに膨れ上がり、太腿も岩のように固くなっている。つまり、疲れているのだ。それは単純明快な答えだが、ガゼルエクシードにとって走り疲れるということは今までに無い屈辱だった。おそらく、エグゼから受けたカウンターキックやフェイントを混ぜた攻撃で受けたダメージが足に蓄積されたのだろう。そしてそれが今解き放たれたのだ。

ガゼルエクシードは五時間という時間の中でどうしても人間を三十人殺害しなければならない。残り時間は四時間、あと十七人殺害しなければならない。このチャンスは殺戮を開始してからの五時間しかチャンスがないため、焦らずにはいられない。

ガゼルエクシードは封印される以前にも殺戮を行った。しかし、当時の殺戮では中級エクシードとして位を上げることは出来なかった。その理由は五時間で三十人というノルマを達成することが出来なかったからだ。現代に蘇り、最後の下級エクシードとなってしまったガゼルエクシードは殺戮民族としてのプライドがノルマを達成させようとしていた。

しかし、足が動かないのであれば人間を殺害することは出来ない。ガゼルエクシードは苦渋の決断として三十分だけ休息を取ることにした。

晴也はエグゼイダーから降り階段を駆け上がった。だが、そこにはもう尋常ならざる存在の姿は無かった。

『どうやら逃げられたみたいですね。一先ず撤退しますか？』

エグゼイダーに搭載された通信機から空の声が出力される。

「いや、もう少し探してみる。アイツ等の話によると五時間が勝負みたいだ」

『五時間ですか？』

空は疑問を抱いたのか復唱する。

「ああ。五時間の内に三十人の人間を殺害すれば次の位に上がれるらしい。多分今まで出てきたエクシードも五時間以内に三十人の人間を殺害しようとしてたんじゃないのか？　位を上げるためとは言え、殺害を起こすなんて」

『それがエクシードの常識なのかもしれませんね』

「そんな常識……許せるかよ。とりあえずこの辺一帯の地域を監視できるようにドライビデオを放った。あとは衛生で……」

そこで晴也の言葉が途絶えた。

人の気配を察知した晴也は振り返る。するとそこには見覚えのある人物が肩で息をして立っていた。

「あ、えっと……刑事さんですよね？　オックスエクシードの時にいた」
「あ、ああ。そうだ」
　目の前の刑事はまるで先程までマラソンでもしていたかのように息を荒くして汗をかいている。その様子にただならぬものを感じた晴也はバックルをボディーバックから取り出す。それを見た刑事は、待て、と言わんばかりに手を突き出す。
　晴也はそれを受けてバックルをボディーバックに戻した。
「バイクを走らせる君を見つけてね。走って追い掛けてみたんだが、これほど疲れるとは思わなかったよ」
「タフですね。刑事さん」
　晴也はエグゼイダーのエンジンを切り降りる。
「私は堂森署の刑事、上條順平だ。先日は助けてくれたこと感謝している」
「僕は……」
　ここで正体を明かせば後で空に何を言われるか分からない。そう思った晴也は自分の名前を言い出せなかった。ことも無かった。
「俺は五条晴也です。戦ってる時の方はエグゼって呼んでます。って言うかエクシードに呼ばれてます」
「エクシードと言うのは奴等、怪人のことか？」

「はい。アイツ等は古代の人間がアークルっていう霊石を取り込んだ列記とした人間です。まあ、同じ人間とは思いたくないですけどね」
気付けば晴也は手を強く握り震えていた。
瞬間、晴也のボディーバックから着信音が流れた。
「いいですか?」
順平は頷いて了承する。
晴也はビートルフォンを取り出して電話に出る。
「もしもし?」
『先輩。ガゼルエクシードとは別のエクシードが出ました!』
「別の奴⁉　二体同時か……。分かった。今どこにいる?」
『堂森港です!　前に戦った氷のエクシードに反応が似ているので、おそらくは……』
「アイツか。すぐに行く」
晴也は電話を切り、エグゼイダーに跨る。
「すいません。話はまた今度!」
言い終えてすぐに晴也はエグゼイダーを走らせて晴也は現場に向かった。

第２８話　再戦・助言

六月二十四日午後十時二十分。堂森港。

晴也は堂森港に着くやエグゼイダーを停車させ、飛び降りるように降りて、以前に氷のエクシードと戦った場所まで駆ける。

街灯に照らされるそこに一人ぽつんと立つ影。

人間の形をしているが正確には人間ではない。木造りで出来ている足元は凍り付いており、冷気が漂っている。晴也の存在に気付いた氷のエクシードは向かい合うように立ち位置を変える。その一歩一歩を辿るように木造りの足元が凍る。そんなことはお構い無しに氷のエクシードはゆっくりと、だが、確実に晴也との距離を埋めていく。

「野郎。舐めやがって！」

晴也は前回の反省を踏まえてボディーカードとソウルカードを選び変身する。

『ＦＬＡＭＥ』

『ＳＷＯＲＤ』

「変身！」

掛け声と共にバックルとソウルガジェットのボタンを同時に押す。

『ＦＬＡＭＥ』

『ＳＷＯＲＤ　ＦＩＧＨＴＥＲ　ＧＯ　ＡＨＥＡＤ』

全身が黒い強化皮膚に覆われ、胴部、両肩部、前腕部に分厚い西洋甲冑のような銀色の装甲が装着される。さらに霊石アークルが生み出す強大なエネルギーが全身に伝わるようにエナジーラインが通う。右手を開くと鍔がアルファベットのＵの字のように伸びた角が特徴的な刀――エグゼソードが出現、掴む。そしてボディーの変身が終えると、全身の装甲と特徴的な複眼が途端に燃え盛る炎のように赤く染まる。

瞬く間に変身を終えるとエグゼは自身の超重力を気にせずエグゼソードを振り上げ斬り掛かる。

『ＳＷＯＲＤ　ＦＩＧＨＴＥＲ』の重量は『ＰＬＡＩＮ　ＦＩＧＨＴＥＲ』の一・五倍近くある。そのため得意とする戦法は自分から駆け出して、エグゼソードを振り回し斬撃を浴びせるのではなく、エグゼ随一の防御力を誇る鉄壁の鎧を盾に、じわじわと相手との距離を詰めて強烈な一撃で倒す、だ。

しかし、前回の敗戦もあってかエグゼは得意とする戦法とは逆の行動を取っている。

縦横無尽に振るわれるエグゼソードと言えば聞こえは良いが、即ちそれは無闇やたらにエグゼソードを振り回しているだけだ。氷のエクシードはそれらを容易く躱し、隙あらば重装甲の鎧に拳や蹴りを食らわせている。だが、流石はエグゼ随一の防御力を誇っ

ているだけあって全くダメージを感じさせない。
「なるほど。確かに固いな。これでは武器を持たない下級エクシードには荷が重い気がする。だが、上級エクシードの僕にはそんなことは関係無い！」
怒号を飛ばす氷のエクシード。そこへエグゼはエグゼソードを振り下ろす。それを氷のエクシードは白刃取りする。エグゼは抗おうとめいっぱい力を入れるが刀身が震えるだけで手から刀身が離れない。
「なんて力だ。クソッ！　『ＳＷＯＲＤ　ＦＩＧＨＴＥＲ』の怪力と『ＦＬＡＭＥ』の闘志の攻撃力最強コンボの力でも動かないだと……ふざけんな！」
エグゼはソウルガジェットのボタンを素早く二回押す。
『ＳＯＵＬ　ＤＲＩＶＥ』
全身の装甲から炎が噴き出し、さらにパワーが増す。ようやくそれで刀を引き戻せそうになったところへ、氷のエクシードの膝が一番装甲の薄いバックルと胸部の装甲の間に叩き込まれる。瞬間、内側から弾けるように装甲から噴き出した炎が消え、エグゼは膝をつき、悶絶する。
「この程度なのか現代のエグゼとは。前の戦いもそうだが、お前は中級エクシードの実力にも敵わないだろう。だから、もう戦うのはよせ。所詮は現代人の力だ。古代の鍛え上げられた我々の力には勝てん」

「つるせェ！」
エグゼは膝をついたままエグゼソードを拾い上げ横薙ぎする。
だがそれは虚しく空を切るだけだった。
「勝てる勝てないの話じゃねェんだよ。俺しかいないならやるしかないんだ。お前等のために誰かの悲しむ顔を見たくない。笑顔でいて欲しいから……戦うんだ」
エグゼは足に踏ん張りを利かせてなんとか立ち上がり刀を構える。
「来い！　人間の底力、見せてやるよ！」
力強いその言葉を受けて氷のエクシードは構えを解き、棒立ち同然になっていた。いや、むしろ最初から命を懸けた本気の殺し合いをしていたのはエグゼだけだ。以前の氷のエクシードの戦い方もそうだ。止めを刺せそうなところを何度も見逃している。まるで立ち上がることを望んでいるかのようにエグゼを見下ろしている。
余裕から来る慢心か。
それともただ見下しているだけか。
エグゼには、晴也には分からない。それでも立ち上がり戦わなければならない。
「僕の名前はブリューナク。今殺戮を行っているのはガゼルエクシード。高速で動いて人間を殺す。殺された者は自分が殺されたことにも気付かないという。彼女は今、休憩中みたいだけどすぐに動き出す。プライドが高いから挑発をすればすぐに乗ってくる

と思う。例えばそこの乗り物で競争を誘うとか」
　急に喋り出す氷のエクシード――ブリューナク。
「信じる信じないは君次第だ。エグゼ」
　そう言い残してブリューナクは霧を起こしてその場から消えた。
　しばらく動かなったエグゼはふとした瞬間に立ち上がり辺りを見回す。当然のことだがブリューナクの姿は無い。肩で息をしながら刀の刃を見てみると微かだが何ケ所か凍っていた。いつでも刀を凍らせて折ることはできたということだろうか。そんなことよりもエグゼの脳裏にはブリューナクが喋っていた内容が巡っている。
「信じる信じないは君次第だ、か。エクシードの言うことを信用するべきなのか」
『私は本当だと思います』
　空の声がマスク裏の通信機から出力される。
「どうしてだ？」
『なんて言うんでしょうか。ブリューナクは今まで出てきたエクシードと違う気がするんです。人間を襲うようなエクシードには見えないと言いますか』
「……分かった」
　エグゼは自分でも分かるくらい拗ねたような口調で言っていた。
　悔しい。

空がブリューナクの言葉を信じたからじゃない。

ブリューナクに手も足も出なかったことが悔しい。頭に血が上ってはいたがそれでも倒す算段はついていた。しかし、そのことごとくをブリューナクは、説き伏せ、打ち破り、逆に反撃の嵐を巻き起こした。

――今の俺じゃ勝てない。

自然と拳に力が入る。

『先輩、ガゼルエクシードが動き出しました！』

空からの朗報に我に返ったエグゼは『ＦＬＡＭＥ　ＳＯＵＬ』はそのままで『ＰＬＡＩＮ　ＦＩＧＨＴＥＲ』にボディーチェンジしてから、すぐさまエグゼイダーを走らせる。

「空、この辺りに高速移動が役に立たない場所ってあるか？」

『この辺りだと……先輩が以前戦った隣町の廃病院しかありません。行けそうですか？』

「分かった。やってみる」

エグゼはフルスロットルでガゼルエクシードの下へ向かった。今度は逃がさない、と心に誓って。

第２９話　闘争・炎拳

エグゼイダーを走らせて数分も経たない内に高速移動するガゼルエクシードを見つけることが出来た。エグゼはさらにエグゼイダーの速度を上げてガゼルエクシードの隣につける。その速度は普通のバイクでは到底出すことができないものだ。そんな速度だからか前方の景色がまるで早送り再生のように早々と去って行く。いや、去っているのはエグゼとガゼルエクシードだ。

ガゼルエクシードは負けじと加速するが、それに食い付くようにエグゼイダーはぴったりと後を追う。

「何ッ⁉　私が振り切れないだと！」

先程、エグゼが振り切られた原因は歩道やバイクでは進むことができない場所にガゼルエクシードが逃げ込んだからだ。加えて、その時のエグゼは五条晴也に戻っていたため追い掛ける術はなかったのだ。

だが、今回は違う。

エグゼはエグゼイダーを駆り、遂にガゼルエクシードの前を走った。そのままエグゼは振り返ることなく隣町の廃病院へ向かった。ブリューナクが言っていた通り、プライ

ドの高いガゼルエクシードは瞳から溢れんばかりの憤怒の炎を滾らせて後を追ってくる。エグゼはマスクに搭載されたディスプレイによって最短ルートで隣町の廃病院を目指す。しかし、その最短ルートには振り切られた時のような歩道や横断歩道橋はほとんど無い。さらに深夜問わず日中でも人気が少ない車道を選び示している。

エグゼイダーとガゼルエクシードの競争は数十分でその会場を堂森町の隣町に残された廃病院へと移す。立体駐車場らしき場所から侵入し、屋上に近付くにつれてその進行方向を病院内へと変え、今は作動しなくなった硝子張りの自動ドアを突き破り病院内に入る。廊下を、フロアをエグゼイダーが颯爽と駆け抜けていく。その背後からガゼルエクシードが猛威を振るって追い掛けてくる。まず日常では走ることの出来ない場所にエグゼは、晴也は胸がはち切れんばかりに緊張し、道とも言えない道を探し出し、エグゼイダーを走らせる。時には広い階段を下り、踊り場で壁にぶつかりそうになりつつも、エグゼイダーの前輪を浮かせて壁に叩き付けるようにし、それから方向転換して階段を下り切る。ガゼルエクシードも同じ様に壁を垂直に走りながら方向転換して必死に食らい付く。

しばらく、そんなことを続けていると広い場所に出た。そこは至る所に机や椅子があり、そのどれもが古びてちゃんと机、椅子としての機能を果たしている物はない。その奥には厨房らしき場所が見えた。そう。そこは元食堂なのだ。

　エグゼはエグゼイダーを急停車させて、その反動を利用して後輪を浮かせて横向きに一回させる。まるでバッターが投げられた球を打つように、ガゼルエクシードの胸部に叩き付ける。ガゼルエクシードはもろに食らい、空中で何度も回転してから埃やひび割れが目立つ白い床に身体を激突させる。流石の威力にエグゼはマスクの向こう側で目をパチパチさせていた。すると当然の如くガゼルエクシードが立ち上がる。エグゼもエグゼイダーから降りて構える。

「ここまで来るのに大分走っただろ。もう走れねェはずだ」

「何を……！」

　ガゼルエクシードは走り出そうとしたが足が思う通りに動かない。

「……貴様、図ったな！」

「俺じゃないけどな」

「ふざけるな！」

　ガゼルエクシードは普通の速度、エグゼ等が走る速度で蹄の様な拳を振るう。流石にエクシードなだけあって攻撃の手は早い。高速では無いと思い油断していれば間違いなく腹を顔面を殴り付けられたであろうが、エグゼはそれ等を一つ一つ丁寧に受け止め、いなし、流し、的確に打撃を加える。

『ＦＬＡＭＥ』の効力もあって打撃を加える度に直撃した箇所から焼け焦げた臭いが鼻

腔を擽る。
ガゼルエクシードは跳躍し、岩の様な筋肉を用いた脚力を応用して飛び蹴りを食らわせる。のけぞるエグゼに追撃を食らわせて、最後に膝を顔面に直撃させて吹っ飛ばす。エグゼは何回か転がり仰向けになる。そこへガゼルエクシードの体重を乗せた踏みつけ攻撃が腹部に炸裂し、エグゼは呻き声を上げる。しかし、エグゼはその足を両手で固定器具のように固定するや、ガゼルエクシードの背中に蹴りを入れる。傍から見れば足をジタバタさせて偶々当たったように見えるが、これも決死の抵抗なのだ。
これは喧嘩ではない。
ルールがある試合でもない。
これは正真正銘の命を懸けた戦い。
手を抜くことはもちろん油断することも許されない。そのどちらをしても繋がるのは『死』だけだ。
「はぁはぁはぁ……」
お互いに息を切らせているが休む隙を与えない。
ガゼルエクシードは両拳を振るった連続攻撃を繰り出す。だが、その全てをエグゼは弾き、喉へ肘を、身体を回転させて腹部に右拳をそれぞれ撃ち込む。まさに完璧な反撃にガゼルエクシードは後退る他なかった。

「止めだ！」
　エグゼは素早くソウルガジェットのボタンを二回押し、バックルの左上の赤いボタンを押す。
『ＳＯＵＬ　ＤＲＩＶＥ』
『ＣＨＡＲＧＥ　ＡＮＤ　ＳＴＲＩＫＥ』
　装甲から炎が溢れ出し、アークルから生成された強大なエネルギーがエナジーラインを通ってエグゼの右拳に充填される。それに合わせて装甲から溢れ出た炎も右拳に収束され、エグゼの右拳が燃え上がる炎の拳へと変貌する。
　エグゼは雄叫びを上げて駆け出し、おぼつかない足取りのガゼルエクシードの鳩尾に叩き込む。瞬間、炎がガゼルエクシードを内側から焼却し、強大なエネルギーがガゼルエクシードの体内に埋め込まれたアークルを破壊して爆散する。
　爆発の影響で辺りがさらに荒廃してしまったが崩れることはなかった。それだけが心配だったエグゼは一先ず安堵の息を漏らす。
『やりましたね。先輩』
「ああ。すぐに帰る」
　そう言ってエグゼはエグゼイダーに跨り真っ直ぐ天道家に戻った。その途中で何台かのパトカーを横切ったがどれにも上條順平の姿は無かった。

六月二十四日午後十一時。堂森町内。

人気の無いはずの廃ビルに集団の影がある。彼等の服装は現代の物とは違ってどこか古風にも、未来的にも見える。いや、どちらかと言うと異文化、文明を思わせるその服装は現代からしてみると浮いて見える。そんなことを気にする素振りを見せない彼等は一人の男の登場に胸を躍らせ円陣を組むように集まる。

一人は金髪の幼女――イフリートだ。そう。この集団は古代の人間が霊石アークルの力によって変身能力へたエクシード達だ。

「ヤッホー審判ちゃん」

「審判ちゃんではない。審判だ」

「一緒じゃん」

ケタケタと笑いながらイフリートが言う。

「あれ？　ブリューナクがいない気がする。誰かブリューナクの居場所知らない？」

「弟だろ。自分で探せしたら？」

アフロ頭をした細身の青年がイフリートの問いに答える。返って来たのはそれだけで他の者も「同意見だ」と言わんばかりにイフリートに視線を送る。イフリートは頬を膨らませてそっぽ向く。

審判はそんなイフリートを見て、やれやれと首を振り一度咳払いする。
「これより殺戮を開始する。人間を殺すのも良し、エグゼと戦うのも良し。位を上げたい者は制限時間内に目標人数の殺害を達成するのも良い。しかし、今回の殺戮には条件を付ける。我らが封印される前のこの地と現在の差が明らかに多きい。そのため一人当たりの殺戮時間を二日間とする。尚、エグゼと戦った者には二日間の延長の権利を与える。この時代の人間もある程度は抵抗する。存分に楽しむと良い」
審判が言い終えるとエクシード達は歓喜の笑みを浮かべる。
最初の殺戮者は誰だ。俺か？　私か？　エクシード達は各々の興奮する気持ちを押さえながら審判の顔をジッと見詰める。
「最後の下級エクシードであるガゼルエクシードは死んだ。よって中級エクシードから殺戮を開始する」
中級エクシード達は一歩前に出る。
「最初の殺戮者は……お前だ」
審判が指差す方向を全員が辿る。そこに立っている黒髪で目が細く薄着の青年は不敵な笑みを浮かべ、
「明日の十時から殺戮を開始する。それでいいか？」
「もちろんだ」

審判は踵を返してその場から去ろうとしたが、今いる場所があまり広くないことに気付き、ドラム缶を背もたれにして座った。

「うわ、かっこ悪」

イフリートはこれから始まる殺戮を前にして高らかに笑っていた。